

埼玉県病害虫防除所業務年報 (令和4年度)

埼玉県病害虫防除所

埼玉県病害虫防除所の沿革

年 月	概 要
昭和 27 年 7 月	植物防疫法（昭和 25 年 5 月 24 日法律第 151 号）に基づき、「植物防疫施設に関する条例」（昭和 27 年 7 月 18 日条例第 55 号）が公布され、県内 8 か所の地方事務所に、北足立、入間、比企、秩父、児玉、大里、北埼玉、埼玉葛の各病害虫防除所が設置された。1 防除所当たり 1～2 人の専任技術職員が配置され、所長は地方事務所長が兼務した。
昭和 31 年 8 月	地方事務所が廃止され新たに農林事務所が設置されたことに伴い、各農林事務所に病害虫防除所が併設され、専任職員に加えて 1 防除所当たり 3～7 人の農林事務所兼務職員が配置された。なお、所長は農林事務所長が兼務した。
昭和 53 年 4 月	秩父農林事務所が廃止され秩父農林振興センターが設置されたことに伴い、秩父病害虫防除所は秩父農林振興センターに併設された。
昭和 58 年 4 月	8 か所の病害虫防除所を 1 か所に統合し、熊谷市の農業試験場（現：農業技術研究センター玉井試験場）内に「埼玉県病害虫防除所」が設置された。各農林事務所及び秩父農林振興センターには、駐在職員及び兼務職員が配置された。
平成 9 年 4 月	川越、東松山、行田の各農林事務所の廃止に伴い、新たに設置された農林振興センターに駐在職員及び兼務職員が配置された。その後、農林事務所が順次廃止され、新たに設置された農林振興センターに駐在職員及び兼務職員が配置された。
平成 17 年 4 月	職員の駐在制が廃止され本所に集約された。なお、兼務職員は引き続き各農林振興センターに配置された。
平成 22 年 4 月	組織改正により、農林総合研究センター水田研究所から肥飼料検査業務が移管された。
平成 27 年 4 月	農林総合研究センター水田農業研究所の廃止に伴い、農業技術研究センター（熊谷市須賀広）に事務所を移転した。
平成 30 年 4 月	農業技術研究センター病害虫防除対策担当との兼務になった。

<参 考>

植物防疫の施設に関する条例（昭和二十七年七月十八日 条例第五十五号）							
第一条	植物防疫法（昭和二十五年法律第百五十一号）第三十二条第二項の規定による病害虫防除所の位置、名称及び管轄区域並びに第三十三条第一項の規定による病害虫防除員を置く区域は、この条例の定めるところによる。						
第二条	病害虫防除所の名称、位置及び管轄区域は、次のとおりとする。						
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>名 称</th> <th>位 置</th> <th>管 轄 区 域</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>埼玉県病害虫防除所</td> <td>熊 谷 市</td> <td>埼 玉 県</td> </tr> </tbody> </table>	名 称	位 置	管 轄 区 域	埼玉県病害虫防除所	熊 谷 市	埼 玉 県
名 称	位 置	管 轄 区 域					
埼玉県病害虫防除所	熊 谷 市	埼 玉 県					
第三条	病害虫防除員を置く区域は、市町村の区域とする。						
第四条	この条例施行に関し必要な事項は、知事が定める。						

目 次

1 埼玉県病害虫防除所の概要

(1) 名称及び所在地	1
(2) 病害虫防除所の業務	1
(3) 組織体制	2
(4) 職員及び事務分担	2
(5) 病害虫防除員等の設置	3

2 病害虫発生予察

(1) 対象作物及び有害動植物	4
(2) 予察ほ場及び巡回調査地域等	
ア 県予察ほ場	8
イ 予察灯設置ほ場	8
ウ 巡回調査地域	9
エ フェロモントラップ等調査	10
(3) 令和4年度の主な病害虫の発生とその防除対策	
ア 主要病害虫の発生と防除対策の概要	11
イ 令和4年度病害虫発生程度別及び防除面積	24
(4) 令和4年度の病害虫発生予察情報等の発信	
ア 病害虫発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況	29
イ 発生予察情報（発生予察、注意報、特殊報等）、病害虫発生現況報告等の外部への提供	31
ウ 発生予察ツールを用いた発生消長予測情報の提供	31

3 病害虫防除指導

(1) 病害虫防除手法等に関する相談	32
(2) 無人ヘリコプターによる空中散布等の防除指導	32
(3) 農薬展示ほ設置等に関する指導	32
(4) 研修会等の指導	32
(5) 防除対策資料等の作成	33

4 植物の国内・輸出検疫調査等

(1) 検疫病害虫侵入リスク管理調査結果	34
(2) 新規病害虫まん延防止対策調査結果	35

5 農薬安全使用対策

- (1) 農薬危被害防止対策 3 6
- (2) 農薬販売者の届出店舗数及び立入検査結果 3 6

6 病害虫関係資料

- (1) 令和4年度発表の病害虫発生予察注意報等
 - ア 注意報(第1号、第2号、第3号、第4号、第5号) 3 8
 - イ 特殊報(第1号) 5 3
 - ウ 病害虫防除情報(果樹カメムシ類、斑点米カメムシ類、チャキイアザミウマ、吸実性カメムシ類) 5 5
- (2) 病害虫発生予察調査等結果
 - ア 水稲・麦
 - (ア) フタオビコヤガ(イネアオムシ)のフェロモントラップ調査(4~9月) 6 4
 - (イ) 麦ほ場におけるウンカ・ヨコバイ類の生息密度調査(5月) 6 5
 - (ウ) 水稲予察灯調査(5~9月) 6 6
 - (エ) いもち病(葉いもち)感染好適条件出現状況(BLASTAM)(5~9月) 7 1
 - (オ) トビイロウンカ、セジロウンカ、コブノメイガ飛来予測日回数(5~9月) 7 3
 - (カ) スクミリンゴガイの被害状況調査(6~7月) 7 4
 - (キ) 水稲観察地点調査(6~9月) 7 5
 - (ク) イネツトムシ発育予測(7月) 7 7
 - (ケ) フタオビコヤガ(イネアオムシ)発育予測(7月) 7 7
 - (コ) いもち病発生状況調査結果(7月) 7 8
 - (サ) 水稲の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果(7月) 7 9
 - (シ) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果(2月) 8 0
 - (ス) 農業技術研究センター 県予察ほ場(玉井試験場)調査結果(6~9月) 8 2
 - イ 野菜等
 - (ア) ハスモンヨトウのフェロモントラップ調査(4~11月) 8 4
 - (イ) オオタバコガのフェロモントラップ調査(4~11月) 8 4
 - (ウ) シロイチモジヨトウのフェロモントラップ調査(4~11月) 8 5
 - ウ 果樹
 - (ア) ナシヒメシンクイのフェロモントラップ調査(3~10月) 8 5
 - (イ) 果樹カメムシの予察灯調査(4~10月) 8 6
 - (ウ) 果樹カメムシのフェロモントラップ調査(4~10月) 8 7
 - (エ) 果樹カメムシ類の越冬密度調査結果(3月) 8 8
 - エ 茶
 - (ア) チャハマキのフェロモントラップ調査(4~11月) 8 9
 - (イ) チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ調査(4~11月) 8 9
 - (ウ) チャノホソガのフェロモントラップ調査(4~11月) 8 9
 - (エ) 茶業研究所 県予察ほ場調査結果(4~3月) 9 0

(3) その他	
ア 令和4年度熊谷の気象データ	9 2
イ 無人ヘリコプターによる防除実績	9 3
ウ 過去の病虫害発生予察警報、注意報、特殊報発表状況	9 4

7 肥料検査の概要

(1) 検査	9 8
(2) 登録及び届出	1 0 2
(3) 調査事業等	
ア 肥料生産量調査	1 0 5
イ 肥料流通量調査	1 0 8
(4) 畜政推進事業	1 1 2

8 飼料検査の概要

(1) 検査	1 1 3
(2) 調査事業	1 1 6

1 埼玉県病害虫防除所の概要

(1) 名称及び所在地

名 称	位 置	電 話 番 号	管 轄 区 域
埼玉県病害虫防除所 (埼玉県農業技術研究センター) 病害虫防除対策担当	〒360-0102 熊谷市須賀広784 埼玉県農業技術研究センター内	電話:048-539-0661 (病害虫関係) 048-539-0662 (肥飼料関係) F A X:048-539-0663	埼 玉 県

(2) 病害虫防除所の業務

ア 病害虫発生予察

(ア) 主要 16 農作物の 167 病害虫発生予察調査の実施

(イ) 病害虫発生予察会議の開催及び発生予報の作成

(ウ) 警報、注意報、特殊報等の発表

(エ) ホームページによる情報発信

イ 病害虫防除対策

(ア) 検疫病害虫侵入リスク管理対策

(イ) 重要害虫の防除対策

(ウ) 新規病害虫のまん延防止対策

(エ) 病害虫診断と防除指導

(オ) ホームページ、SNS 等による情報発信

(カ) 無人ヘリコプターによる空中散布の防除指導

(キ) 病害虫や農薬に関する相談への対応

(ク) 特別栽培農産物の認証への協力

ウ 農薬安全使用対策

(ア) 農薬適正使用対策の推進

(イ) 農薬取締法に基づく農薬販売届の受理及び販売店の立入検査、指導

(ウ) 農薬取締法に基づく指導

エ 肥料・飼料業務

(ア) 肥料の品質の確保等に関する法律に基づく肥料の検査及び指導

(イ) 肥料の品質の確保等に関する法律に基づく肥料の登録及び届出の受理

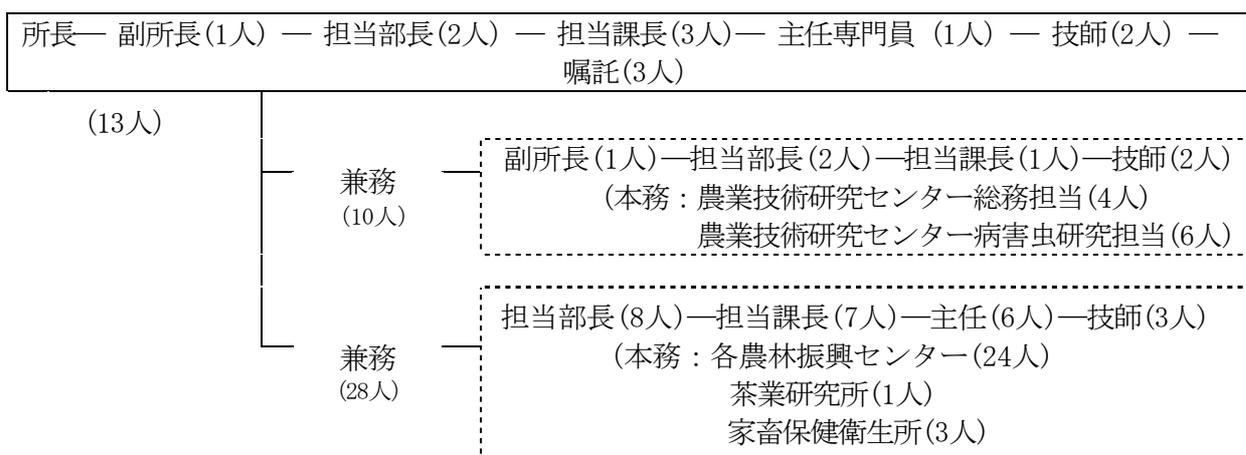
(ウ) 肥料生産量及び流通量の調査

(エ) 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律に基づく飼料の検査

(オ) 飼料の製造及び流通、飼料添加物の生産・流通量等の調査

(3) 組織体制

◎農業技術研究センター病虫害防除対策担当が防除所（本所）を兼務



(4) 職員及び事務分担

令和4年度病虫害防除所（農技研病虫害防除対策担当）職員事務分担

職名	氏名	担当作物等	担当農林
所長	植竹恒夫	所内(担当内)総括	
副所長	高井芳久	所内(担当内)総括補佐・予算の総括	
担当部長	石原美樹	花き・特産	さいたま・川越・秩父
担当部長	柄本利道	肥飼料検査・指導	
担当課長	岩崎 剛	肥飼料検査・指導	
担当課長	岩瀬亮三郎	野菜・果樹	本庄・大里
担当課長	大宅秀史	普通作物	加須
主任専門員	江森 孝	農薬取締法に関する事務・予察等に関する事務	
技師	松本はるか	果樹・野菜	春日部
技師	大野泰紀	普通作物	東松山
嘱託 (会計年度任用)	西 玲子	肥飼料検査事業の補助	
嘱託 (会計年度任用)	福井朋子	発生予察事業・農薬取締法関係事務の補助	
嘱託 (会計年度任用)	久保田篤男	発生予察事業の補助・検疫病虫害侵入リスク管理対策事業の補助	

(5) 病虫害防除員等の設置

ア 病虫害防除員の設置

植物防疫法第33条第1項の規定に基づき、病虫害防除員を16人（農業協同組合等職員12人、農業者4人）に委嘱した。

病虫害防除員は、病虫害防除所の地域担当職員と連携して、次に掲げる項目について業務を実施した。

- (ア) 病虫害発生状況の把握及び報告
- (イ) 病虫害発生状況に関する情報提供と防除指導
- (ウ) 農薬の安全使用指導
- (エ) その他、植物防疫事業に関する指導及び協力

イ 病虫害防除協力員の設置

病虫害発生予察事業に係る情報網の充実を図るため、病虫害防除員に加えて、病虫害防除協力員として農業共済組合職員9人に協力を依頼した。

病虫害防除協力員は病虫害防除所の地域担当職員と連携して、病虫害の発生動向の把握に努めた。

2 病虫害発生予察

農業生産の安定と生産性の向上を図るとともに、高品質で安全・安心な農産物を生産するため、主要 16 作物に被害を与える 167 病虫害の発消長や農作物の生育状況等を調査した。これらの調査結果と病虫害の生態、気象の経過と予報等を基に、病虫害の発生時期や発生量を予察し、生産者を始め農業団体や市町村、関係機関等に情報を提供し、病虫害の的確な防除を推進した。

(1) 対象作物及び有害動植物

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
普通作物	水 稲	いもち病、紋枯病、もみ枯細菌病、縞葉枯病、ばか苗病、稲こうじ病、ニカメイガ、セジロウンカ、トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ、イネミズゾウムシ、コブノメイガ、フタオビコヤガ、斑点米カメムシ類（アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシ）	イチモンジセセリ（イネツトムシ）、スクミリンゴガイ
	麦	うどんこ病、赤かび病	黒節病、黒穂病類（裸黒穂病、なまぐさ黒穂病）、アブラムシ類（ムギヒゲナガアブラムシ、ムギクビレアブラムシ）、ムギダニ、シロトビムシ類
	小 麦		さび病類（赤さび病）、縞萎縮病
	大 麦		さび病類（黄さび病、小さび病、黒さび病）、縞萎縮病、斑葉病
	かんしょ	ハスモンヨトウ	立枯病、つる割病、イモキバガ（イモコガ）、ナカジロシタバ、食葉性チョウ目幼虫
	大 豆	吸実性カメムシ類（ホソヘリカメムシ、アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ミナミアオカメムシ）、アブラムシ類（ダイズアブラムシ）、ハスモンヨトウ	ウイルス病、べと病、紫斑病、立枯性病害、葉焼病、莖疫病、シロイチモジマダラメイガ、マメシンクイガ、ウコンノメイガ、食葉性チョウ目幼虫、コガネムシ類（アカビロウドコガネ、アオドウガネ、ドウガネブイブイ、オオクロコガネ、ヒメコガネ、マメコガネ）、ダイズサヤタマバエ

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
果樹等作物	なし	黒斑病、黒星病、シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ）、ハダニ類（カンザワハダニ、ミカンハダニ、ナミハダニ、リンゴハダニ）、ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）、アブラムシ類（ナシアブラムシ、ワタアブラムシ、ユキヤナギアブラムシ）	赤星病、輪紋病、うどんこ病、カイガラムシ類（クワコナカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ）、ニセナシサビダニ
	茶	炭疽病、ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、ハダニ類（カンザワハダニ）、チャノホソガ	もち病、輪斑病、ヨモギエダシヤク、カメムシ類（ツマグロアオカスミカメ）、チャノミドリヒメヨコバイ、アザミウマ類（チャノキイロアザミウマ）、クワシロカイガラムシ、チャトゲコナジラミ
野菜	トマト	疫病、灰色かび病、葉かび病、アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ワタアブラムシ）、ハスモンヨトウ、コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、オオタバコガ	萎ちょう病類、青枯病、うどんこ病、黄化葉巻病、ハモグリバエ類、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ）
	なす	うどんこ病、灰色かび病、アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ、チューリップヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシ）、ハスモンヨトウ、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、ハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ）、オオタバコガ	半身萎ちょう病、青枯病、褐紋病、褐色腐敗病、すすかび病、半枯病、ホコリダニ類、ハモグリバエ類

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
野菜 （ 続 き ）	きゅうり	べと病、うどんこ病、灰色かび病、褐斑病、アブラムシ類（ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ）、ハスモンヨトウ、コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）	菌核病、モザイク病、黄化えそ病、退緑黄化病、ハモグリバエ類、ハダニ類（ナミハダニ）、食葉性チョウ目幼虫
	ブロッコリー	コナガ、ハスモンヨトウ、ヨトウガ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ	黒腐病、べと病、軟腐病、花蕾腐敗病、黒斑細菌病、黒すす病、アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハイマダラノメイガ
	ねぎ	さび病、黒斑病、べと病、アブラムシ類（ネギアブラムシ、ワタアブラムシ）、ハスモンヨトウ、アザミウマ類（ネギアザミウマ）、シロイチモジヨトウ	萎縮病、軟腐病、小菌核腐敗病、白絹病、黒腐菌核病、ネギコガ、ハモグリバエ類（ネギハモグリバエ）
	さといも	ハスモンヨトウ	汚斑病、疫病、アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハダニ類（カンザワハダニ）
	ほうれんそう	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハスモンヨトウ	立枯病、べと病、アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ）、ケナガコナダニ、シロオビノメイガ

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
野菜 （続き）	いちご	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、アブラムシ類（ワタアブラムシ、イチゴネアブラムシ）、ハスモンヨトウ、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ）、ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）	萎黄病、輪斑病、ホコリダニ類、コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）
	小計	16 作物、76 病害虫	16 作物、91 病害虫
	合計	16 作物、167 病害虫	

(注1) 「国の指定有害動植物」とは、国が指定有害動植物発生予察事業計画で定めた発生予察事業の対象病害虫。

(注2) 「県の有害動植物」とは、埼玉県が国と協議して設定した発生予察事業の調査対象病害虫。

(2) 予察ほ場及び巡回調査地域等

ア 県予察ほ場

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
	麦	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
果樹特産	なし	1	久喜市六万部（農業技術研究センター久喜試験場）
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
野 菜	トマト	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	きゅうり	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	いちご	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
計		7	

イ 予察灯設置ほ場

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻	6	川越市南田島、川島町上八ツ林 本庄市児玉町吉田林、熊谷市玉井、加須市大越、春日部市樋籠
果樹特産	な し	3	上里町長浜、春日部市内牧、久喜市六万部
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
計		10	

(注) () 書きのある予察灯は、() 内の機関が調査している予察ほ場である。

ウ 巡回調査地域

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻 (早植)	8	川越市小中居、川島町西谷、吉見町西吉見、熊谷市中曾根、加須市麦倉、春日部市樋籠、幸手市神扇、吉川市中井
	水 稻 (普通植)	6	坂戸市横沼、毛呂山町箕和田、嵐山町廣野、本庄市児玉町吉田林、美里町関、加須市大越
	麦 (大麦)	3	川島町芝沼、行田市上池守、白岡市太田新井
	麦 (小麦)	8	川越市古谷上、坂戸市片柳、川島町鳥羽井新田、本庄市児玉町吉田林、熊谷市飯塚、熊谷市樋春、行田市前谷、蓮田市駒崎
	かんしょ	1	三芳町上富
	大 豆	6	川越市古谷上、滑川町中尾、熊谷市樋春、加須市間口、蓮田市駒崎、白岡市太田新井
果樹特産	な し	7	鴻巣市常光、神川町植竹、上里町長浜、加須市鴻莖、加須市上種足、春日部市内牧、白岡市下大崎
	茶	4	所沢市下富、狭山市南入曽、入間市根岸、日高市森戸新田
野 菜	トマト	7	川越市南田島、川島町上大屋敷、本庄市小和瀬、上里町勅使河原、深谷市岡、加須市飯積、越谷市東町
	な す	3	本庄市児玉町小平、春日部市飯沼、杉戸町大塚
	きゅうり	7	川越市大中居、川島町吉原、本庄市仁手、熊谷市樋春、深谷市高畑、深谷市下手計、加須市不動岡
	ブロッコリー	3	本庄市田中、深谷市山河、吉川市川藤
	ね ぎ	5	さいたま市岩槻区大野島、本庄市田中、熊谷市飯塚、深谷市新戒、越谷市中島
	さといも	3	川越市中福、所沢市下富、狭山市堀兼
	ほうれんそう	3	川越市中福、狭山市堀兼、深谷市下手計
	いちご	5	吉見町久保田新田、吉見町一ツ木、本庄市仁手、加須市本郷、久喜市菖蒲町小林
計	79		

(注) 水稲（早植）：5月中旬までの移植、水稲（普通植）：5月下旬以降の移植。

エ フェロモントラップ等調査

対象作物	対象病害虫名	箇所数	設置場所
水 稲	フタオビコヤガ	2	熊谷市中曽根、加須市戸室
な し	ナシヒメシクイ	4	鴻巣市常光、上里町長浜、加須市鴻荃、春日部市内牧
	果樹カメムシ類	1	寄居町鉢形
茶	チャハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノコカクモンハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノホソガ	2	所沢市下富、入間市根岸
野 菜	オオタバコガ	4	本庄市児玉町小平、深谷市山河、越谷市中島、杉戸町大塚
	ハスモンヨトウ	3	熊谷市樋春、深谷市山河、久喜市菖蒲町小林
	シロイチモジヨトウ	3	深谷市新戒、越谷市中島、杉戸町大塚
計		23	

(3) 令和4年度の主な病害虫の発生とその防除対策

ア 主要病害虫の発生と防除対策の概要

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	葉いもち	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い7月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	6月下旬～7月上旬が高温少雨に経過したため、感染好適日が平年の半数以下となり、発生が平年よりやや少なくなった。	抵抗性品種への転換が進みつつある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	穂いもち	平年:－ 前年:－	平年:並 前年:－	散発にとどまった。	葉いもちの発生量は平年よりやや少なく、葉いもちの感染好適日も平年の半数以下であったためと考えられる。	感染好適日の発生状況を15日毎に発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	紋枯病	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年より早い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年より多かった。	6月下旬から8月中旬まで高温に経過したため、発生が助長された。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ばか苗病	平年:－ 前年:－	平年:並 前年:－	発生が確認されなかった。	種子更新と温湯消毒の徹底により密度が低下した。	種子更新と種子消毒の徹底を情報発信した。JA米では種子更新が徹底されている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	もみ枯細菌病	平年:－ 前年:－	平年:－ 前年:－	発生が確認されなかった。	種子更新と温湯消毒の徹底により密度が低下した。また、出穂期が高温、少雨となり、発生を抑制した。	種子更新と種子消毒の徹底を情報発信した。また普及している育苗箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	縞葉枯病	平年:並 前年:早	平年:やや少 前年:少	平年並みの6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	ヒメビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は過去10年で最も低く、ヒメビウンカの本田での発生量もやや少なかったため、本病の発生もやや少なくなった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。抵抗性品種への転換が進みつつあるが、感受性品種ではウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	稲こうじ病	平年:－ 前年:－	平年:－ 前年:－	発生が確認されなかった。	幼穂形成期から出穂期までの降雨日数が少なかった(連続した降雨は7月12～17日のみ)ため、発生が抑制された。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ニカメイガ	平年:早 前年:早	平年:多 前年:並	平年より早い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。予察灯誘殺数が平年より多く、本田での発生量も多い結果となった。	この作型では秋耕が定着しているため、水田内の越冬場所が減少しており、近年少発生傾向であったが、品種構成の変化(稈の太い品種の作付)などにより、世代を重ねるごとに増加した。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	セジロウンカ	平年:早 前年:やや早	平年:並 前年:多	平年より早い7月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並であった。	セジロウンカ・トビロウンカ飛来予測システムでは、6月までの飛来予測日数は1日と過去10年で2番目に少なかった。7月以降の飛来予測日数は不明であるが、予察灯にも誘殺されるようになり、平年並に本県への飛来があったと考えられる。	セジロウンカ・トビロウンカの飛来予測日数の動向を15日毎に発表し、注意喚起した(システム障害により情報発信は6月まで)。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	トビロウンカ	平年:－ 前年:－	平年:－ 前年:－	発生が確認されなかった。	セジロウンカ・トビロウンカ飛来予測システムでは、6月までの飛来予測日数は1日と過去10年で2番目に少なかった。7月以降の飛来予測日数は不明であるが、予察灯への誘殺もなかったため、本県への飛来が少なかったと考えられる。	セジロウンカ・トビロウンカの飛来予測日数の動向を15日毎に発表し、注意喚起した(システム障害により情報発信は6月まで)。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ヒメビウンカ	平年: やや遅 前年: やや早	平年: やや少 前年: 並	平年よりやや遅い6月第3半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	5月に調査した麦ほ場での成・幼虫密度は過去10年でも比較的高かったが、6月下旬～7月上旬の異常高温による発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量はやや少なかった。	保毒率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ツマグロヨコバイ	平年: やや遅 前年: やや早	平年: 並 前年: やや多	平年よりやや遅い6月の第3半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並となった。	全作型でのツマグロヨコバイ抵抗性品種作付割合は約5割で、耕種的防除による防除圧が高まっている。しかし、本作型では抵抗性品種作付割合が低いため、普通期栽培に比べると発生量が多くなる傾向がある。	ヒメビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	斑点米カメムシ類	平年: 遅 前年: 並	平年: 少 前年: 少	平年より遅い6月第4半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は6,7月で最大となった。発生量は平年より少なかった。アカヒゲホソドリカスミカメの発生が多く、山沿いではクモヘリカメムシの発生が見られる。	7月中旬に実施した斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査では比較的多かったが、7月12～17日の連日の大雨により、本田への飛び込みが抑制された可能性がある。	斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査及び防除情報を発表し、注意喚起した。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イチモンジセセリ	平年: — 前年: —	平年: やや少 前年: —	6月第6半旬に初発生を確認したが、散発程度で拡大には至らなかった。	近年は年々発生量が減少傾向にある。常発地での箱施薬剤利用が定着し、防除が徹底されているためと思われる。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	フタオビコヤガ	平年: — 前年: —	平年: やや少 前年: —	フェロモントラップの誘殺数は、平年より少なかった。現地水田では発生が確認されなかった。	近年は年々発生量が減少傾向にある。常発地での箱施薬剤利用が定着し、防除が徹底されているためと思われる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	コブノメイガ	平年: — 前年: —	平年: 並 前年: —	発生が確認されなかった。この作型では、過去10年でも発生が確認されていない。	近年は年々発生量が減少傾向にある。常発地での箱施薬剤利用が定着し、防除が徹底されているためと思われる。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イネミズゾウムシ	平年: 早 前年: 早	平年: 並 前年: 多	平年より早い4月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は6月で最大となった。発生量は平年並であった。	3～4月の気温が高かったため、越冬成虫の本田への飛び込みが早まったが、近年は発生量が減少傾向にあったため、発生量は平年並となった。	越冬場所(森林、堤防沿い)に近接する常発地帯では、育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	スクミンゴガイ	平年: — 前年: —	平年: 少 前年: 少	発生量は平年より少なく、欠株等の被害がほとんど見られなかった。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。12月下旬～1月上旬および2月の気温が低かったため越冬個体数が減少し、発生が抑制された。さらに、本作型の常発地は移植時期が5月初旬までの地域が多いが、5月上旬の低温で本田への侵入が遅れたため、被害につながらなかった。	耕種的防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	葉いもち	平年: 遅 前年: やや遅	平年: やや少 前年: 少	平年より遅い7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	6月下旬～7月上旬が高温少雨に経過したため、感染好適日が平年の半数以下となり、発生が抑制された。	ほぼ抵抗性品種となっているが、一部に常発地がある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	穂いもち	平年: 遅 前年: 遅	平年: 並 前年: 少	平年より遅い9月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年並であった。	葉いもちの発生量はやや少なかったが、9月の降水量が多かったため、平年並の発生となった。	感染好適日の発生状況を15日毎に発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につながった。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	紋枯病	平年: 遅 前年: 遅	平年: 並 前年: 多	平年より遅い8月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年並であった。	9月が平年より高温多雨であったため、後期に発生が助長された。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	ばか苗病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	種子更新と温湯消毒の徹底により菌密度が低下した。	温湯消毒の実施と育苗箱施用薬剤の励行を実施。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	もみ枯細菌病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	種子更新と温湯消毒の徹底により菌密度が低下した。	種子更新と種子消毒の徹底を情報発信した。また普及している育苗箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	縞葉枯病	平年:遅 前年:早	平年:やや少 前年:少	平年より遅い7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は過去10年で最も低く、ヒメトビウンカの本田での発生量もやや少なかったため、本病の発生もやや少となった。	ほぼ抵抗性品種となっている。保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、感受性品種を作付けている場合は防除に取り組むよう呼びかけている。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	稲こうじ病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	幼穂形成期から出穂期までの降雨日数が少なかったため、発生が抑制された。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	ニカメイガ	平年:早 前年:—	平年:多 前年:—	平年より早い8月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。本年は予察灯誘殺数が平年より多く、本田での発生量も多い結果となった。	この作型では米麦二毛作が多く、収穫後すぐに耕耘するため、平年の発生量が非常に少ない。少しでも発生すると、平年比多となる。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	セジロウンカ	平年:遅 前年:やや遅	平年:並 前年:やや少	平年より遅い7月第4半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。	セジロウンカ・トビイロウンカ飛来予測システムでは、6月までの飛来予測日数は1日と過去10年で2番目に少なかった。7月以降の飛来予測日数は不明であるが、予察灯にも誘殺されるようになり、平年並みに本県への飛来があったと考えられる。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測日数の動向を15日毎に発表し、注意喚起した(システム障害により情報発信は6月まで)。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	トビイロウンカ	平年:— 前年:—	平年:多 前年:—	9月第3半旬に水田での初発生を確認した。一部地域でのみの確認であったため、被害は確認されなかった。	セジロウンカ・トビイロウンカ飛来予測システムでは、6月までの飛来予測日数は1日と過去10年で2番目に少なかった。7月以降の飛来予測日数は不明であるが、予察灯への誘殺もなかったため、本県への飛来が少なかったと考えられる。平年の発生量が非常に少ないため、少しでも発生すると平年比多となる。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測日数の動向を15日毎に発表し、注意喚起した(システム障害により情報発信は6月まで)。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	ヒメトビウンカ	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:並	7月第1半旬で水田での初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年でも比較的高かったが、6月下旬～7月上旬の異常高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量はやや少となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	ツマグロヨコバイ	平年:やや早 前年:早	平年:やや少 前年:並	平年よりやや早い6月第4半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	全作型でのツマグロヨコバイ抵抗性品種作付割合は約5割であるが、本作型では抵抗性品種作付割合が高いため、耕種的防除による防除圧が高まっている。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	斑点米カメムシ類	平年:やや遅 前年:遅	平年:多 前年:並	平年よりやや遅い7月第1半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年より多かった。	7月中旬に実施した斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査では比較的多かった。本田へ飛び込む8月が高温少雨で経過したため、発生が助長された。	斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査及び防除情報を発表し、注意喚起した。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	イチモンジセセリ	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。一部地域でのみでの発生であった。	8月が高温少雨に経過したため、山沿い地域で発生が助長された。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	フタオビコヤガ	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	7月第1半旬に一部地域で散発程度の発生を確認したが、その後の発生は見られなかった。	近年は発生量が減少傾向にある。常発地での育苗箱施用薬剤利用が定着し、防除が徹底されているためと思われる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	コブノメイガ	平年:遅 前年:—	平年:並 前年:—	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。一部地域でのみの発生であった。	多収性品種等多肥栽培の晩生品種に発生したが、被害葉率1%程度と非常に軽微な被害となっている。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イネミズゾウムシ	平年:— 前年:早	平年:やや少 前年:—	6月第1半旬に一部地域で散発程度の発生を確認したが、その後の発生は見られなかった。	従来からこの作型ではあまり発生が見られない。	この作型ではあまり発生が見られないため、特に防除はしていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	スクミンゴガイ	平年:— 前年:—	平年:少 前年:少	発生量は平年より少なかったが、一部に壊滅的被害を受けたほ場が見られた。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地帯は限られている。12月下旬～1月上旬および2月の気温が低かったため越冬個体数が減少したことで発生が抑制された。昨年被害が多かった地域で、今年休耕したほ場の近接ほ場で、ほとんど欠株となったほ場が数筆見られた。近接ほ場でもほとんど被害がなかったほ場もあるため、防除対策を怠ったほ場が集中的に加害されたものと思われる。	耕種の防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除を助成する地域防除協議会もある。
麦	黒さび病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
麦	赤さび病	平年:早 前年:やや遅	平年:やや少 前年:少	平年より早い4月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生面積は平年よりやや少なかった。	3月の高温でムギが軟弱に生育し、4月上旬に降水量が多かったことから発生時期が早まった。その後も感染好適条件が継続したが、昨年の発生量が少なかったため、菌密度が低く、発生量の増加には至らなかった。	赤さび病との同時防除可能な薬剤の選択。
麦	黄さび病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
麦	小さび病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
麦	うどんこ病	平年:やや遅 前年:遅	平年:多 前年:多	平年よりやや遅い4月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年より多かった。	昨年の発生量が多かったため、菌密度が高く、3月の高温でムギが軟弱に生育したことにより発生が助長された。	赤さび病の防除で同時防除されている。
麦	赤かび病	平年:やや遅 前年:—	平年:多 前年:—	平年よりやや遅い4月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年より多かった。	出穂期の4月下旬が高温多雨だったため、感染が助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。
麦	黒穂病類	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	黒節病	平年:早 前年:並	平年:やや少 前年:少	平年より早い2月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	種子消毒の不徹底により、一部地域にて発生した。	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	オオムギ縞萎縮病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	近年、抵抗性品種や「彩の星」の導入より発生が極少となっている。
麦	コムギ縞萎縮病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	近年、抵抗性品種「さとのそら」の導入より発生が極少となっている。
麦	オオムギ斑葉病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
麦	アブラムシ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:やや少	平年より遅い4月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は4月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	2月は気温が低く、3月は高温であったものの4月上旬まで日によって強い降雨があったため、初発は遅かった。発生後も4月下旬は日によって強い降雨があり、5月上旬は低温で経過したため発生が抑制された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
麦	ムギダニ	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	一部地域で散発程度の発生が確認された。	例年発生が始まる2月が低温で、中旬頃にまとまった降雨があったほか、3月中旬から4月上旬まで日によって強い降雨があったため、発生が抑制された。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
麦	シロトビムシ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
かんしょ	つる割病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	立枯病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	イモキバガ (イモコガ)	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	ハスモンヨトウの防除を中心に実施している。
かんしょ	ナカジロシタバ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	ハスモンヨトウの防除を中心に実施している。
かんしょ	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	7月第3半旬に初発が確認された。適期防除出来た圃場では発生が抑えられたが、被害の多い圃場も散見された。	7～8月に高温少雨となる時期が度々あり、発生が促進された。防除のタイミングによって発生程度に大きく差が出た。	薬剤防除を実施している。
かんしょ	食葉性チョウ目幼虫	平年:遅 前年:遅	平年:— 前年:多	平年より遅い8月第1半旬に初発を確認し、その後も継続して発生がみられたため、発生量は前年より多かった。	7、8月に高温少雨となる時期が度々あり、発生が促進された。	ハスモンヨトウの防除を中心に実施している。
大豆	紫斑病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	奨励品種が紫斑病に強い「里のほほえみ」に切り替わった。種子消毒、無人ヘリによる一斉防除を実施している。
大豆	立枯性病害	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	種子消毒を実施している。
大豆	べと病	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:やや少	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は11月の子実調査で最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	主力品種が感受性の「里のほほえみ」や在来品種のため、発生が増加傾向にある。7月中旬のまとまった強い降雨により、播種が遅れたり播き直しが行われ、8月は高温少雨傾向で経過したため、初発は遅れた。9月は中下旬に曇雨天や大雨があったため、発生が助長された。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種防除を実施している。
大豆	葉焼病	平年:遅 前年:並	平年:多 前年:多	平年より遅い9月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生面積は平年より多かった。	9月に降雨日が多く、気温が下がってくる中下旬が高温傾向だったため、発生が助長された。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種防除を実施している。
大豆	ウイルス病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	8月第4半旬に、一部地域でモザイク葉の発生を確認した。褐斑粒の発生は見られなかった。	8月は高温少雨傾向で経過したためアブラムシ類の発生が助長され、9月は長雨で発生が抑制されたため、極少発生にとどまった。	—
大豆	茎疫病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
大豆	アブラムシ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い9月第3半旬に、一部地域で発生を確認した。	7月中旬のまとまった強い降雨により、播種が遅れたりまき直しが行われ、大豆の生育が遅れたため、初発は遅かった。9月は中下旬に曇雨天や大雨があったため、発生が抑制された。	播種時の薬剤処理と適期防除を実施している。
大豆	コガネムシ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	平年より遅い8月第4半旬に初発生を確認した。発生面積は8月が最大となり、その後9月に減少し収束した。	7月中旬のまとまった強い降雨により、播種が遅れたり播き直しが行われ、大豆の生育が遅れたため、初発は遅かった。8月は高温少雨傾向で経過したため、発生が助長された。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	ハスモンヨトウ	平年:やや早 前年:並	平年:並 前年:少	平年よりやや早い8月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。フェロモントラップの誘殺数は平年並で、発生量は並であった。	フェロモントラップの誘殺が平年より遅かったため、2月の低温により近隣越冬地の越冬量が抑制されたと推察される。このため、高温期の発生量も抑制傾向となった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
大豆	食葉性チョウ目幼虫	平年:やや早 前年:並	平年:やや多 前年:並	平年よりやや早い8月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量はやや多かった。	6月中旬～7月上旬及び8月の高温少雨傾向により、オオタバコガ、シロイチモジヨトウのフェロモントラップ誘殺数が平年より多く、ほ場での発生も助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。オオタバコガは注意報を発表し、防除を呼びかけた。
大豆	ダイズサヤタマバエ	平年:遅 前年:遅	平年:少 前年:少	平年より遅い10月第4半旬に、一部地域で発生が確認された。発生量は平年より少なかった。	大豆の生育が遅れたことと、9月は中下旬の降雨が多かったため初発生が遅く、10月の気温が低かったため発生が抑制された。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	マメシンクイガ	平年:遅 前年:やや遅	平年:多 前年:並	11月の子実調査で発生が確認された。発生量は平年より多かった。	大規模粗放栽培でほとんど防除を行っていない調査地点で子実の被害が大きかった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。
大豆	シロイチモジマダライガ	平年:遅 前年:早	平年:並 前年:多	平年より遅い9月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は11月の子実調査で最大となった。発生量は平年並であった。	9月は非常に強い降雨が多かったため発生は抑制されたが、平年発生量の絶対値が小さいため平年比は並となった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。
大豆	吸実性カメムシ類	平年:遅 前年:遅	平年:多 前年:多	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は11月に行った子実調査で最大となった。発生量は平年より多かった。	7月中旬のまとまった強い降雨により、播種が遅れたり播き直しが行われ、大豆の生育が遅れたため、初発は遅かった。近年、収穫期近くまで加害するミナミアオカメムシが急速に増加しており、11月の気温が高く経過したため、子実被害の発生を助長した。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。
大豆	ウコンノメイガ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
なし	黒斑病	平年:— 前年:遅	平年:— 前年:—	前年より遅い10月第1半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	抵抗性品種であったが、わずかに病斑が確認された。	抵抗性品種が栽培されている。
なし	黒星病	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い6月第3半旬に初発を確認したが、7月下旬以降は発生が確認されなかったため、発生量は平年よりやや少なかった。	6月上旬の低温多雨により発生が助長されたが、その後は高温少雨や薬剤防除により抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	赤星病	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:並	平年より遅い6月第3半旬に初発を確認した。その後の発生量は平年よりやや少なくな推移した。	5月下旬・6月上旬の多雨により発生が助長されたが、その後の少雨や薬剤防除により抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	うどんこ病	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:少	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認した。その後急増したが、発生量は平年並となった。	8月の少雨により発生が助長された。併せて8月は収穫最盛期にあたるため、適期防除が難しく発生量が増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	輪紋病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
なし	シンクイムシ類	平年:遅 前年:—	平年:多 前年:—	平年より遅い8月第1半旬に初発を確認した。その後の発生量は平年より多く推移した。	3月以降高温となる時期が多く生育が促進され、大雨や台風などの減少要因もなかったことから、発生量が増加した。	フェロモントラップによる発生状況を参考に、防除が実施されている。
なし	ハマキムシ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	6月第1半旬に初発を確認した。その後の発生は確認されず、発生量は平年並であった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は一部にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ハダニ類	平年:並 前年:並	平年:多 前年:並	平年並の5月第4半旬に初発を確認した。その後の発生量は平年より多く推移した。	3月以降高温となる時期が多く生育が促進され、大雨や台風などの減少要因もなかったことから、発生量が増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	カイガラムシ類	平年:並 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年並の9月第3半旬に初発を確認した。その後の発生量は平年よりやや少なくな推移した。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は一部にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	アブラムシ類	平年:並 前年:遅	平年:やや少 前年:並	平年並の4月第3半旬に初発を確認した。6月に急減した後、8月下旬に一部ほ場で再び増加したが、発生量は平年よりやや少なくな推移した。	3月以降高温となる時期が多く生育が促進されたが、6月上旬の多雨により発生量は抑制された。8月の少雨により再び増加したが、発生は一部にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
なし	ニセナシサビダニ	平年:並 前年:並	平年:— 前年:—	平年並の6月第1半旬に初発を確認し、その後も一部ほ場で継続して発生が確認された。	5月下旬の高温により発生がみられたが、定期的な薬剤散布により発生量が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	果樹カメムシ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	果実被害の発生が確認されなかった。フェロモントラップ等による調査では、6月下旬から発生量が増加した。	本年は、他の作物でのカメムシ類の発生が多かったが、多目的防災網の普及や防除の徹底により被害は確認されなかった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に、防除が実施されている。
茶	炭疽病	平年:早 前年:遅	平年:やや多 前年:やや少	二番茶摘採以降、7月中旬から8月にかけて発生が見られた。ほ場ごとの発生量は少なかったが、全域での発生となったため発生量は平年に比べやや多となった。	7月第3半旬の降水量が平年の約3倍、8月第3半旬の降水量が平年の約4倍と集中的な降雨により、感染に好適な状況となったと思われる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	もち病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	越冬菌密度が低く、適切に防除されているためと思われる。	—
茶	輪斑病	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	8月中旬に発生量が増加した。	2番茶摘採期以降の6月下旬から7月上旬にかけ、高温少雨となったため発生の増加は見られなかったが8月第3半旬の降雨で感染好適状態が続き発生が増加した。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	チャノコカクモンハマキ	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫、第1世代成虫の発生は平年よりやや下回る発生だったが、第2世代以降の発生量は大きく下回った。	6月下旬から7月上旬にかけ真夏並の高温が続き、2番茶収穫、摘採後の整枝により物理的に防除され個体数が減ったためと思われる。	フェロモントラップデータを本県のウェブサイトに掲載し、適期防除を周知した。
茶	チャハマキ	平年:早 前年:やや早	平年:やや多 前年:やや多	ほ場での調査では、越冬世代幼虫の確認は平年より早かったが、フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫の発生時期は平年並、第1世代成虫の発生は早まった。第2世代以降発生量は大きく増えることはなく経過したが、二番茶摘採期以降、葉層を厚く残した園では発生が増加した。	6月下旬から7月上旬にかけ真夏並の高温が続き、2番茶収穫、摘採後の整枝により物理的に防除され個体数が減った。一方、葉層を厚く残した園では8月上旬から多発生の傾向が続いた。	フェロモントラップデータを本県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を周知した。
茶	チャノホソガ	平年:早 前年:早	平年:並 前年:やや少	越冬世代、第1世代成虫の発生量は平年並みだったが第2世代以降発生量は平年を大きく下回った。	6月下旬から7月上旬にかけ真夏並の高温が続き、2番茶収穫、摘採後の整枝により物理的に防除され個体数が減った。	フェロモントラップデータを本県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を周知した。
茶	チャノミドリヒメヨコバイ	平年:早 前年:早	平年:やや多 前年:並	7月、9月に多く発生した。平年に比べ秋季の発生がやや多かった。	適切な防除が行われたため、品質や収量に影響するほどの発生量には至らなかったが、7月以降、他の病害虫の発生が少なかったため薬剤による防除の時期が遅れたことが原因と思われる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を周知した。
茶	カンザワハダニ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	一部ほ場で5月下旬、8月に増加したが、発生は平年並だった。	一部ほ場では、多発生となったが、その他のほ場では、適切な防除が行われた。夏季の天敵の活動が盛んであったため、発生が抑制された。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	チャノキイロアザミウマ	平年:早 前年:並	平年:多 前年:多	7月中旬から発生が増加し、8月に多発生となった。	7月以降、他の病害虫の発生が少なかったため薬剤による防除のタイミングが遅れ、多発生につながった。	発生予察情報、病害虫防除情報等により秋季防除を指導した。
茶	ツマグロアオカスミカメ	平年:並 前年:早	平年:並 前年:多	一部の園で発生が見られ、平年並の発生となった。	適切な防除が行われたため、品質や収量に影響するほどの発生量には至らなかった。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
茶	クワシロカイガラムシ	平年:遅 前年:並	平年:並 前年:少	有効積算温度によるふ化予測では、第1世代幼虫のふ化最盛期は5月18日(平年より8日早い)、第2世代は7月26日(平年より2日早い)、第3世代は9月24日(平年より11日遅い)となった。	3月から4月にかけて、気温が高く推移したため、発生が早まったが、夏季の高温により生育が遅延した。冬季に散布する防除薬剤の普及により発生量は減少しているが、使用していないほ場では、引き続き発生がみられる。	発生予報により、注意喚起と適期防除を周知した。
茶	ヨモギエダシヤク	平年:— 前年:—	平年:多 前年:—	一部の園で発生が確認された。	本県での発生は少なく、適切に防除されているからと思われる。	—
茶	チャトゲコナジラム	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:多	裾葉に定着していたが、発生はごくわずかである。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	—
冬春トマト (長期一作)	疫病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	灰色かび病	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:少	平年並の1月第4半旬に初発が確認され、発生量は平年よりやや少なくて推移した。	2月は平年より日射量が多く、3~4月は気温が高かったことから、ハウス内湿度が上がりにくくなり発生が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト (長期一作)	葉かび病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	抵抗性品種の導入と薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト (長期一作)	青枯病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	発生ほ場では土壌消毒の対策を実施している。
冬春トマト (長期一作)	黄化葉巻病	平年:早 前年:早	平年:やや少 前年:少	平年より早い11月第1半旬に初発を確認したが、その後の発生は平年よりやや少なくて推移した。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は一部にとどまった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春トマト (長期一作)	うどんこ病	平年:早 前年:並	平年:少 前年:少	平年より早い11月第4半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が見られたが、発生量は平年より少なくなった。	平年より日射量が多く、ハウス内湿度が低下したため発生が助長されたが、薬剤防除により発生量が少ない状態で維持された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト (長期一作)	萎ちょう病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	黄化えそ病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	アザミウマ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	コナジラム類	平年:早 前年:早	平年:やや少 前年:少	平年より早い10月第4半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が見られたが、発生量は平年よりやや少なくなった。	黄化葉巻病ウイルスの媒介虫であることが認識され、防除が徹底されている。収穫期後半には高温と防除圧の低下により発生が増えた。	定期的な薬剤散布の実施と、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト (長期一作)	ハモグリバエ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	アブラムシ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	トマトサビダニ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	オオタバコガ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	4月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は一部にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	うどんこ病	平年:遅 前年:並	平年:多 前年:多	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認。9月に発生量が急増し平年より多くなった。	7月下旬から8月中旬までの高温で樹が過繁茂となり、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	灰色かび病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋なす	褐紋病	平年:遅 前年:—	平年:並 前年:—	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認。その後発生量は増加せず、平年並となった。	8月中旬の降雨により発生が助長されたが、一部の発生にとどまった。	—

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋なす	褐色腐敗病	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年より早い7月第1半旬に初発を確認。発生量は7月下旬に急増した。その後、増減を繰り返しながら10月まで発生が続き、平年より多くなった。	7月中下旬の高温多雨により発生量が急増したが、それ以降は雨量が多くなるたび発生が助長された。	—
夏秋なす	半身萎ちょう病	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年より早い6月第6半旬に初発が確認され、一部ほ場で発生が多くなった。その後も発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	一部のほ場で連作により発生が増加した。	抵抗性台木の利用が行われている。
夏秋なす	青枯病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	抵抗性台木の利用が行われている。
夏秋なす	半枯病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋なす	アザミウマ類	平年:早 前年:やや早	平年:多 前年:並	平年より早い5月第1半旬に初発を確認。梅雨入りで一時減少したが、7月以降に発生量が多くなり、その後も発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	7月以降は高温少雨となる期間が度々あり、気象的な要因により発生が助長された。	天敵への影響や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	オオタバコガ	平年:やや早 前年:早	平年:やや多 前年:多	平年よりやや早い6月第1半旬に初発を確認。その後継続して発生し10月に急増したため、発生量は平年よりやや多くなった。	3月以降高温となる時期が多く生育が促進され、大雨や台風などの減少要因もなかったことから、世代を経るごとに発生量が多くなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ハスモンヨトウ	平年:遅 前年:—	平年:並 前年:—	平年より遅い8月第6半旬に初発が確認されたが、その後の発生は少なかったため、発生量は平年並となった。	—	—
夏秋なす	ハモグリバエ類	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋なす	アブラムシ類	平年:早 前年:やや早	平年:多 前年:やや多	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後急増した。梅雨入り以降は減少したが、9月下旬から増加し、平年より多い発生量となった。	3～4月の気温が高く発生時期が早まり発生量も多くなったが、その後は断続的な多雨や薬剤防除により抑制された。9月下旬からは防除圧が弱まり増加した。	—
夏秋なす	ハダニ類	平年:早 前年:やや早	平年:多 前年:並	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後は防除により一時的に減少したものの、継続的に多発し、発生量は平年より多くなった。	3月以降、高温少雨となる時期が度々あり、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ホコリダニ類	平年:遅 前年:—	平年:並 前年:—	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認し、その後も発生が見られたが、発生量は平年並であった。	定期的な薬剤防除により発生が抑えられていたが、栽培終盤は防除圧が低くなるため発生した。	—
夏秋なす	マメハモグリバエ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	べと病	平年:遅 前年:並	平年:やや多 前年:並	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認し、その後増加し続けたため、発生量は平年よりやや多くなった。	9月の多雨や10月の低温により、多湿となり発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	うどんこ病	平年:遅 前年:早	平年:並 前年:多	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認し、その後も継続して発生したが、発生量は平年並となった。	8月の高温により一部ハウスで株が徒長し、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	モザイク病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	灰色かび病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	褐斑病	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:多	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認し、その後も継続して発生したが、発生量は平年並となった。	10月の低温で多湿となり、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	菌核病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	黄化えそ病	平年:早 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より早い8月第6半旬に初発を確認し、10月下旬にやや増加したが、発生量は平年よりやや少なくなった。	8月の高温少雨によりハウス周辺からの媒介虫の飛込が増え、栽培初期の発生がみられたが、薬剤防除等によりその後の増加は抑制された。	媒介虫への総合防除対策が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	退緑黄化病	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認し、その後急増したため、発生量は平年よりやや多くなった。	媒介虫の飛込は平年より遅かったものの、ハウス内で継続的に発生したため、感染株が増加した。薬剤抵抗性により媒介虫の防除効果が低下している可能性もある。	媒介虫への総合防除対策が行われている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アザミウマ類	平年:早 前年:早	平年:並 前年:多	平年より早い8月第6半旬に初発を確認し、10月後半にやや増加したが、発生量は平年並となった。	ハウス周辺からの飛込により発生がみられたものの、防除対策によりその後の増加は抑制された。	物理的防除や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	コナジラミ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認し、10月に急増した後、発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	薬剤抵抗性により防除効果が低下している可能性がある。	物理的防除や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハモグリバエ類	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、11月に急増したため、発生量は平年より多くなった。	発生は一部ハウスに留まり、薬剤防除が遅れたため発生が増加した。	物理的防除や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハダニ類	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:並	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されず、発生量は平年並となった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アブラムシ類	平年:遅 前年:早	平年:並 前年:並	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されず、発生量は平年並となった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハスモンヨトウ	平年:遅 前年:—	平年:多 前年:—	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認し、その後は発生が確認されなかったが、発生量は平年より多くなった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年:— 前年:並	平年:— 前年:—	8月第6半旬に初発を確認したが、発生は一部ハウスにとどまった。	発生は一部ハウスに留まり、薬剤防除が遅れたため発生が増加した。	—
冬春きゅうり (促成栽培)	べと病	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い4月第1半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	3～4月は気温が平年より高く、十分に換気が行われたため、発生が抑制された。	循環扇の活用、換気等による温湿度管理の実施。薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	うどんこ病	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	平年より遅い3月第3半旬に初発が確認され、その後の5月に発生量が増加したため、発生量は平年よりやや多くなった。	3～4月の高温により成り疲れし、発生がやや助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	モザイク病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春きゅうり (促成栽培)	灰色かび病	平年:遅 前年:—	平年:並 前年:—	平年より遅い4月第1半旬に初発が確認されたが、その後の発生量は少なかったため、発生量は平年並となった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	褐斑病	平年:遅 前年:早	平年:少 前年:並	平年より遅い2月第1半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年より少なくなった。	3～4月は気温が平年より高く、十分に換気が行われたため、発生が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	菌核病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春きゅうり (促成栽培)	黄化えそ病	平年:早 前年:早	平年:やや少 前年:少	平年より早い1月第6半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	一部ハウスで前作からの保毒虫の持越しで、発生が早くなった可能性がある。防除対策の徹底により、発生は抑制された。	媒介虫への総合防除対策が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	退緑黄化病	平年:早 前年:遅	平年:並 前年:少	平年より早い4月第1半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年並となった。	3～4月は気温が平年より高く、換気がよく行われたため飛込虫が増えた。	媒介虫への総合防除対策が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	アザミウマ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い4月第1半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	3～4月は気温が平年より高く、換気がよく行われたため飛込虫が増えた。	物理的防除や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	コナジラミ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い4月第4半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	3～4月は気温が平年より高く、換気がよく行われたため飛込虫が増えた。	物理的防除や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハモグリバエ類	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	4月第2半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移した。	3～5月は気温が平年より高く、換気がよく行われたため飛込虫が増えた。	物理的防除が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハダニ類	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:多	平年より遅い5月第1半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年並となった。	定期的な薬剤散布により、発生時期を栽培終了間際まで遅らせることができた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春きゅうり (促成栽培)	アブラムシ類	平年:遅 前年:早	平年:多 前年:多	平年より遅い4月第1半旬に初発が確認され、発生量も多く推移したため、発生量は平年より多くなった。5月以降は発生量が減少した。	3～4月は気温が高く換気も行われたため、飛込により発生が一時的に増加した。	物理的防除が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	物理的防除が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	物理的防除が実施されている。
ブロッコリー	黒腐病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	べと病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	軟腐病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	花蕾腐敗病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	菌核病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	黒斑細菌病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	黒すす病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	10月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	9月の高温多雨により発生が助長されたが、その後の低温少雨により発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や他の病害との同時防除で対応している。
ブロッコリー	アブラムシ類	平年:遅 前年:—	平年:やや多 前年:—	平年より遅い11月第1半旬に初発が確認され、発生量は平年よりやや多くなった。	有翅虫の飛来により発生が確認されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	コナガ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平年:早 前年:早	平年:並 前年:並	平年より早い8月第6半旬に初発が確認され、発生量は平年並となった。	7～8月の高温により発生が助長され育苗後半あるいは定植時に処理した薬剤による防除効果が切れたタイミングで発生した。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。
ブロッコリー	オオタバコガ	平年:— 前年:早	平年:並 前年:—	前年より早い10月第1半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されず、発生量は平年並となった。	7～9月の高温により発生が助長され、フェロモントラップ誘殺数も平年より多かったが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。
ブロッコリー	ヨトウガ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	11月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	卵塊がふ化した直後のため発生が確認されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。
ブロッコリー	ハイマダラノメイガ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	シロイチモジヨトウ	平年:早 前年:早	平年:— 前年:多	平年より早い8月第6半旬に初発が確認され、発生量は前年より多くなった。	7～8月の高温により発生が助長され、フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	さび病	平年:やや早 前年:早	平年:多 前年:多	平年よりやや早い5月第4半旬に初発を確認し、6月に急増したため、発生量は平年より多くなった。7月以降は発生が確認されなかった。	4、5月の多雨により発生が助長されたが、6月下旬以降の高温により、発生が抑制された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	黒斑病	平年:早 前年:早	平年:並 前年:やや少	平年より早い6月第4半旬に初発を確認し、6月は発生が多かったが、その後減少し発生量は平年並となった。	梅雨の影響で一時的に多発したが、その後の高温少雨により発生が停滞し、9月以降の発生も抑制された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	萎縮病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
秋冬ねぎ	べと病	平年:早 前年:早	平年:やや多 前年:多	平年より早い6月第1半旬に初発が確認され、発生量は平年よりやや多くなった。7月以降は発生が確認されなかった。	梅雨の影響で一時的に多発したが、その後の高温少雨により発生が停滞し、9月以降の発生も抑制された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	軟腐病	平年:並 前年:—	平年:やや多 前年:—	平年並の8月第4半旬に初発を確認し、9月～10月に増加したため、発生量は平年よりやや多くなった。	9月の高温多雨により、発生が助長された。	排水対策等の耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	小菌核腐敗病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
秋冬ねぎ	白絹病	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	平年より遅い8月第4半旬に初発を確認し、一時的に発生が多くなったが、その後は発生が確認されなかった。	6～7月の高温により、発生が助長された。9月上旬に大雨が降り発生が抑制された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	黒腐菌核病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	1月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	1月上旬～中旬の高温により、発生が助長されたが、その後収穫期を迎えたため、発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
秋冬ねぎ	シロイチモジヨトウ	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年より早い6月第1半旬に初発を確認し、その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	7～9月の高温により発生が助長され、フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。7、9月に注意報が発令され、薬剤散布されたものの、ほ場被害は減少しなかった。
秋冬ねぎ	アブラムシ類	平年:遅 前年:—	平年:多 前年:—	平年より遅い3月第6半旬に初発を確認し、一時的に増加したが、5月以降はほぼ発生が確認されなかった。	3月～4月の高温により、発生が助長された。	他の害虫との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	ネギハモグリバエ	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年より早い6月第6半旬に初発を確認し、その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	6月下旬～11月にかけて高温となる時期が多く、発生が助長された。B系統の発生により被害が増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギアザミウマ	平年:早 前年:早	平年:やや多 前年:並	平年より早い4月第1半旬に初発を確認し、その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年よりやや多かった。	3月～11月にかけて高温となる時期が多く、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギコガ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
さといも	汚斑病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
さといも	疫病	平年:並 前年:並	平年:— 前年:少	平年並の9月第3半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。極めてわずかな発生だったため、発生量は前年より少なくなった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	ドローンでの薬剤散布が行われるなど防除が徹底された。
さといも	アブラムシ類	平年:早 前年:早	平年:やや少 前年:並	平年より早い5月第4半旬に初発を確認し、その後も継続して発生が確認されたが、発生量は平年よりやや少なかった。	4月～5月にかけて高温となる時期が多く、生育初期から発生が助長されたが、適期防除が行われ、期間を通じての発生量は抑制された。	疫病防除のため、薬剤散布回数が増加した。それに伴い、殺虫剤を散布する機会も増加した。
さといも	ハダニ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
さといも	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	べと病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	立枯病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	アブラムシ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	アザミウマ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	ケナガコナダニ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	シロオビノメイガ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	10月第4半旬に初発を確認したが、わずかな発生だったため、その後は発生が確認されなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	播種時の粒剤施用をはじめ薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
いちご (育苗期)	灰色かび病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (育苗期)	うどんこ病	平年:遅 前年:早	平年:並 前年:—	平年より遅い6月第1半旬に初発を確認し、一時的に増加したが、8月以降は発生が確認されず、発生量は平年並となった。	適正な肥培管理や適期防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	耐性菌対策を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
いちご (育苗期)	炭疽病	平年:遅 前年:—	平年:並 前年:—	平年より遅い7月第3半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年並となった。	感染が拡がりやすい地床育苗が行われているハウスで、継続的な発生がみられた。一方、ベンチ育苗では早期抜き取りにより発生は一時的なものとなった。	耕種的防除の実施。親株として優良株の導入を図っている。
いちご (育苗期)	萎黄病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (育苗期)	輪斑病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (育苗期)	ハスモンヨトウ	平年:遅 前年:早	平年:並 前年:—	平年より遅い7月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年並となった。	7～8月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (育苗期)	アザミウマ類	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	6月第1半旬に初発を確認したが、その後もわずかな発生にとどまった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	—
いちご (育苗期)	アブラムシ類	平年:早 前年:並	平年:並 前年:—	平年より早い5月第2半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年並となった。	5月～8月の高温により発生が助長された。	他の害虫との同時防除で対応している。
いちご (育苗期)	ハダニ類	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年よりやや早い5月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	5月～8月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (育苗期)	ホコリダニ類	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (育苗期)	コナジラミ類(オンシツ)	平年:早 前年:—	平年:多 前年:—	平年より早い5月第4半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	5月～8月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	灰色かび病	平年:やや早 前年:遅	平年:多 前年:多	平年よりやや早い12月第3半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	12月～1月の低温により、ハウスを閉め切ったため発生が助長された。また、2月以降は気温が高く果実の成熟が促進された結果、収穫遅れの果実が増加し、発生が助長された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	うどんこ病	平年:早 前年:早	平年:やや少 前年:多	平年より早い10月第1半旬に初発を確認したが、その後はわずかな発生にとどまったため、発生量は平年よりやや少なかった。	適正な肥培管理や適期防除が行われた結果、発生は一部ハウスに留まり、全体的な発生は抑制された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	炭疽病	平年:— 前年:遅	平年:やや少 前年:—	前年より遅い10月第6半旬に初発を確認したが、わずかな発生だったため、その後は発生が確認されず、発生量は平年よりやや少なかった。	早期抜き取りや適期防除が行われた結果、発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	萎黄病	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:並	平年より遅い10月第6半旬に初発を確認したが、わずかな発生だったため、発生量は平年よりやや少なかった。	早期抜き取りや適期防除が行われた結果、発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	輪斑病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (生育・収穫期)	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:並	平年:少 前年:—	前年並の9月第6半旬に初発を確認し、一時的に増加したが、継続的な発生は確認されず、発生量は平年より少なかった。	9月の高温により発生が助長されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	アザミウマ類	平年:早 前年:早	平年:多 前年:やや多	平年より早い9月第6半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	9月の高温により一時的に発生した。その後は気温低下に伴い発生が停滞したが、2月以降の高温に伴い発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	アブラムシ類	平年:並 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年並の10月第4半旬に初発を確認したが、わずかな発生だったため、発生量は平年よりやや少なかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	ハダニ類	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:少	平年より遅い11月第3半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年並となった。	11～2月の高温や乾燥により発生が助長されたが、適期防除や天敵導入が行われた結果、発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布や、天敵の活用によるIPM防除が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	ホコリダニ類	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (生育・収穫期)	コナジラミ類(オンシツ)	平年:早 前年:早	平年:多 前年:やや多	平年より早い9月第6半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	11～4月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

イ 令和4年度 病害虫発生程度別及び防除面積

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
早期水稲 13,500ha (5月中旬までの移植)	苗立枯病					-		
	苗いもち					-		
	葉いもち	0	0	0	71	71	6750	6750
	穂いもち	0	0	0	0	0	0	0
	紋枯病	1	46	663	3821	4531	10800	10800
	白葉枯病							
	ばか苗病					0	6750	6750
	イネシガラレセンチュウ					-		
	イネシガラレセンチュウ(種子消毒)					0	10800	10800
	もみ枯細菌病					-		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					0	10800	10800
	ごま葉枯病					-		
	小粒菌核病					-		
	黄化萎縮病					-		
	縮葉枯病	0	1	46	990	1037	6750	6750
	黒すじ萎縮病					-		
	萎縮病					-		
	黄萎病					-		
	稲こうじ病					0	10800	10800
	褐色菌核病					-		
	赤色菌核病					-		
	葉しょう褐変病					-		
	褐色葉枯病					-		
	苗立枯細菌病					-		
	ニカメイガ	0	0	0	72	72	6750	6750
	セジロウンカ	2	51	560	3038	3651	6750	6750
	トビイロウンカ					0	6750	6750
	ヒメビウンカ	3431	6638	3112	313	13494	6750	6750
	ツマグロヨコバイ	663	1505	2833	3782	8783	6750	6750
	イネハモグリバエ					-		
	イネミギワバエ					-		
	イネキモグリバエ					-		
	イネドロオイムシ	0	0	1	275	276	1300	1300
イネゾウムシ					-			
イネクロカメムシ					-			
斑点米カメムシ類	0	0	1	275	276	5400	5400	
イチモンジセセリ					0			
フタオビコヤガ					0			
イネヨトウ					-			
アワヨトウ					-			
コブノメイガ					-			
イネミズゾウムシ	2	36	362	2146	2546	1300	1300	
スクミリンゴガイ	0	0	0	3	3	30	30	
普通期水稲 16,500ha (5月下旬以降の移植)	苗立枯病					-		
	苗いもち					-		
	葉いもち	0	0	23	973	996	13200	13200
	穂いもち				34	34	13200	13200
	紋枯病	121	602	1192	4443	7128	13200	13200
	白葉枯病					0	0	0
	ばか苗病					0	6600	6600
	イネシガラレセンチュウ	0	0	0	34	34		
	イネシガラレセンチュウ(種子消毒)					-	13200	13200
	もみ枯細菌病					0		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					-	13200	13200
	ごま葉枯病					-		
	小粒菌核病					-		
	黄化萎縮病					-		
	縮葉枯病	0	0	9	639	648	13200	13200
	黒すじ萎縮病					-		
	萎縮病					-		
	黄萎病					-		
稲こうじ病	0	0	0	0	0	13200	13200	

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
普通期水稻 (5月下旬以降の 移植)	褐色菌核病					-		
	赤色菌核病					-		
	葉しょう褐変病					-		
	褐色葉枯病					-		
	苗立枯細菌病					-		
	ニカメイガ	0	0	0	172	172	13200	13200
	セジロウンカ	0	35	810	5535	6380	13200	13200
	トビイロウンカ	0	0	9	639	648	13200	13200
	ヒメビウンカ	4538	7423	3936	581	16479	13200	13200
	ツマグロヨコバイ	3	78	798	4005	4885	13200	13200
	イネハモグリバエ					-		
	イネミギワバエ					-		
	イネキモグリバエ					-		
	イネドロオイムシ	0	0	0	34	34	13200	13200
	イネゾウムシ					-		
	イネクロカメムシ					-		
	斑点米カメムシ類	696	1265	2370	3671	8002	8250	8250
	イチモンジセセリ	2	33	305	1862	2202	8250	8250
	フタオビコヤガ					0	8250	8250
	イネヨトウ					-		
	アワヨトウ					-		
コブノメイガ	0	0	9	639	648	8250	8250	
イネミズゾウムシ					0			
スクミリンゴガイ	121	602	1992	4413	7128	750	750	
麦 6,050ha	黒さび病					0		
	赤さび病	0	0	0	164	164	1200	1200
	黄さび病					0		
	小ささび病					0		
	うどんこ病	39	183	602	1414	2239	1800	1800
	赤かび病	0	0	0	49	49	1800	1800
	雪腐病類					-		
	黒穂病類					0		
	黒節病	0	0	0	1	1	600	600
	麦類縮萎縮病					-		
	小麦縮萎縮病					0		
	大麦縮萎縮病					0		
	雲形病					-		
	斑葉病					-		
	株腐病					-		
	立枯病					-		
	アブラムシ類	0	0	0	360	360	1200	1200
	ムギアカタマバエ					-		
	ハモグリバエ類					-		
	ムギダニ					0		
かんしょ 383ha	かいよう病					-		
	つる割病					0	50	50
	立枯病					0	50	50
	イモキバガ					0		
	ナカジロシタバ					0	50	50
	ハスモンヨトウ	0	0	0	211	211	200	300
	シロイチモジヨトウ					-		
	ヨツモンカメノコハムシ					-		
コガネムシ類					0	150	200	
大豆 619ha	紫斑病					0		
	さび病					-		
	菌核病					-		
	立枯性病害					0	300	300
	炭疽病					-		
	黒とう病					-		
	べと病	16	53	125	190	384	300	300
葉焼病	70	75	105	128	379	300	300	
モザイク病					-			

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
大豆	萎縮病					-		
	わい化病					-		
	アブラムシ類	0	0	0	1	1	300	600
	タネバエ					-		
	コガネムシ類	11	28	66	126	232	300	300
	ハスモンヨトウ	1	5	27	102	134	300	600
	食葉性チョウ目幼虫	0	13	395	210	618	300	600
	ハダニ類					-		
	ダイズサヤタマバエ				6	6	300	300
	マメヒメサヤムシガ					-		
	マメシンクイガ	26	47	89	138	300	300	300
	シロイチモジマダラメイガ	0	0	7	70	78	300	300
	吸実性カメムシ類	33	128	227	176	564	300	450
	ウコンノメイガ					0		
フタスジヒメハムシ					-			
ヒメサヤムシ類	0	0	0	24	24	300	300	
なし 395ha	黒斑病					0		
	黒星病				1	1	395	395
	赤星病				1	1	395	790
	うどんこ病	13	27	54	87	181	395	790
	輪紋病					0		
	ナシヒメシンクイ	5	12	29	61	106	395	1185
	モモシンクイガ					-		
	ナシマダラメイガ					-		
	ハマキムシ類					0		
	ハダニ類	22	43	78	104	247	395	1185
	カメムシ類					0	395	1975
	カイガラムシ類	0	0	0	1	1	395	395
	アブラムシ類	0	1	13	91	105	395	395
	ニセナシサビダニ	0	0	0	3	3		
吸ガ類					-			
ナシチビガ					-			
茶 825ha	炭疽病	0	0	0	454	454	800	1600
	もち病					0		
	網もち病					-		
	輪斑病	0	0	0	454	454	800	1600
	チャノコカクモンハマキ	0	4	31	150	185	800	2400
	チャハマキ	75	88	132	172	467	800	2400
	チャノホソガ	0	4	31	150	185	800	2400
	チャノミドリヒメヨコバイ	100	154	213	202	669	800	2400
	カンザワハダニ	14	51	133	236	434	800	2400
	チャノキイロアザミウマ	0	0	0	464	775	800	1600
	ツマグロアオカスミカメ	5	22	73	175	276	800	1600
	クワシロカイガラムシ	2	11	43	131	186	800	1200
	ヨモギエダシャク	0	0	5	70	75	800	800
	その他(チャトゲコナジラミ)	0	0	55	540	595	800	1600
冬春トマト 118ha	疫病					0		
	灰色かび病	0	0	0	1	1	110	330
	モザイク病					-		
	葉かび病					0		
	青枯病					0		
	萎ちょう病					0		
	うどんこ病	0	0	0	1	1	110	330
	黄化葉巻病						110	330
	アザミウマ類	0	0	0	0	0	110	330
	オオタバコガ				0	0	110	110
	コナジラミ類	0	0	0	5	5	110	330
	ハモグリバエ類					-		
	アブラムシ類					0	110	110
	トマトサビダニ					0		
ハスモンヨトウ					0			

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
夏秋なす 255ha	うどんこ病	6	26	67	90	188	200	600
	灰色かび病					0		
	褐紋病	0	0	0	10	10	200	200
	褐色腐敗病	14	17	28	43	103	200	600
	半身萎ちょう病	31	22	29	37	119	200	600
	青枯病					0		
	アザミウマ類	69	32	35	37	173	200	800
	コナジラミ類	0	0	0	4	4	200	600
	オオタバコガ	2	8	25	56	91	200	400
	ハモグリバエ類					-	200	600
	アブラムシ類	0	0	5	43	49	200	600
	ハダニ類	32	151	69	3	255	200	600
	ハスモンヨトウ					0	200	600
ホコリダニ類	0	0	0	10	10	200	400	
夏秋きゅうり 335ha	べと病	1	8	34	90	134	300	300
	炭疽病					-		
	疫病					-		
	うどんこ病	0	3	17	63	83	300	300
	斑点細菌病					-		
	モザイク病					-		
	灰色かび病					0		
	褐斑病	0	1	10	48	60	300	300
	菌核病					0		
	黄化えそ病	0	0	0	20	20		
	退緑黄化病	8	24	54	90	176		
	アザミウマ類	0	0	0	8	8	300	600
	ハダニ類					0	300	300
	アブラムシ類					0		
	コナジラミ類	0	0	0	15	15	300	600
	ハモグリバエ類	4	10	24	52	90	300	300
ワタヘリクロノメイガ					0	300	300	
オオタバコガ					-			
ハスモンヨトウ	0	0	0	9	9	300	300	
冬春きゅうり 257ha	べと病	0	0	0	19	19	250	750
	炭疽病					-		
	疫病					-		
	うどんこ病	6	12	25	46	90	250	750
	斑点細菌病					-		
	モザイク病					0		
	灰色かび病	0	0	0	2	2	250	750
	褐斑病					0	250	750
	菌核病					0	250	750
	黄化えそ病	0	0	0	7	7		
	退緑黄化病	0	0	0	11	11		
	アザミウマ類					0	250	750
	ハダニ類	0	0	0	11	11	250	750
	アブラムシ類	0	0	0	15	16		
	コナジラミ類					0	250	500
	ハモグリバエ類					0		
ワタヘリクロノメイガ					0			
オオタバコガ					-			
ハスモンヨトウ					0			

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
ブロッコリー 1,202ha	黒腐病					0		
	べと病					0		
	アブラムシ類	0	0	0	17	17	1000	1000
	コナガ					-	1000	1000
	ハスモンヨトウ	0	0	0	17	17	1000	1000
秋冬ねぎ 1,870ha	さび病	261	211	278	336	1086	1000	3000
	黒斑病	1	12	72	297	383	1000	3000
	萎縮病					0		
	べと病	0	0	7	153	160	1000	3000
	軟腐病	0	0	8	195	203	1000	1000
	シロイチモジヨトウ	317	795	617	134	1863	1000	2000
	ハスモンヨトウ					0	1000	2000
	アブラムシ類	0	3	38	268	310	1000	1000
	ネギハモグリバエ	110	184	318	444	1056	1000	3000
	ネギアザミウマ	527	408	408	320	1653	1000	3000
さといも 803ha	ネギコガ					0		
	汚斑病					0		
	モザイク病					-		
	疫病	0	0	0	11	11	300	900
	アブラムシ類	0	8	51	193	253	300	300
	ハダニ類					0		
ほうれんそう 2,023ha	ハスモンヨトウ					0	300	300
	べと病					0		
	モザイク病					0		
	シロイチモジヨトウ					-		
	アブラムシ類					0		
	ヨトウガ					-		
いちご 105ha	シロオビノメイガ					0		
	灰色かび病	0	0	0	12	13	50	150
	うどんこ病	0	0	0	2	2	50	150
	モザイク病					-		
	炭疽病					-		
	萎黄病					0		
	アブラムシ類	0	0	0	6	6	100	200
	アザミウマ類	21	31	31	17	100	100	200
	コナジラミ類	0	0	6	33	39	50	100
ハダニ類	7	10	16	22	55	100	200	
ハスモンヨトウ					-			

(4) 令和4年度の病害虫発生予察情報等の発信

ア 病害虫発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況

(ア) 警報

なし

(イ) 注意報

発表年月日	内 容
令和4年7月11日	ネギ、さび病
令和4年7月27日	野菜類・花き類、オオタバコガ
令和4年7月27日	ネギ、シロイチモジヨトウ
令和4年9月8日	野菜類・花き類・ダイズ、オオタバコガ
令和4年9月22日	ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ

(ウ) 特殊報

発表年月日	内 容
令和4年10月21日	タバコノミハムシの発生について

(エ) 発生予報

予報月	発表年月日	予報月	発表年月日
5月	令和4年4月27日	11月	令和4年10月26日
6月	令和4年5月26日	12月	令和4年11月25日
7月	令和4年6月24日	1月	令和4年12月22日
8月	令和4年7月27日	2月	令和5年1月25日
9月	令和4年8月26日	3月	令和5年2月27日
10月	令和4年9月28日	4月	令和5年3月24日

(オ) 注意を促すための情報

a 病虫害防除情報

防除時期が限定される病虫害や予報に合わせ、特に注意を促す必要がある病虫害について病虫害防除情報としてホームページ上で発信した。

発表年月日	作物別	内 容
令和4年7月12日	果樹	なしの果樹カメムシ類について
令和4年7月28日	普通作物	稲の斑点米カメムシ類について
令和4年9月5日	茶	チャのチャノキイロアザミウマについて
令和4年10月26日	普通作物	ダイズの吸実性カメムシ類について

b 調査結果等

病虫害の適期防除を促すため調査結果をホームページ上で発信した。

発表時期	内 容
令和4年4月～ 令和5年3月	各種フェロモントラップ等データ
令和4年5月27日	麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度調査結果
令和4年6～8月	いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況
令和4年6～7月	気象予測データによるウンカ飛来予測状況（トビイロウンカ、セジロウンカ）
令和4年7月5日	イネツトムシ発育予測
令和4年7月5日	フタオビコヤガ（イネアオムシ）発育予測
令和4年7月26日	いもち病（葉いもち）発生状況調査結果
令和4年7月26日	水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果
令和5年2月3日	ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果
令和5年3月2日	果樹カメムシ類の越冬密度調査結果

イ 発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病虫害発生現況報告等の外部への提供

国（植物防疫課）、関東農政局及び日本植物防疫協会に、発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病虫害発生現況報告等を提供した。

植物防疫に関するデータベースサービスである J P P - N E T（運用主体：日本植物防疫協会）によって、病虫害防除に関する情報交換を国及び他県等と行い、発生予察及び防除指導に活用した。

ウ 発生予察ツールを用いた発生消長予測情報の提供

県で開発したツールを用いて、気象台の気温データと害虫ごとの発育パラメータから今後の害虫の発生消長を予測し、フェロモントラップデータとともにホームページを通じて情報提供した。

・ナシヒメシンクイ 提供日：6月21日、7月5日、7月21日

・ハスモンヨトウ 提供日：8月19日、9月5日、9月20日

その他に、5月のヒメトビウンカ麦類叩き出し調査（第1世代幼虫対象）における実施時期の決定にも用いた。

3 病虫害防除指導

(1) 病虫害防除手法等に関する相談

生産者、県等指導機関（農協、市町村、農林振興センター）、一般県民他から依頼のあった 28 件の病虫害診断や防除手法に関する相談に対応した。

相談の種類	相談者区分（人数）				
	生産者	県等指導機関	一般	その他（業者）	計
病虫害（水稻・麦）	1	0	0	2	3
病虫害（野菜）	3	3	1	2	9
病虫害（果樹）	1	1	7	1	10
病虫害（茶）	1	0	0	0	1
病虫害（花植木）	0	0	2	2	4
農薬・その他	0	0	1	0	1
計	6	4	11	7	28

(2) 無人ヘリコプターによる空中散布等の防除指導

農林水産航空事業実施指導要領及び無人ヘリコプター利用技術指導指針に基づき、県内の 6,965.5ha で無人ヘリコプター等による空中散布が行われた。このうち、無人マルチローター（ドローン）による散布も 156.8ha で実施された。

水稻ではいもち病、紋枯病、ウンカ類、ヨコバイ類、カメムシ類等の病虫害防除のため 3,588.2ha、麦類では赤かび病等の病虫害防除のため 2,976.8ha、大豆では紫斑病、カメムシ類、ハスモンヨトウ等の病虫害防除のため 176.0ha であった。これら作物の延べ散布面積は 6741.0ha で前年に比べ 247.8ha 減少した。また、その他として水稻の播種・追肥及び除草剤散布が 67.7ha、ゴルフ場の害虫防除 154.6ha であった。これらの実施に当たり、予察情報による農薬の選定や安全な実施体制の啓発など実施主体に対し適切な防除指導を実施した。

(3) 農薬展示ほ設置等に関する指導

埼玉県植物防疫協会が実施した農薬展示ほ等の設置について、設計の作成及び成績検討会（書面開催）における農薬の防除効果の検証等に協力した。

(4) 研修会等の指導

ア 病虫害防除員・防除協力員研修会の実施（書面開催）

日 時：令和 5 年 3 月 1 日（水）（研修資料配布）

対象者：防除員・防除協力員等 16 人

内 容：令和 4 年度に発生した病虫害、病虫害防除員の業務について等

イ 普及指導員を対象とした専門研修「病虫害」における講師

日 時：令和 4 年 10 月 4 日（火）

対象者：農林振興センター（技術普及担当）職員等 13 人

内 容：①農薬取締法の概要 ②農薬の適正使用、保管

ウ 埼玉県農薬適正使用アドバイザー研修会における講師

日 時：令和4年10月26日(水)

(さいたま市浦和区、さいたま共済会館・サテライト会場)

対象者：農薬適正使用アドバイザー等 225人

内 容：病害虫の生理・生態と防除

エ 令和4年度農業技術研究センター研究成果発表会

日 時：令和5年1月30日(月)(WEB開催)

対象者：生産者、一般県民、県関係者

内 容：予察調査からみえるカメムシ類の発生動向

(5) 防除対策資料等の作成

国が平成25年4月26日に発出した「住宅地等における農薬使用について」の通知に基づき、住宅地、学校、病院等の近くで農薬を使用する際の事前周知等、危被害防止徹底を図るための啓発チラシを作成し、自治会等への幅広い配布・回覧による周知を図った。

サツマイモ基腐病対策、クビアカツヤカミキリ対策、ウメ輪紋ウイルス(PPV)対策、ジャンボタニシ対策、農薬適正使用推進など農産物安全課の資料作成に協力し、現地の防除指導に活用した。

4 植物の国内・輸出検疫調査等

(1) 検疫病害虫侵入リスク管理調査結果

ア チチュウカイミバエ

広範な生果実の大害虫として温帯各地で恐れられているチチュウカイミバエの侵入防止に関する警戒調査を4～11月の8か月間、10か所で行った。

本種は、現在まで調査場所での侵入は確認されていない。

地 域	場 所
北足立	大宮総合食品地方卸売市場 埼玉県地方卸売市場上尾市場 地方卸売市場鴻巣フラワーセンター
入 間	埼玉川越総合地方卸売市場
児 玉	上里町長浜（ナシほ場）
大 里	地方卸売市場熊谷青果市場
北埼玉	地方卸売市場埼玉園芸市場 加須市鴻荃（ナシほ場）
埼 葛	地方卸売市場さいたま春日部市場 越谷総合食品地方卸売市場

イ コドリングア

令和元年度から検疫有害動植物の侵入警戒調査の強化により、コドリングアの調査を開始した。

4～11月及び3月に県内5か所のなし園において、コドリングア用ルアーを用いたフェロモントラップ調査を月2回実施した結果、確認されなかった。

ウ 火傷病菌

令和元年度から検疫有害動植物の侵入警戒調査の強化により、ナシ火傷病の調査を開始した。

6～10月まで、県内7か所のなし園において月2回、目視調査を実施した結果、確認されなかった。

(2) 新規病虫害まん延防止対策調査結果

ア ウメ輪紋ウイルス (P P V)

平成 21 年 4 月に東京都青梅市のウメで、国内で初めてウメ輪紋ウイルス (*Plum pox virus* 以下 P P V) の感染が確認された。国は、国内のモモやスモモ等のサクラ属の果樹への被害を防止するため、植物防疫法 (昭和 25 年法律第 151 号) に基づく緊急防除 (防除期間を令和 3 年 3 月 31 日まで) の実施等により、本ウイルスの根絶に努めてきた。期間の終了をもって緊急防除は終了となった。

本県の清浄性確保のため、果樹生産地域の調査 (広域調査) を実施した。

(ア) 防除区域等調査 (周辺調査)

実施無し

(イ) 広域調査

a 全国調査

関係機関が連携し、緊急防除の防除区域以外の地域における感染植物の有無を確認するため、これら果樹生産地にある植物を調査した。

調査の結果、感染植物は確認されなかった。

b 住民通報

住民からの通報による P P V の感染疑い事例はなかった。

イ キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の春季調査結果

キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統は、平成 26 年 5 月に愛媛県において国内で最初の発生が確認された。令和 3 年 3 月現在 15 都県での発生が確認されている。

本県では、平成 27 年 12 月 25 日に定められた「キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統の防除対策マニュアル」に基づき、調査を実施した。

本年は、小鹿野町で 1 件の疑い事例があったが検査の結果、Psa3 感染は確認されなかった。

5 農薬安全使用対策

(1) 農薬危被害防止対策

ア 農薬の安全かつ適正な使用の推進において、農薬使用の助言者として「農薬適正使用アドバイザー・農薬指導マスター」を県で認定するにあたり、効果的な農薬の使用方法、主要農作物における病虫害防除等の指導を行った。

農薬適正使用アドバイザー・農薬指導マスター認定者数（人）

項目\年度	30年度	元年度	2年度	3年度	4年度
農薬適正使用アドバイザー	315	301	246	267	222
農薬指導マスター	216	213	207	200	186

イ 食品衛生法に関する農薬の残留調査結果に基づき、農薬の安全かつ適正な使用を指導した。

(2) 農薬販売者の届出店舗数及び立入検査結果

ア 届出件数

農薬取締法第17条第1項の規定に基づき、農薬を販売する者から提出された農薬販売届（新規・増設・変更・廃止）を受理した。

令和4年度の届出店舗数は631件であった。

令和4年度届出店舗数（令和4年4月～令和5年3月）

業種\項目	新規届	増設届	変更届	廃止届	販売者数	販売店舗数
農業協同組合	0	2	15	12	19	178
農薬卸商	1	0	3	0	34	35
薬局・医療品販売業	1	45	249	32	143	1226
種苗商	0	0	3	3	91	94
肥料商	0	0	1	7	72	72
ホームセンター	18	6	53	24	19	173
インターネット	4	0	3	2	24	24
その他	52	9	44	42	261	520
計	76	62	371	122	663	2322

イ 農薬販売者に対する立入検査結果

農薬の適正な販売を確保するため、農薬取締法第29条の規定に基づき、農薬販売者に対する立入検査（212件）を行った。

なお、コロナ禍のため保健所との合同調査は実施を見合わせた。

検査の結果、全体の18.9%に当たる40店舗において指摘事項が認められ、是正指導を行った。

なお、指摘事項は、次のとおりである。

令和4年度 検査項目及び不備が認められた店舗数(立入検査)

(単位:延べ、実店舗数)

業種	立入検査件数	左記のうち保健所との合同立入検査件数	検査事項 (措置の指導内容、その他は廃業等のため除く)														不適切(延数)計	検査結果(実数)			措置(実数)			備考	
			新規・増設届	変更届	廃止届	毒物劇物販売登録	農薬の取り扱い					保管管理		帳簿		指摘事項無		指摘事項有	その他(店舗無、廃業等)	文書指導	口頭指導	その他(店舗無、廃業等)			
							無登録農薬	不適正表示	虚偽宣伝	登録のない除草剤	有効期限切れ	分割・移し替え	施錠	食品等との分離	その他								一般農薬(水質汚濁性農薬を除く)		水質汚濁性農薬
農業協同組合	3	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	2	0	0	2	0	0
農薬卸	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0
薬局・医薬品販売業	66	0	0	1	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	45	13	8	0	13	8	0
種苗商	25	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	5	14	5	6	0	5	6	0
肥料商	26	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	18	6	2	0	6	2	0
ホームセンター	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0
インターネット	3	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	2	0	0	2	0	0
その他	84	0	0	2	8	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3	0	0	16	63	12	9	0	12	9	0
計	212	0	0	7	29	0	0	0	0	1	2	0	0	0	5	0	0	44	146	40	26	0	40	26	0

*1指摘延数の実際数は、44件+その他の26件の70件となる。

*2検査結果と措置は、実販売店舗数。

*3帳簿の一般農薬の内容は、帳簿の記載、帳簿の保管、在庫数量などの確認項目がある。

ウ 農薬販売者に対する郵送調査結果

農薬販売者に対してより幅広く検査を実施するために、調査票を郵送して回答を求める調査を行った。

令和4年度は調査票を403店舗に対し、313店舗から回答(回答率77.7%)、宛先不明1店舗、回答無しが89店舗あり、その結果は次のとおりである。

令和4年度 検査項目及び不備が認められた店舗数(郵送調査)

(単位:延べ、実店舗数)

業種	郵送調査件数	左記のうち保健所との合同立入検査件数	検査事項														指摘事項有(延数)計	検査結果(実数)			措置			備考
			新規・増設届	変更届	廃止届	毒物劇物販売登録※1	農薬の取り扱い					保管管理		帳簿		指摘事項無		指摘事項有	未回答・宛名無	電話による口頭指導	郵送調査がきついで届が提出された等			
							無登録農薬	不適正表示	虚偽宣伝	登録のない除草剤	有効期限切れ	分割・移し替え	施錠	食品等との分離	その他							一般農薬(水質汚濁性農薬を除く)	水質汚濁性農薬	
農業協同組合	35	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	24	6	5	3	3	
農薬卸	5	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	1	1	0	
薬局・医薬品販売業	211	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	143	8	60	4	4	
種苗商	12	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	7	5	0	1	4	
肥料商	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	1	0	0	
ホームセンター	35	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27	0	8	0	0	
インターネット	10	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6	2	2	2	0	
その他	86	0	0	2	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	63	10	13	3	7	
計	403	0	0	10	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32	281	32	90	14	18	

*さいたま154、川越31、大里11、春日部207

*1毒物劇物販売登録欄には、登録有で指摘事項(不適)がある場合にカウントする。

*2検査結果と措置は、実販売店舗数。

*3帳簿の一般農薬の内容は、帳簿の記載、帳簿の保管、在庫数量などの確認項目がある。

6 病害虫関係資料

(1) 令和4年度発表の病害虫発生予察注意報等

ア 注意報（第1号、第2号、第3号、第4号、第5号）



令和4年度病害虫発生予察注意報第1号



令和4年7月11日

埼玉県病害虫防除所

6月中旬に県内ネギほ場を調査したところ、さび病の発生量は直近10年で最も多い結果となりました。その後、早い梅雨明けと連日の高温により発生は大きく抑制されましたが、夏以降の気温低下に伴って再び多発することが懸念されます。

発生が見られているほ場では、今のうちに防除を行って越夏する病原菌を減らしましょう。

また、夏以降気温が低下し始めたらほ場をよく観察し、早期発見・早期防除を徹底しましょう！

作物名 ネギ

病害虫名 さび病

1 注意報の内容

(1) 発生地域 県内全地域

(2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

(1) 県内ネギほ場を巡回調査した結果、さび病の発生量が平年を大きく超えており、直近10年で最も多かった（発生ほ場率100%）。

(2) 6月21日に気象庁が発表した関東甲信越地方の3か月予報（7～9月）によると気温は平年より高く、高温により越夏出来ない胞子が増える見込みである。しかし、6月中旬の発生量が非常に多いため、越夏する胞子量は平年より多いと見込まれる。

(3) 越夏する胞子量が多くなった場合、9月以降の気温低下と降水量の増加により、多発が懸念される。



写真 さび病が発生したネギ葉（左・中央：本ぼ 右：苗）（R4.6撮影）

3 防除対策

- (1) 発生が見られたら、本病に登録があり治療効果のある薬剤で防除する。
- (2) 夏以降、気温 25℃以下・多湿条件となると発病しやすくなるので、予防的に防除を行う。
- (3) 葉の窒素含量が多いほど発病しやすくなるので、過剰な追肥とならないよう施肥量に注意する。
- (4) 発病ネギは感染源とならないよう、早めに収穫し発病葉をほ場に残さない。
- (5) 出荷調整時に出た残渣中の発病葉は、土に埋めるなど適切に処分する。

表 さび病の防除薬剤例

薬剤名	FRAC コード	使用時期	使用方法	使用回数
ヨネポン水和剤	M01	収穫 7 日前まで	散布	4 回以内
ダコニール 1000	M05	収穫 14 日前まで	散布	3 回以内
ジマンダイセン水和剤	M03	収穫 14 日前まで	散布	3 回以内
オンリーワンフロアブル	3	収穫 14 日前まで	散布	3 回以内
ベルコート水和剤	M07	収穫 30 日前まで	散布	3 回以内
パレード 20 フロアブル	7	収穫前日まで	散布	3 回以内
アミスター 20 フロアブル	11	収穫 3 日前まで	散布	4 回以内
ユニフォーム粒剤	4、11	土寄せ時、但し収穫 45 日前まで	株元土壌 混和	1 回
カーニバル水和剤	M05、40	収穫 14 日前まで	散布	3 回以内

(使用基準は令和 4 年 6 月 22 日現在)

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！ (令和 4 年 5 月 1 日～8 月 31 日)

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍率は使用の度に確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬散布は暑い時期を避け、熱中症にならないよう注意する。
- 6 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。

<http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/a0907/index.html>



コバトン



令和4年度病害虫発生予察注意報第2号

令和4年7月27日
埼玉県病害虫防除所

県内のオオタバコガのフェロモントラップへの誘殺数が、発生当初から平年より多い傾向が続いており、これまでにナス、スイートコーンなどのほ場で幼虫の食害が確認されています。

本虫は野菜、花きを中心として50種類近い作物を加害しますが、埼玉県で被害が懸念される作物は、トマト、ナス、ブロッコリー、レタス、スイートコーン、キク、ガーベラ、宿根アスターなどです。

幼虫は卵からふ化すると直ちに植物の内部へ食入しますので、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

作物名 野菜類、花き類
病害虫名 オオタバコガ

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所が設置したオオタバコガのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、4か所すべて（深谷市、杉戸町、本庄市、越谷市）で多い傾向が続いており、平年の2.5倍以上の地点も確認されている（深谷市：図1、本庄市：図2）。
- (2) 7月21日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。
- (3) 露地ナスほ場、スイートコーンほ場で幼虫の食害が確認されており、今後、被害拡大が懸念される。

3 防除対策等

- (1) 新しい食害痕や虫糞を見つけたら、その周辺に幼虫がいる可能性が高いので、発見しだい捕殺する。
- (2) 摘芯した腋芽や花蕾などには卵や若齢幼虫が見られるので、株元などに放置せず、ほ場外で処分する。
- (3) 施設栽培では、開口部に寒冷紗等（5mm目程度の防虫ネット）を張って、成虫の侵入を防ぐ。
- (4) 幼虫が作物内に食入してしまうと薬剤効果が低下するので、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (5) 老齢幼虫に対しては薬剤効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける。（表1、表2）

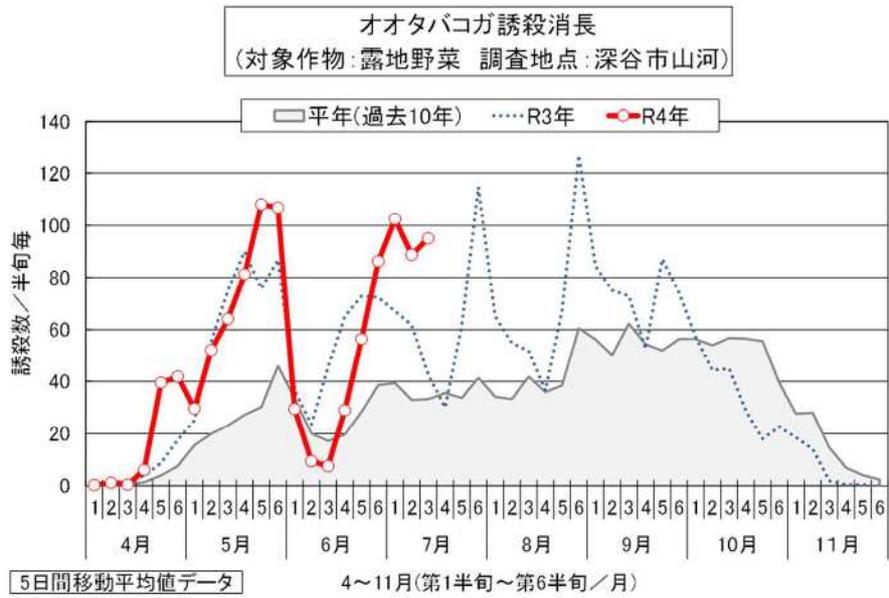


図1 オオタバコガ誘殺消長 (対象作物：露地野菜 調査地点：深谷市山河)



図2 オオタバコガ誘殺消長 (対象作物：露地ナス 調査地点：越谷市中島)



写真1 オオタバコガ幼虫による葉の被害



写真2 オオタバコガ幼虫による果実の侵入痕

表1 ナスのオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
スピノエース顆粒水和剤	5	収穫前日まで	2回以内
アフーム乳剤	6	収穫前日まで	2回以内
カスケード乳剤	1 5	収穫前日まで	4回以内
トルネードエースDF	2 2 A	収穫前日まで	2回以内
フェニックス顆粒水和剤	2 8	収穫前日まで	3回以内
プレバソンフロアブル5	2 8	収穫前日まで	2回以内
グレーシア乳剤	3 0	収穫前日まで	2回以内
プレオフロアブル	UN	収穫前日まで	4回以内

(使用基準は令和4年7月21日現在)

表2 ブロッコリーのオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アフーム乳剤	6	収穫3日前まで	3回以内
グレーシア乳剤	3 0	収穫7日前まで	2回以内

(使用基準は令和4年7月21日現在)

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。

<http://www.pref.saitama.lg.jp/a0907/nouann/saishintourokujouhou.html>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！ (令和4年5月1日～8月31日)

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン



彩の国
埼玉県

令和4年度病害虫発生予察注意報第3号

令和4年7月27日
埼玉県病害虫防除所

県内のシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が平年より多く、特に7月以降に急増し、ネギほ場では幼虫の食害が確認されています。
本虫は野菜、花きを中心として60種類以上の作物を加害します。
ネギでは、ふ化幼虫が集団で葉の先端や折れた部分から葉身内へ食入してしまうと、薬剤効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

作物名 ネギ

病害虫名 シロイチモジヨトウ

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所が設置したシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、3か所すべて（深谷市、越谷市、杉戸町）で多い傾向が続いており、平年の2倍を超える地点も確認されている（深谷市：図1、越谷市：図2）。
- (2) 7月21日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。
- (3) ネギほ場で幼虫の食害が確認されており、今後、被害拡大が懸念される。

3 防除対策等

- (1) 早期発見に努め、卵塊やふ化直後の1～2齢幼虫の集団を見つけたら速やかに取り除き、ほ場外で適切に処分する。
- (2) 幼虫が作物内に食入してしまうと薬剤効果が低下するので、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (3) 老齢幼虫に対しては薬剤効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける。（表）

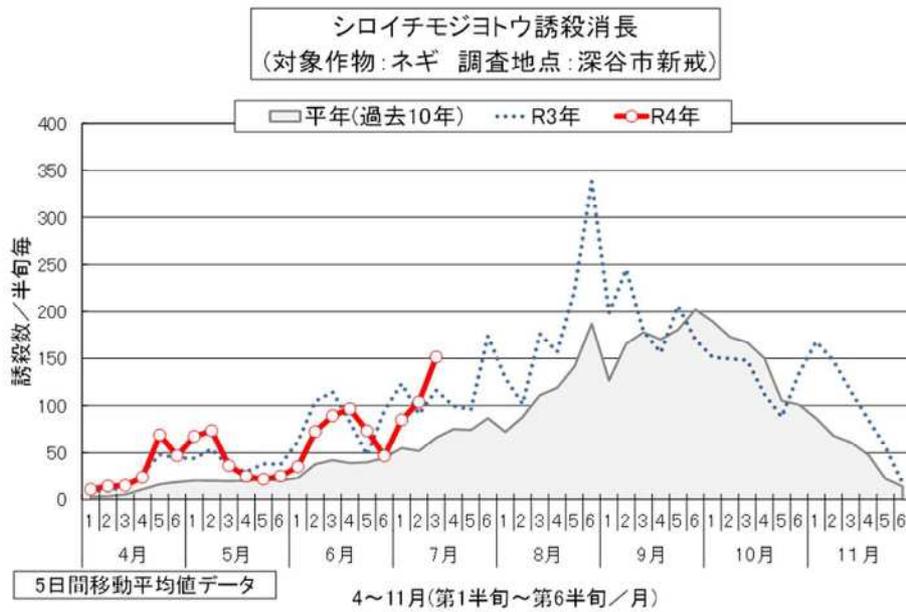


図1 シロイチモジヨトウ誘殺消長 (対象作物：ネギ 調査地点：深谷市新戒)

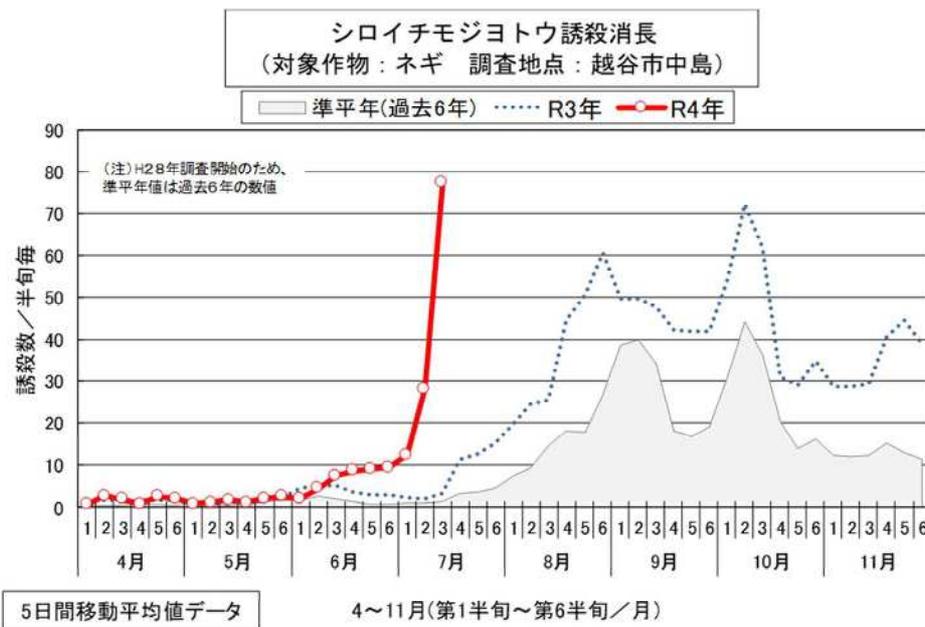


図2 シロイチモジヨトウ誘殺消長 (対象作物：ネギ 調査地点：越谷市中島)



写真1 シロイチモジヨトウ若齢幼虫 (体長約2mm)



写真2 シロイチモジヨトウによる被害葉

表 ネギのシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アディオン乳剤	3 A	収穫7日前まで	3回以内
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アフーム乳剤	6	収穫7日前まで	3回以内
カスケード乳剤	1 5	収穫14日前まで	3回以内
ロムダンフロアブル	1 8	収穫7日前まで	3回以内
トルネードエースDF	2 2 A	収穫14日前まで	2回以内
ミネクトデュオ粒剤	4 A、2 8	収穫3日前まで	3回以内
ヨーバルフロアブル	2 8	収穫3日前まで	3回以内
ベネビアOD	2 8	収穫前日まで	3回以内
グレーシア乳剤	3 0	収穫7日前まで	2回以内
プレオフロアブル	UN	収穫3日前まで	4回以内

(使用基準は令和4年7月21日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。

<http://www.pref.saitama.lg.jp/a0907/nouann/saishintourokujouhou.html>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！ (令和4年5月1日～8月31日)

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン



令和4年度病虫害発生予察注意報第4号

令和4年9月8日
埼玉県病虫害防除所

作物名 野菜類、花き類、ダイズ
病虫害名 オオタバコガ

県内のオオタバコガのフェロモントラップへの誘殺数が平年より多く、令和4年7月27日に注意報第2号を発表しましたが、その後も多い傾向が続いています。ダイズなどにも被害が広がっており、現在栽培中の作物だけでなく、これから栽培が始まる作物への被害も懸念されます。

本虫は野菜、花きを中心として50種類近い作物を加害しますが、埼玉県で被害が懸念される作物は、トマト、ナス、ブロッコリー、レタス、スイートコーン、キク、ガーベラ、宿根アスターなどです。

幼虫は卵からふ化すると直ちに植物の内部へ食入しますので、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病虫害防除所が設置したオオタバコガのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、4か所すべて（深谷市、杉戸町、本庄市、越谷市）で多い傾向が続いている（図1～4）。
- (2) 9月1日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。
- (3) 露地ナスほ場、ダイズほ場で幼虫の食害が確認されており、今後、被害拡大が懸念される。

3 防除対策等

- (1) 新しい食害痕や虫糞を見つけたら、その周辺に幼虫がいる可能性が高いので、発見しだい捕殺する。
- (2) 摘芯した腋芽や花蕾などには卵や若齢幼虫が見られるので、株元などに放置せず、ほ場外で処分する。
- (3) 施設栽培では、開口部に寒冷紗等（5mm目程度の防虫ネット）を張って、成虫の侵入を防ぐ。
- (4) 幼虫が作物内に食入してしまうと薬剤効果が低下するので、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (5) 老齢幼虫に対しては薬剤効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける（表1～4）。

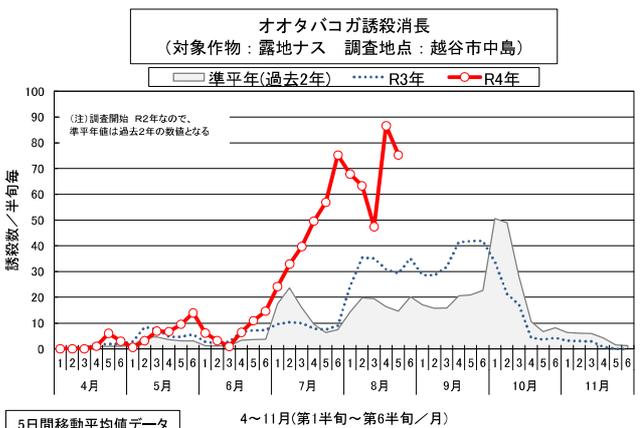
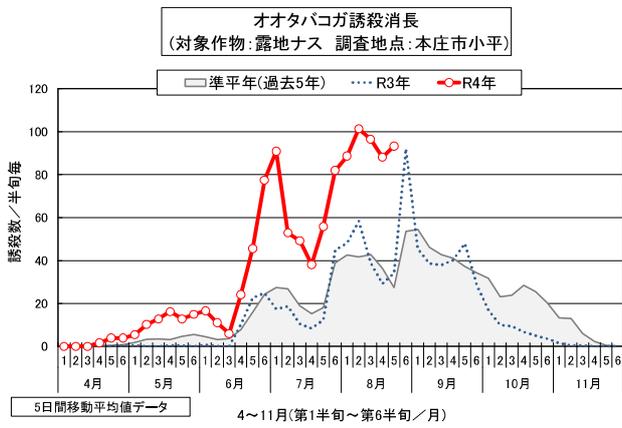
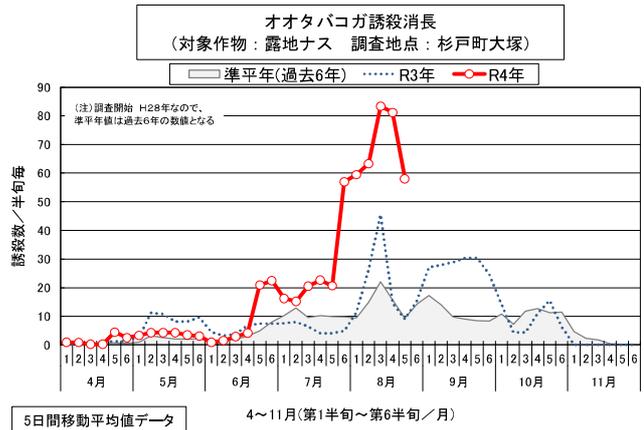
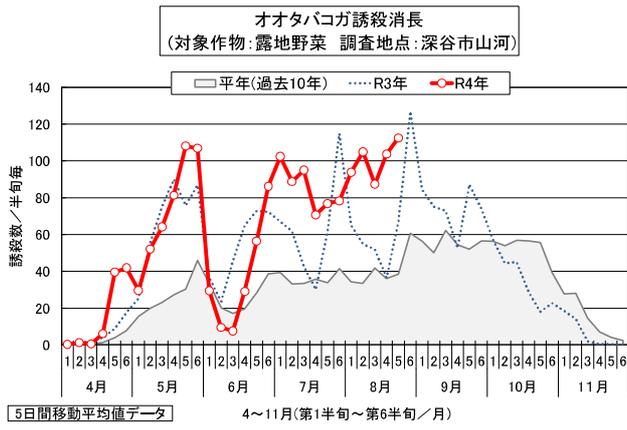


図 各調査地点のオオタバコガ誘殺消長



写真1 幼虫による葉の食害(ナス)



写真2 幼虫による果実の侵入痕(ナス)



写真3 幼虫による葉の食害(ダイズ)



写真4 幼虫による葉の食害(ブロッコリー)

表1 ナスのオオタバコガの防除薬剤例

薬剤名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
スピノエース顆粒水和剤	5	収穫前日まで	2回以内
アファーム乳剤	6	収穫前日まで	2回以内
カスケード乳剤	1 5	収穫前日まで	4回以内
トルネードエースDF	2 2 A	収穫前日まで	2回以内
プレバソンフロアブル5	2 8	収穫前日まで	2回以内
グレースシア乳剤	3 0	収穫前日まで	2回以内
プレオフロアブル	UN	収穫前日まで	4回以内

(使用基準は令和4年9月1日現在)

表2 ブロッコリーのオオタバコガの防除薬剤例

薬剤名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アファーム乳剤	6	収穫3日前まで	3回以内
グレースシア乳剤	3 0	収穫7日前まで	2回以内

(使用基準は令和4年9月1日現在)

表3 トマトのオオタバコガの防除薬剤例

薬剤名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
スピノエース顆粒水和剤	5	収穫前日まで	2回以内
アファーム乳剤	6	収穫前日まで	5回以内
カスケード乳剤	1 5	収穫前日まで	4回以内
トルネードエースDF	2 2 A	収穫前日まで	2回以内
ベネビアOD	2 8	収穫前日まで	3回以内
グレースシア乳剤	3 0	収穫前日まで	2回以内
プレオフロアブル	UN	収穫前日まで	2回以内

(使用基準は令和4年9月1日現在)

表4 ダイズのオオタバコガの防除薬剤例

薬剤名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アタブロン乳剤	1 5	収穫14日前まで	2回以内
プレバソンフロアブル5	2 8	収穫7日前まで	2回以内
グレースシア乳剤	3 0	収穫14日前まで	2回以内
プレオフロアブル	UN	収穫7日前まで	2回以内

(使用基準は令和4年9月1日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。
http://www.pref.saitama.lg.jp/a0907/nouann/saishintouroku_iouhou.html

4 問合せ先 埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン



彩の国
埼玉県

令和4年度病害虫発生予察注意報第5号

令和4年9月22日
埼玉県病害虫防除所

作物名 ネギ・ブロッコリー
病害虫名 シロイチモジヨトウ

県内のシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が平年より多く、7月27日に注意報第3号を発表しましたが、その後も多い傾向が続いています。ネギほ場での被害が増加しており、ブロッコリー等での被害も確認されています。

本虫は野菜、花きを中心として60種類以上の作物を加害します。

ネギでは、ふ化幼虫が集団で葉の先端や折れた部分から葉身内へ食入してしまうと、薬剤効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所が設置したシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、3か所すべて（深谷市、越谷市、杉戸町）で多い傾向が続いている（図）。
- (2) 9月15日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多いと予想されている。
- (3) 9月中旬にネギほ場（5か所）を調査したところ、寄生株率が平均34.4%（昨年同時期は平均0.8%）と被害が増加している。また、定植間もないほ場では今後の生育に大きく影響することが懸念される。

3 防除対策等

- (1) 早期発見に努め、卵塊やふ化直後の1～2齢幼虫の集団を見つけたら速やかに取り除き、ほ場外で適切に処分する。
- (2) 幼虫が作物内に食入してしまうと薬剤効果が低下するので、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (3) 老齢幼虫に対しては薬剤効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける。（表1、2）



図 シロイチモジヨトウ誘殺消長 (上:深谷市新戒 中:越谷市中島 下:杉戸町大塚)



写真1 シロイチモジヨトウ若齢幼虫
(体長約2mm)



写真2 ネギの被害葉



写真3 ブロッコリーの被害葉と幼虫

表1 ネギのシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アディオン乳剤	3 A	収穫7日前まで	3回以内
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アフームエクセラ顆粒水和剤	6、15	収穫7日前まで	3回以内
カスケード乳剤	15	収穫14日前まで	3回以内
ロムダンフロアブル	18	収穫7日前まで	3回以内
トルネードエースDF	22A	収穫14日前まで	2回以内
ミネクトデュオ粒剤	4A、28	収穫3日前まで	3回以内
ヨーバルフロアブル	28	収穫3日前まで	3回以内
グレースシア乳剤	30	収穫7日前まで	2回以内
プレオフロアブル	UN	収穫3日前まで	4回以内

(使用基準は令和4年9月20日現在)

表2 ブロッコリーのシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アフームエクセラ顆粒水和剤	6、15	収穫7日前まで	3回以内
ヨーバルフロアブル	28	収穫前日まで	3回以内
プレオフロアブル	UN	収穫7日前まで	2回以内

(使用基準は令和4年9月20日現在)

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。

<http://www.pref.saitama.lg.jp/a0907/nouann/saishintourokujouhou.html>

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661

令和4年度 発生予察情報	特殊報第1号	令和4年10月21日 埼玉県病害虫防除所 (TEL:048-539-0661)
-----------------	---------------	---

タバコノミハムシの発生について

県東部のナスほ場においてハムシ科甲虫による葉の食害が確認され、加害虫を同定の結果、タバコノミハムシであることが判明した。

* 特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

1 害虫名 タバコノミハムシ *Epitrix hirtipennis* (Melsheimer)

2 対象作物 ナス

3 発生経過

(1) 令和4年9月下旬に、県東部のナスほ場において、食害された葉とともにハムシ科甲虫が20頭以上確認された。一部の個体を採取し横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、タバコノミハムシであることが判明した。

(2) 本種は北アメリカおよび中央アメリカに分布するとされるタバコの害虫である。国内では、平成23年に群馬県で初めて確認され、以降計25府県で発生が確認されている。

4 本種の特徴及び生態

(1) 成虫はやや扁平な長楕円形で、体長は1.5～2.5mm。体色はやや光沢のある赤褐色で、上翅には不明瞭な黒斑がある。後腿節は顕著に肥大している（写真1）。

(2) 卵は地表に産みつけられ、孵化した幼虫は地中で根を加害した後、地表部近くで蛹化する。成虫は落葉下などで越冬する。

(3) 成虫は葉の片側の表皮を残して葉肉を食害したり、葉を貫通して食害したりする。直径1mm～2mm程度の多数の小さな円形の穴を空ける（写真2～4）。本種はナスを始め、トマト、ばれいしょ、ほおずき、雑草のワルナスビで発生が確認されている。



写真1 タバコノミハムシ成虫



写真2 ナスの葉における食害痕

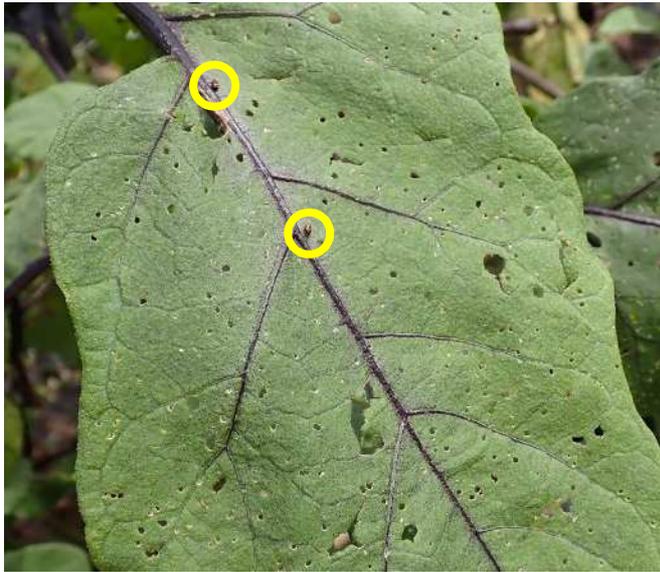


写真3 ナス被害葉とタバコノミハムシ成虫



写真4 ナスの葉における食害痕（裏側）

5 防除対策

(1) 令和4年9月現在、ナスにおいての本虫に対する登録農薬はない。

なお、本虫は主に減農薬、農薬不使用栽培のほ場で発生が確認されており、通常の薬剤防除を実施しているほ場での被害はほとんど確認されていない。

(2) 近隣のナス科植物への移動を防ぐため、本種に加害された作物は、栽培終了後速やかに残さを処分する。



病虫害防除情報

令和4年7月12日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 なしの果樹カメムシ類について

2 情報内容

果樹を加害するカメムシ類は、主にチャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシおよびアオクサカメムシの4種です。これら果樹カメムシ類の予察灯への誘殺数が6月の第4半旬から急増しており、多いところでは6月末時点で平年の約1.1倍となりました。

果樹カメムシ類は、口吻を果実に挿入して吸汁します。被害を受けた果実は、吸汁痕が残り、表皮が凸凹になるなど商品価値がなくなります。

向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高い見込みであることから、今後、果樹カメムシ類の活動がさらに活発になることが予想されます。また、新世代虫の発生に伴い、果樹園への飛来が増加するため、今後の被害拡大が懸念されます。

対策のポイントを参考に、果樹園の状況に応じた防除を実施しましょう。

(1) 生態と被害

ナシを加害するカメムシは数種類いますが、県内の予察灯への飛来はチャバネアオカメムシが最も多く、次いでクサギカメムシが多く誘殺されます。

ア チャバネアオカメムシ

体長10～12mmで光沢のある緑色で、前翅は紫がかった茶色をしています（図1）。広食性で、4月から夏にかけてはクワ、サクラ、ヒイラギ、キリなどに、夏以降はヒノキ、スギ、キリなどに寄生します。4月からナシや多くの果樹を加害しますが、いずれの樹種でも繁殖しません。



図1 チャバネアオカメムシ成虫

イ クサギカメムシ

体長13～18mmとやや大型で、暗褐色の地に、不規則な黄褐色の斑紋があります（図2）。広食性で、4月以降にマツ、スギ、サクラ、ケヤキなどに集中して飛来し、その後は好適な餌となる植物へ分散し、寄生します。ナシや多くの果樹を加害しますが、いずれの樹種でも繁殖しません。



図2 クサギカメムシ成虫

ウ 被害（果樹カメムシ類共通）

果樹園に飛来し、果実を吸汁します。加害を受けると、吸汁部がへこんで奇形果になります。収穫直前の被害では、くぼみの程度は軽くなりますが、吸汁部周辺の果肉は白くスポンジ状となり、商品価値が低下します（図3）。



図3 被害を受けた果実

(2) 気象要因等について

6月の平均気温は平年より高く（+1.1℃、熊谷）、7月7日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の平均気温は、平年より高い確率60%、降水量はほぼ平年並です。

(3) 対策のポイント

ア 多目的防災網を展張できる園では、早く設置しましょう。

イ 多目的防災網の設置を行っていない果樹園では、飛来を確認したら、表を参考に追加で薬剤防除を行いましょう。その際、収穫前日数や使用回数に注意しましょう。

ウ 過剰な農薬散布は天敵の減少により、ハダニ類の増加につながります。被害が確認されていない園では、通常通りの防除を行いましょう。

エ ピレスロイド系薬剤（IRACコード：3A）は果樹カメムシ類への効果は高いですが、天敵類への影響が大きく、ハダニ類の増加につながる恐れがあるため、なるべく連用を避けましょう。

表1 果樹カメムシ類の防除薬剤例（使用基準は令和4年7月11日現在）

薬剤名	IRACコード	使用時期	使用回数
モスピラン顆粒水溶剤	4A	収穫前日まで	3回以内
ダントツ水溶剤	4A	収穫前日まで	3回以内
スタークル/アルバリン顆粒水溶剤	4A	収穫前日まで	3回以内
アクタラ顆粒水溶剤	4A	収穫前日まで	3回以内
アーデントフロアブル	3A	収穫前日まで	3回以内
テルスター水和剤	3A	収穫前日まで	2回以内
アディオン乳剤	3A	収穫前日まで	2回以内
キックオフ顆粒水和剤	28、4A	収穫前日まで	3回以内

3 IRACコード及びFRACコードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/lab0/mechanism.html>

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 スピードスプレーヤを使用した防除ではドリフトが発生しやすいので、風のない日に適正な方法で散布する。
- 6 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661



コバトン

病虫害防除情報



令和4年7月28日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 稲の斑点米カメムシ類について

2 情報内容

(1) 稲の斑点米カメムシ類

稲の出穂後20日頃まで籾を吸汁し、斑点米を発生させるカメムシ類を総称して斑点米カメムシ類といいます。本県では53種確認されていますが、平坦地では比較的小型のアカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、中山間地では比較的大型のクモヘリカメムシが主要な種となります。大型種のカメムシは吸汁害が大きくなる傾向があります。



アカヒゲホソミドリカスミカメ成虫(体長約6mm)



アカヒゲホソミドリカスミカメによる被害粒



クモヘリカメムシ成虫(体長約16mm)



クモヘリカメムシによる被害粒

参照：病虫害診断のポイントと防除対策 「斑点米カメムシ類」

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

(2) 畦畔・雑草地発生調査結果

病虫害防除所では、毎年7月中旬に畦畔・雑草地を対象とした水稻の斑点米カメムシ類の発生状況を調査しており、令和4年7月26日にその結果を発表したとこ

ろです。本年は、1 地点当たりの平均頭数は 25.8 頭(平年 20.2 頭)で平年並ですが、直近 5 年平均(12.2 頭) より 2 倍以上多くなっています。また調査地点によるばらつきが大きく、70 頭を超える調査地点が 17 地点中 3 地点あるなど、ほ場周辺の雑草管理の状況によっては被害が懸念されます。

本年確認された種は、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ、トゲシラホシカメムシ、マルシラホシカメムシ、ヒゲナガカメムシ、ブチヒゲカメムシで、小型種のアカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメが 95%を占めます。しかし、県東部で大型種のホソハリカメムシが確認された(3%)ほか、予察灯にもミナミアオカメムシ、イネカメムシなどの大型種が誘殺されているので、これらが本田に侵入すると平坦地でも被害が大きくなる可能性があります。



アカスジカスミカメ成虫(体長約 5mm)



ホソハリカメムシ成虫(体長約 10mm)



ミナミアオカメムシ成虫(体長約 14mm)



イネカメムシ成虫(体長約 12mm)

参照：病虫害診断のポイントと防除対策 「ミナミアオカメムシ」

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果（令和 4 年 7 月 26 日）

https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/bojo/hantenmai_chosa.html

(3) 防除対策

稲の出穂前後に畦畔や周辺の除草を行うと、本害虫を水田に追い込んでしまいます。出穂前 2 週間と出穂後 2 週間は除草を行わないようにしてください。

本害虫の多発生が認められた場合、速やかに薬剤防除を行いましょ。なお、農薬の散布は、蜜蜂の活動が最も盛んな時間帯（午前 8 時～12 時まで）を避ける

など、被害の軽減に努めてください。

表 稲のカメムシ類の防除薬剤例(地上防除・無人航空機防除両対応)

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用回数
キラップフロアブル	2B	収穫 14 日前まで	2 回以内
MR.ジョーカーEW	3A	収穫 14 日前まで	2 回以内
ダントツフロアブル	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫 7 日前まで	3 回以内
エミリアフロアブル	4F	収穫 7 日前まで	2 回以内

(使用基準は令和 4 年 7 月 27 日現在)

3 IRAC コード及び FRAC コードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍率は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和 4 年 5 月 1 日～ 8 月 3 1 日）

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661



病虫害防除情報

令和4年 9月 5日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 チャのチャノキイロアザミウマについて

2 情報内容

(1) チャノキイロアザミウマの発生状況

8月中旬の発生予察調査では、虫数（4地点の成虫・幼虫数）が、過去10年間で最も多い結果となり、これは平年の約8倍の発生量です（図1）。

例年、9月は発生量が最も多くなるので、今後注意が必要です。

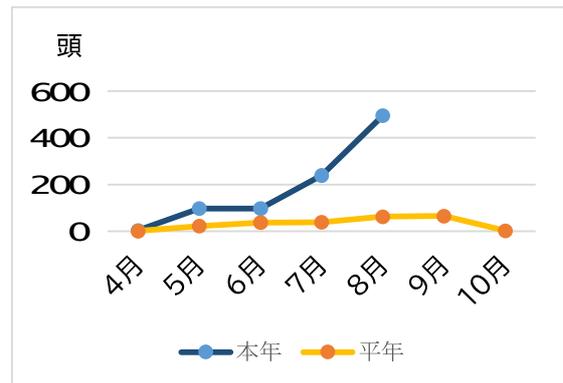


図1 チャノキイロアザミウマの発生量（4地点の成虫・幼虫数）

(2) チャノキイロアザミウマの特徴と被害

成虫の体長は0.8～0.9mmで体色は黄色で前翅は灰色です（写真1）。成虫で越冬し、4月から10月までの間に7～8回世代を繰り返します。

被害は、成虫、幼虫が、新芽、新葉、新梢を吸汁加害し、食害された部分は褐変硬化します（写真2、3）。



写真1 チャノキイロアザミウマ（成虫）



写真2 葉裏のスジ状の被害



写真3 葉表からも葉裏の被害が観察できる場合がある

(3) 防除のポイント

乾燥した晴天が続くと急激に増殖し、秋芽の萌芽・生育期は最も被害を受けます。特に萌芽期～生育初期の加害は被害が大きくなるので、芽の生育状態に合わせて、表1を参考にタイミングを逃さないよう防除しましょう。

表1 チャのチャノキイロアザミウマの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使 用 時 期	使用回数
MR. ジョーカー水和剤	3 A	摘採 2 1 日前まで	2 回以内
コテツフロアブル*	1 3	摘採 7 日前まで	2 回以内
ガンバ水和剤*	1 2 A	摘採 1 4 日前まで	1 回
スタークル顆粒水溶剤/ アルバリン顆粒水和剤	4 A	摘採 7 日前まで	2 回
ハチハチフロアブル*	2 1 A	摘採 1 4 日前まで	1 回
ウララ D F	2 9	摘採 7 日前まで	1 回
コルト顆粒水和剤	9 B	摘採 7 日前まで	2 回以内
テッパン液剤	2 8	摘採 3 日前まで	1 回
グレーシア乳剤	3 0	摘採 1 4 日前まで	1 回

* 劇物

(使用基準は令和4年9月1日現在)

3 I R A Cコード及びF R A Cコードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、I R A C（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びF R A C（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labomechanism.html>

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍率は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661



コバトン

病虫害防除情報



令和4年10月26日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 ダイズの吸実性カメムシ類について

2 情報内容

(1) ダイズの吸実性カメムシ類

ダイズの吸実性カメムシは莢伸長期から子実肥大期に子実を吸汁加害し、扁平莢や奇形粒を生じさせます。吸実されたダイズは子実への養分転流が抑制されるため、黄変が遅く、成熟期を過ぎても落葉せずに青立ちすることがあります。

吸実性カメムシ類にはアオクサカメムシ、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ等がありますが、近年他の吸実性カメムシ類より発生が遅いミナミアオカメムシが多発傾向にあり、収穫直前まで加害することから、被害が大きくなる傾向があります。



ミナミアオカメムシ成虫(体長約 13mm)



カメムシによる被害粒

参照：病虫害診断のポイントと防除対策

「ダイズのカメムシ類」 「ミナミアオカメムシ」

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

(2) 本年の発生状況

10月中旬の発生状況調査では、発生量は平年に比べて多くなっています。本年は7月中旬の大雨では種が遅れたり、まき直しをしたほ場の生育がやや遅れており、ミナミアオカメムシの多発ほ場が見受けられます。

(3) 防除対策

遅まきほ場や在来系統など晩生品種を作付しているほ場では、まだ被害を受ける可能性があります。ミナミアオカメムシ等が多発している場合は、収穫前日数に注意して、速やかに薬剤防除を実施してください。



莢に寄生するミナミアオカメムシ幼虫

表 ダイズのカメムシ類の防除薬剤例(地上防除・無人航空機防除両対応)

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用回数
カスケード乳剤	15	収穫 7 日前まで	2 回以内
ダントツフロアブル	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内
スタークル液剤 10	4A	収穫 7 日前まで	2 回以内
キラップフロアブル	2B	収穫 7 日前まで	2 回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫 14 日前まで	3 回以内

(使用基準は令和 4 年 10 月 25 日現在)

3 IRAC コード及びFRAC コードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍率は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

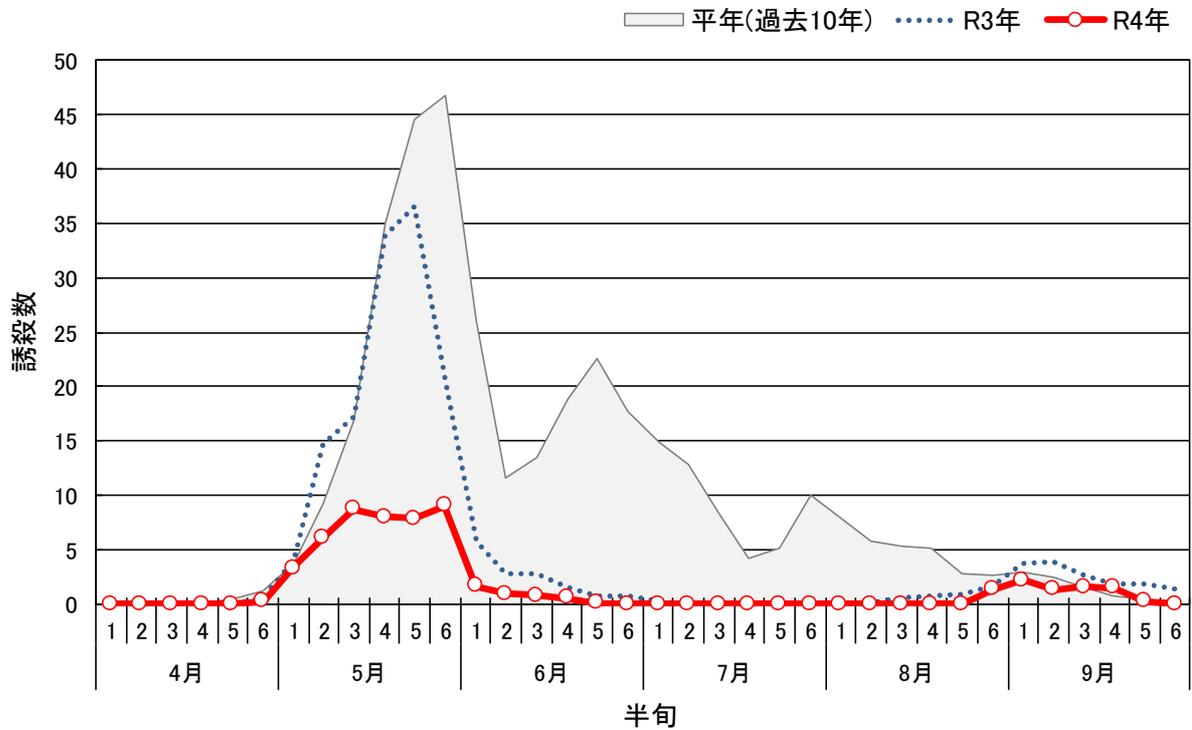
問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661

(2) 病虫害発生予察調査等結果

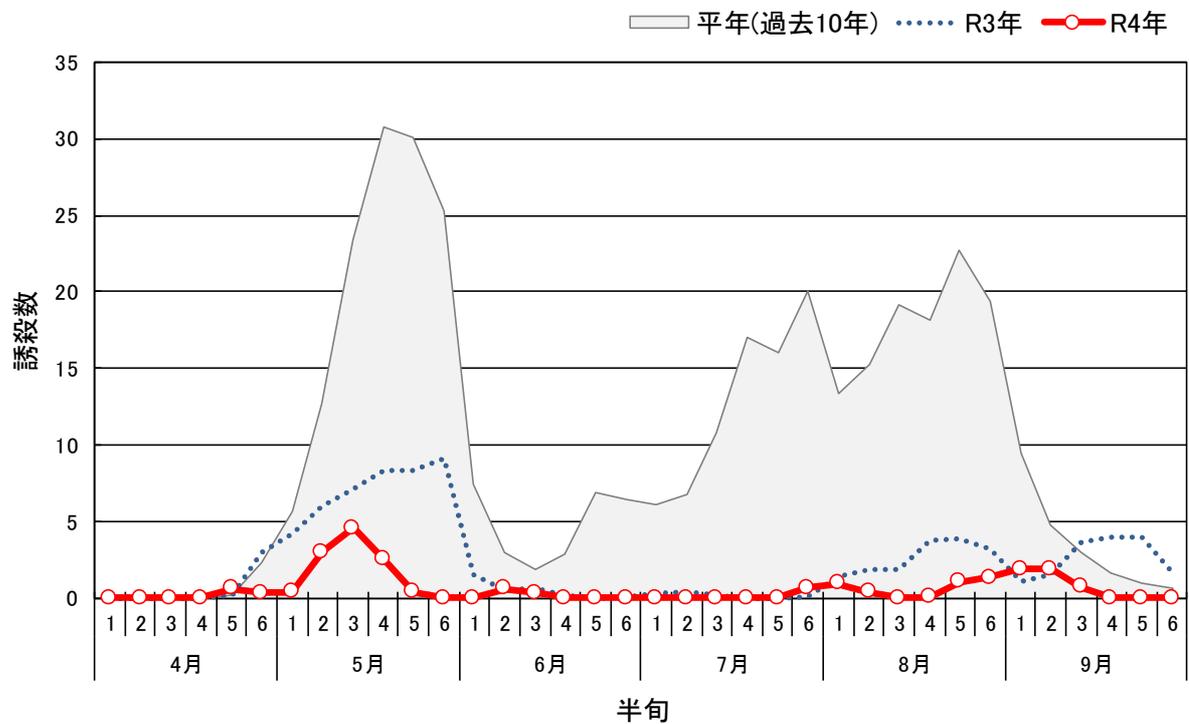
ア 水稲・麦

(ア) フタオビコヤガ (イネアオムシ) のフェロモントラップ調査 (4~9月)

対象作物:水稲 調査地点:熊谷市中曽根



対象作物:水稲 調査地点:加須市戸室



(イ) 麦ほ場におけるウンカ・ヨコバイ類生息密度調査(5月)

調査方法： 麦類の乳熟期(令和4年5月18日～20日)に、県内15地点の麦類ほ場において、1地点3か所で1m幅(0.2～0.6m²)の麦穂を10回叩いて落ちて来るヒメトビウンカを採取し、1m²当たりの生息密度を算出した。

調査結果： 令和4年度のヒメトビウンカの麦類叩き出し調査の結果は、18.0頭/m²で平年並ではあるが、過去10年では極端に高かった2013年(74.9頭/m²)に次いで高い。また、20頭/m²以上の調査地点が7か所(47%)あり、平年(17%)に比べて生息密度の高い調査地点が多い。

表. 令和3年5月麦類ウンカ・ヨコバイ生息密度調査結果 (単位： 頭/m²)

調査場所	調査月日	麦種	ヒメトビウンカ			ツマグロヨコバイ		
			成虫	幼虫	計	成虫	幼虫	計
川越市古谷上	5/20	小麦	0.0	4.4	4.4	0.0	0.0	0.0
坂戸市片柳	5/20	小麦	0.0	2.2	2.2	0.0	0.0	0.0
熊谷市樋春	5/18	小麦	0.0	2.2	2.2	0.0	0.0	0.0
熊谷市中曾根	5/18	小麦	2.5	46.7	49.2	0.0	0.8	0.8
川島町戸守	5/18	小麦	1.1	25.6	26.7	0.0	1.1	1.1
熊谷市高本	5/18	小麦	0.0	38.3	38.3	0.0	0.0	0.0
鴻巣市屈巢	5/18	小麦	0.0	10.0	10.0	0.0	0.0	0.0
行田市上池守	5/18	大麦	1.3	1.3	2.7	0.0	1.3	1.3
行田市前谷	5/18	小麦	0.0	20.0	20.0	0.0	1.1	1.1
加須市大越	5/18	小麦	0.0	41.3	41.3	0.0	1.3	1.3
熊谷市飯塚	5/18	小麦	0.0	2.2	2.2	0.0	4.4	4.4
上里町長浜	5/18	小麦	0.0	4.2	4.2	0.0	0.0	0.0
本庄市児玉町	5/18	小麦	0.0	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0
白岡市太田新井	5/18	大麦	2.2	40.0	42.2	0.0	0.0	0.0
蓮田市駒崎	5/18	小麦	0.0	4.4	4.4	0.0	0.0	0.0
平均(15地点)			0.5	17.5	18.0	0.0	0.7	0.7
昨年(令和3年)			0.3	3.4	3.6	0.0	0.7	0.7
平年値(過去10年間:平成24年～令和3年)			2.3	13.5	15.8	0.1	0.5	0.5

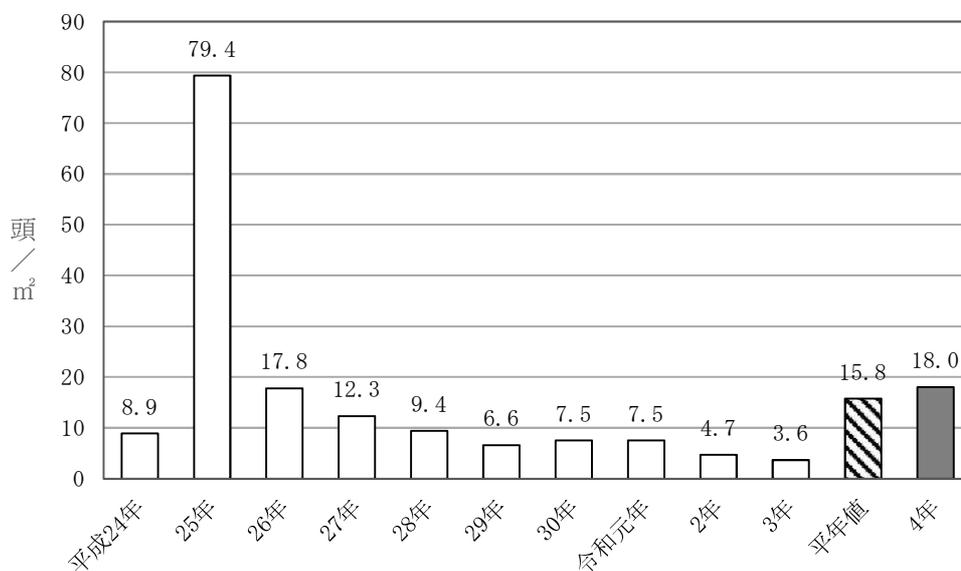


図. 令和4年5月ヒメトビウンカ密度調査結果 (麦類叩き出し)

(ウ) 水稲予察灯調査 (5~9月)

病害虫名		ニカメイガ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	1	5	1	0	6	
	2	2	0	22	4	7	
	3	1	0	6	2	2	
	4	3	0	0	6	0	
	5	0	0	4	5	1	
	6	0	3	4	6	2	
	計	7	8	37	23	18	93
	平年値	0.8	0.9	2.9	2.3	1.5	8.4
川島町 上八ツ林	1	0	1	3	0	3	
	2	1	0	2	1	0	
	3	0	1	0	0	2	
	4	0	1	2	0	0	
	5	1	3	1	3	0	
	6	2	1	0	5	0	
	計	4	7	8	9	5	33
	平年値	4.2	3.8	1.9	3.4	0.7	14.0
熊谷市 玉井	1	0	0	1	0	1	
	2	1	0	2	3	0	
	3	2	0	0	2	0	
	4	2	3	0	0	0	
	5	1	1	0	2	0	
	6	1	5	0	0	0	
	計	7	9	3	7	1	27
	平年値	2.2	4.9	2.4	1.9	2.0	13.4
本庄市 児玉町 吉田林	1	0	1	1	2	6	
	2	0	0	6	1	1	
	3	0	0	4	3	0	
	4	0	0	4	4	0	
	5	1	0	9	7	0	
	6	2	0	2	7	0	
	計	3	1	26	24	7	61
	平年値	0.8	1.1	5.0	2.2	0.8	9.9
加須市 大越	1	0	0	0	9	12	
	2	0	1	0	5	6	
	3	4	0	0	1	3	
	4	4	2	1	6	0	
	5	2	1	10	0	0	
	6	2	0	3	6	0	
	計	12	4	14	27	21	78
	平年値	28.6	7.3	7.9	10.9	1.4	54.7
春日部市 樋籠	1	0	0	0	0	0	
	2	1	1	1	4	0	
	3	6	0	1	2	0	
	4	5	0	3	1	0	
	5	5	2	5	0	0	
	6	1	0	4	0	0	
	計	18	3	14	7	0	42
	平年値	1.6	2.2	4.9	7.6	1.4	17.7

病害虫名		イネミズゾウムシ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	1	8	18	
	2	0	0	19	9	7	
	3	0	0	4	13	16	
	4	0	0	0	0	3	
	5	0	0	5	1	0	
	6	1	1	21	12	0	
	計	1	1	50	43	44	139
	平年値	2.5	1.3	12.6	2.3	0.1	18.8
川島町 上八ツ林	1	0	0	0	2	0	
	2	0	0	1	0	0	
	3	0	0	0	1	0	
	4	0	0	2	1	0	
	5	1	0	4	0	0	
	6	3	0	0	0	0	
	計	4	0	7	4	0	15
	平年値	0.4	2.1	1.0	0.4	0.1	4.0
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	1	0	0	0	
	5	0	2	0	0	0	
	6	0	0	1	0	0	
	計	0	3	1	0	0	4
	平年値	0.9	1.6	9.4	1.9	0.2	14.0
本庄市 児玉町 吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	1	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	1	0	0	0	
	5	1	0	0	0	0	
	6	1	0	0	0	0	
	計	2	1	1	0	0	4
	平年値	0.2	0.7	0.7	1.0	0.2	2.8
加須市 大越	1	0	1	1	4	0	
	2	0	0	6	1	0	
	3	0	0	0	2	0	
	4	0	0	95	1	0	
	5	0	0	45	0	0	
	6	0	0	16	1	0	
	計	0	1	163	9	0	173
	平年値	24.9	2.9	73.4	8.1	0.0	108.4
春日部市 樋籠	1	0	0	0	2	0	
	2	1	0	6	1	0	
	3	12	0	1	4	0	
	4	1	0	39	0	0	
	5	0	0	15	1	0	
	6	5	0	5	0	0	
	計	19	0	66	8	0	93
	平年値	12.0	4.1	133.3	9.4	0.3	159.1

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH24~R1年度と大越R3の9年間の平均値を使用。

病害虫名		ツマグロヨコバイ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
川越市	3	0	0	0	0	0	
南田島	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	0	0
平年値		0.0	0.4	2.3	4.5	4.5	11.7
	1	0	0	0	2	1	
	2	0	0	2	2	1	
川島町	3	0	0	1	4	1	
上八ツ林	4	0	1	13	3	0	
	5	0	0	3	1	0	
	6	0	0	2	5	0	
計		0	1	21	17	3	42
平年値		1.5	7.3	45.9	36.0	46.2	136.9
	1	0	0	1	1	2	
	2	0	0	0	0	0	
熊谷市	3	0	0	0	0	1	
玉井	4	0	1	4	0	2	
	5	1	0	1	0	0	
	6	0	0	0	1	0	
計		1	1	6	2	5	15
平年値		0.5	0.8	11.4	40.9	39.2	446.8
	1	0	0	0	0	33	
	2	0	0	4	2	21	
本庄市	3	0	0	0	0	4	
児玉町	4	0	0	0	4	7	
吉田林	5	0	0	0	3	0	
	6	1	1	0	4	0	
計		1	1	4	13	65	84
平年値		0.8	3.3	13.7	176.9	488.5	683.2
	1	0	0	1	2	26	
	2	0	0	6	11	21	
加須市	3	0	0	3	21	17	
大越	4	0	0	15	34	11	
	5	0	4	12	2	0	
	6	0	4	3	34	0	
計		0	8	40	104	75	227
平年値		2.0	9.0	79.1	77.8	81.0	231.2
	1	0	0	0	1	0	
	2	0	0	0	0	0	
春日部市	3	0	0	0	3	0	
樋籠	4	0	13	6	0	0	
	5	0	1	1	0	0	
	6	0	2	0	0	0	
計		0	16	7	4	0	27
平年値		0.3	8.5	9.6	9.5	93.5	121.4

病害虫名		セジロウシカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	2	0	1	
	2	0	0	1	2	0	
川越市	3	0	0	0	7	0	
南田島	4	0	0	0	8	0	
	5	0	0	0	12	0	
	6	0	0	1	1	2	
計		0	0	4	30	3	37
平年値		0.0	1.5	18.4	141.6	60.2	221.7
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
川島町	3	0	0	0	0	0	
上八ツ林	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	2	0	
	6	0	0	0	1	0	
計		0	0	0	3	0	3
平年値		0.0	0.6	3.4	3.8	4.4	12.2
	1	0	0	1	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
熊谷市	3	0	0	0	0	0	
玉井	4	0	0	0	1	0	
	5	0	0	5	4	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	6	5	0	11
平年値		0.0	0.1	4.2	20.4	13.7	38.4
	1	0	0	0	0	4	
	2	0	0	0	0	0	
本庄市	3	0	0	0	1	0	
児玉町	4	0	0	0	6	0	
吉田林	5	0	0	0	3	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	10	4	14
平年値		0.0	0.0	1.4	74.0	23.4	98.8
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	2	0	
加須市	3	0	0	0	2	0	
大越	4	0	0	1	6	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	1	0	
計		0	0	1	11	0	12
平年値		0.0	1.2	2.7	9.5	4.1	16.0
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
春日部市	3	0	0	0	2	0	
樋籠	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	1	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	1	2	0	3
平年値		0.1	0.8	1.2	2.0	1.5	5.6

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH24～R1年度と大越R3の9年間の平均値を使用。

病害虫名		ヒメトビウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	13	24	0	
	2	0	0	16	21	0	
川越市	3	0	0	0	6	0	
南田島	4	0	0	0	1	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	2	2	0	0	
計	0	2	31	52	0	85	
平年値	3.8	28.6	276.2	262.3	11.8	582.7	
	1	0	0	11	215	0	
	2	0	0	21	57	11	
川島町	3	0	0	2	45	4	
上八ツ林	4	0	0	6	3	1	
	5	0	3	2	3	0	
	6	0	5	8	0	0	
計	0	8	50	323	16	397	
平年値	1.9	19.7	208.5	64.9	17.8	312.8	
	1	0	0	19	49	0	
	2	0	0	29	48	2	
熊谷市	3	0	0	2	28	0	
玉井	4	0	2	1	9	1	
	5	0	2	4	15	0	
	6	0	2	9	2	0	
計	0	6	64	151	3	224	
平年値	5.0	29.3	469.7	596.2	57.5	1157.7	
	1	0	0	4	30	1	
	2	0	0	10	83	5	
本庄市	3	0	0	2	7	0	
児玉町	4	0	0	2	11	0	
吉田林	5	0	0	2	9	0	
	6	0	2	2	2	1	
計	0	2	22	142	7	173	
平年値	3.1	5.4	34.0	207.2	49.3	299.0	
	1	0	0	117	70	8	
	2	0	0	437	249	17	
加須市	3	0	0	9	481	2	
大越	4	0	2	13	132	3	
	5	0	10	77	1	0	
	6	0	45	21	6	0	
計	0	57	674	939	30	1700	
平年値	0.6	14.4	47.8	211.3	4.5	254.6	
	1	0	1	7	1	0	
	2	0	0	3	3	0	
春日部市	3	0	0	1	16	1	
樋籠	4	0	0	2	2	0	
	5	1	0	0	0	0	
	6	0	2	1	0	0	
計	1	3	14	22	1	41	
平年値	0.4	26.3	22.7	13.3	3.4	66.1	

病害虫名		フタオビコヤガ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	3	3	2	
	2	0	0	2	2	1	
川越市	3	0	0	0	0	0	
南田島	4	0	0	0	1	2	
	5	0	0	1	2	0	
	6	0	0	0	0	0	
計	0	0	6	8	5	19	
平年値	0.6	1.9	7.6	18.6	3.2	31.9	
	1	0	0	0	0	2	
	2	0	0	0	0	1	
川島町	3	0	0	0	0	2	
上八ツ林	4	0	1	1	2	1	
	5	0	0	1	4	0	
	6	0	1	0	9	0	
計	0	2	2	15	6	25	
平年値	9.5	5.3	9.0	12.0	2.8	38.6	
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	1	0	1	
熊谷市	3	0	0	0	0	0	
玉井	4	0	0	0	0	1	
	5	0	0	0	2	0	
	6	0	0	0	0	0	
計	0	0	1	2	2	5	
平年値	0.5	1.2	1.4	12.2	6.6	21.9	
	1	0	0	0	0	2	
	2	0	0	5	0	4	
本庄市	3	0	0	0	0	2	
児玉町	4	0	0	1	0	3	
吉田林	5	0	0	0	4	1	
	6	0	0	0	5	1	
計	0	0	6	9	13	28	
平年値	0.1	1.8	18.2	55.7	14.8	90.6	
	1	0	0	0	9	19	
	2	0	0	0	30	2	
加須市	3	0	0	1	24	2	
大越	4	1	1	1	30	2	
	5	1	2	7	9	0	
	6	1	1	2	3	0	
計	3	4	11	105	25	148	
平年値	3.4	6.1	21.7	28.1	6.3	61.8	
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	1	0	0	0	
春日部市	3	0	0	0	0	0	
樋籠	4	0	1	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	1	0	0	0	
計	0	3	0	0	0	3	
平年値	1.1	2.7	1.6	6.7	1.8	13.9	

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH24～R1年度と大越R3の9年間の平均値を使用。

病害虫名		斑点米カメムシ類(アカヒゲを除く)					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	16	1	0	
	2	0	0	5	1	1	
	3	0	0	1	1	0	
	4	0	2	0	0	0	
	5	0	1	3	1	0	
	6	0	2	1	1	0	
	計	0	5	26	5	1	37
	平年値	0.4	0.9	4.5	9.4	4.0	19.2
川島町 上八ツ林	1	0	0	0	1	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	1	1	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	2	2	0	0	
	計	0	2	2	2	1	7
	平年値	0.2	3.3	3.6	10.1	4.5	21.7
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	1	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	1	0	0	0	
	5	0	1	0	0	0	
	6	0	1	0	0	0	
	計	0	3	0	1	0	4
	平年値	0.1	0.8	1.3	2.5	0.6	5.3
本庄市 児玉町 吉田林	1	0	0	13	0	5	
	2	0	0	2	0	7	
	3	0	0	1	0	11	
	4	0	1	1	3	4	
	5	1	0	3	3	0	
	6	0	15	0	0	7	
	計	1	16	20	6	34	77
	平年値	1.3	4.4	15.3	23.6	12.5	57.1
加須市 大越	1	0	1	1	1	1	
	2	0	0	5	3	1	
	3	0	0	0	4	0	
	4	0	0	1	2	2	
	5	2	4	1	2	0	
	6	0	4	0	4	0	
	計	2	9	8	16	4	39
	平年値	0.0	0.6	3.7	16.5	5.6	23.9
春日部市 樋籠	1	0	0	0	1	0	
	2	0	0	3	1	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	1	0	0	
	5	0	1	0	1	0	
	6	0	2	1	1	0	
	計	0	3	5	4	0	12
	平年値	1.6	4.8	4.9	8.2	2.0	21.5

病害虫名		アカヒゲホソミドリカスミカメ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	16	0	1	
	2	0	0	27	1	0	
	3	0	0	3	0	0	
	4	0	7	0	2	1	
	5	0	10	0	2	0	
	6	0	10	0	9	0	
	計	0	27	46	14	2	89
	平年値	0.4	33.0	71.9	60.8	14.1	180.2
川島町 上八ツ林	1	0	0	0	8	2	
	2	0	0	0	1	0	
	3	0	0	0	3	1	
	4	0	0	3	0	1	
	5	0	0	0	1	0	
	6	0	1	2	1	0	
	計	0	1	5	14	4	24
	平年値	0.4	12.9	31.4	10.0	4.5	59.2
熊谷市 玉井	1	0	0	61	14	0	
	2	0	0	27	2	1	
	3	0	9	1	17	0	
	4	0	88	4	2	0	
	5	0	11	0	16	0	
	6	2	80	2	3	0	
	計	2	188	95	54	1	340
	平年値	24.9	276.7	298.3	157.6	39.5	797.0
本庄市 児玉町 吉田林	1	0	4	33	5	4	
	2	0	1	46	5	3	
	3	0	12	4	4	13	
	4	0	84	11	2	4	
	5	1	12	23	10	0	
	6	0	31	3	7	1	
	計	1	144	120	33	25	323
	平年値	1.6	31.3	134.0	99.3	23.3	289.5
加須市 大越	1	0	1	6	7	16	
	2	0	0	40	10	2	
	3	0	1	1	21	0	
	4	0	5	12	17	0	
	5	0	60	2	1	0	
	6	0	9	14	18	0	
	計	0	76	75	74	18	243
	平年値	2.7	60.1	66.1	48.5	4.5	176.0
春日部市 樋籠	1	0	0	8	0	0	
	2	0	0	4	2	0	
	3	0	0	0	6	0	
	4	0	9	9	0	0	
	5	0	5	0	0	0	
	6	0	5	0	0	0	
	計	0	19	21	8	0	48
	平年値	1.4	19.5	15.9	12.5	1.8	51.1

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH24～R1年度と大越R3の9年間の平均値を使用。

病害虫名		トビイロウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0
川越市	3	0	0	0	0	0	0
南田島	4	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	1	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0
川島町	3	0	0	0	0	0	0
上八ツ林	4	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.2	0.8	1.0
	1	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0
熊谷市	3	0	0	0	0	0	0
玉井	4	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	1	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0
本庄市	3	0	0	0	0	0	0
児玉町	4	0	0	0	0	0	0
吉田林	5	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	1	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0
加須市	3	0	0	0	0	0	0
大越	4	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	1	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0
春日部市	3	0	0	0	0	0	0
樋籠	4	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH24～R1年度と大越R3の9年間の平均値を使用。

(エ) いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（BLASTAM）（5～9月）

a 葉いもち発生予測システム（BLASTAM）について

イネいもち病は空気伝染性病害であるため、発生には気象条件が大きく影響する。気温が20～25℃で曇雨天の日が続き、イネの葉に水滴が付いている状態がいもち病菌の分生子の発芽、侵入、蔓延に好適な条件であり、発生が助長される。

葉いもち発生予測システム（BLASTAM）では、アメダス各地点の気象データの降水量、日照時間、風速からイネ葉面の濡れ時間（湿潤時間）を推定し、気温との組み合わせで、いもち病感染好適条件を判定するものである。

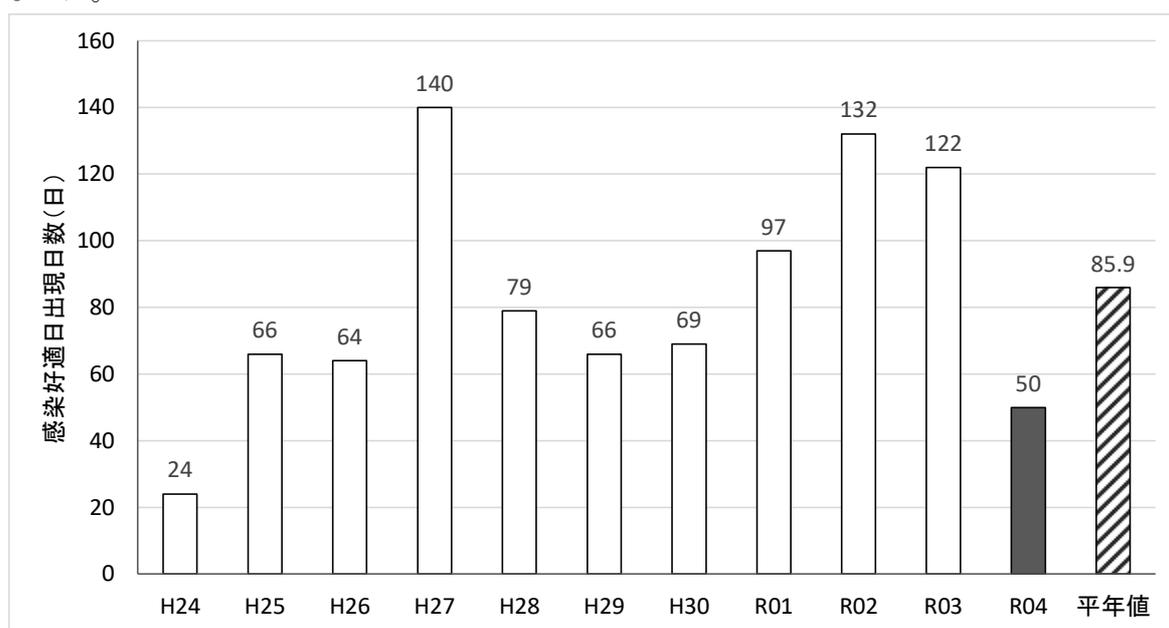
b イネいもち病の発生状況について

ホームページ上で、6月1日から15日ごとに、県内の感染好適日の出現状況を発表し、平年（過去10年間）との比較を数値化することで、適期防除を啓発した。

埼玉県において感染好適日が初出現したのは6月15日（平年5月27日）であり、平年より遅かった。例年では5月末から7月中旬ごろまでが梅雨であり、いもち病の感染好適日が多く出現するが、本年は6月下旬に記録的猛暑となり一時梅雨明けが発表されるなど例年では見られない気候が出現した。その影響で感染好適日は6月25日～7月15日まで0日（平年26.2日）であった。その後戻り梅雨のような形で7月12日以降気温が下がり、曇や雨の日が約10日間続き、梅雨明けは7月23日と訂正された。例年にない気象経過の影響もあり、いもち病の感染好適日は県内8か所で計50日と平年（85.9日）より少ない日数であった。

7月中旬に実施した、イネいもち病（葉いもち）発生予察調査では、発病地点率は36.4%と平年並（平年39.6%）であった。

8月末の時点で、5月20日までの移植地域の葉いもちの発生面積は72haで平年よりやや少なかった。5月20日以降の移植地域では、葉いもちの発生面積が996haで平年よりやや少なかったが、9月の降水量が多かったため穂いもちの発生面積は34haと平年並の発生となった。



(5月1日～9月30日における県内8地点の合計日数)

表. いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（令和4年5～9月）

※JPP-NETより引用

地点 月日	寄居	熊谷	久喜	秩父	鳩山	たさい まい	越谷	所沢
5月1日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月2日	3	—	3	3	3	—	—	—
5月3日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月4日	—	—	—	—	—	—	—	—
（ ） 感染好適日が出現しなかったため省略								
5月28日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月29日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月30日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月31日	—	—	—	—	4	—	—	—
6月1日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月2日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月3日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月4日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月5日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月6日	—	—	—	—	—	—	4	—
6月7日	—	4	—	—	—	—	4	—
6月8日	3	4	4	3	1	1	4	—
6月9日	4	—	4	4	—	4	—	—
6月10日	4	—	—	—	4	—	—	—
6月11日	1	—	1	—	—	—	—	1
6月12日	4	—	4	4	—	—	4	—
6月13日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月14日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月15日	3	●	●	3	1	●	4	3
6月16日	—	—	—	3	—	—	—	—
6月17日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月18日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月19日	?	—	●	—	—	●	●	1
6月20日	?	—	—	—	—	—	—	—
6月21日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月22日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月23日	●	—	—	●	●	●	—	●
6月24日	—	—	—	—	●	—	—	—
6月25日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月26日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月27日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月28日	—	—	—	—	—	3	—	—
6月29日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月30日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月1日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月2日	—	—	—	?	—	—	—	—
7月3日	—	—	—	?	—	—	—	—
7月4日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月5日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月6日	—	—	2	2	2	2	—	—
7月7日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月8日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月9日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月10日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月11日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月12日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月13日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月14日	2	2	—	2	2	—	2	2
7月15日	2	—	2	2	2	2	2	2
7月16日	—	—	●	●	—	—	—	●

地点 月日	寄居	熊谷	久喜	秩父	鳩山	たさい まい	越谷	所沢
7月17日	●	●	●	—	●	●	●	—
7月18日	—	—	—	—	●	—	—	—
7月19日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月20日	—	—	—	—	—	—	—	—
（ ） 感染好適日が出現しなかったため省略								
8月13日	3	—	—	2	3	—	—	—
8月14日	—	—	—	2	—	—	—	—
8月15日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月16日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月17日	3	—	—	2	—	—	—	—
8月18日	2	2	2	2	2	2	2	—
8月19日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月20日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月21日	2	2	2	2	2	2	2	2
8月22日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月23日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月24日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月25日	2	—	—	—	—	—	—	—
8月26日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月27日	2	—	—	—	3	—	—	—
8月28日	2	—	2	2	—	—	—	—
8月29日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月30日	4	2	—	●	2	—	—	●
8月31日	●	—	—	—	●	●	●	●
9月1日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月2日	●	●	●	—	—	—	—	—
9月3日	—	●	●	—	●	●	—	4
9月4日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月5日	●	●	—	—	●	—	—	—
9月6日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月7日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月8日	—	—	—	—	—	2	—	—
9月9日	●	2	2	●	—	—	2	—
9月10日	●	—	—	—	—	—	—	—
9月11日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月12日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月13日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月14日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月15日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月16日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月17日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月18日	—	—	—	—	●	2	—	●
9月19日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月20日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月21日	—	—	—	—	—	—	4	—
9月22日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月23日	—	●	●	●	—	●	—	—
9月24日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月25日	—	—	—	—	—	●	●	—
9月26日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月27日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月28日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月29日	—	—	—	—	—	—	—	—
9月30日	—	—	—	—	—	—	—	—
計	7	6	7	5	8	8	4	5
平年値	11.7	11.2	9.7	12.9	12.1	8.3	12.5	7.5

・発生指標の解説(数字の1～4は感染のしやすさの段階を示すものではない。)

●	感染好適条件	湿潤時間中の平均気温が15～25℃であり、湿潤時間が湿潤時間中の平均気温ごとに必要な時間満たし、当日を含めてその日以前5日間の日平均気温の平均値が20～25℃の範囲にある
1	準好適条件 1	湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満
2	準好適条件 2	湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が21℃以上
3	準好適条件 3	湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤時間中の平均気温が15～25℃の範囲外
4	準好適条件 4	湿潤時間が湿潤時間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い
—	好適条件なし	
?	判定不能	

(オ) トビイロウンカ、セジロウンカ、コブノメイガ飛来予測日回数(5~9月)

令和4年

月日	本年	平年												
05/01	0	0.0	06/01	0	0.0	07/01		0.2	08/01		0.0	09/01		0.0
05/02	0	0.0	06/02	0	0.0	07/02	J	0.2	08/02	J	0.0	09/02	J	0.0
05/03	0	0.1	06/03	0	0.1	07/03	P	0.3	08/03	P	0.0	09/03	P	0.0
05/04	0	0.0	06/04	0	0.1	07/04	P	0.4	08/04	P	0.0	09/04	P	0.0
05/05	0	0.0	06/05	0	0.1	07/05	-	0.2	08/05	-	0.0	09/05	-	0.0
05/06	0	0.0	06/06	0	0.0	07/06	N	0.2	08/06	N	0.0	09/06	N	0.0
05/07	0	0.2	06/07	0	0.0	07/07	E	0.3	08/07	E	0.0	09/07	E	0.1
05/08	0	0.1	06/08	0	0.0	07/08	T	0.1	08/08	T	0.0	09/08	T	0.0
05/09	0	0.0	06/09	0	0.1	07/09	の	0.2	08/09	の	0.2	09/09	の	0.0
05/10	0	0.0	06/10	0	0.0	07/10	シ	0.1	08/10	シ	0.1	09/10	シ	0.0
05/11	0	0.1	06/11	0	0.0	07/11	ス	0.1	08/11	ス	0.0	09/11	ス	0.0
05/12	0	0.1	06/12	0	0.1	07/12	テ	0.1	08/12	テ	0.0	09/12	テ	0.1
05/13	0	0.2	06/13	0	0.0	07/13	ム	0.2	08/13	ム	0.0	09/13	ム	0.1
05/14	0	0.0	06/14	0	0.1	07/14	障	0.1	08/14	障	0.3	09/14	障	0.0
05/15	0	0.0	06/15	0	0.1	07/15	害	0.1	08/15	害	0.1	09/15	害	0.0
05/16	0	0.2	06/16	0	0.1	07/16	に	0.1	08/16	に	0.1	09/16	に	0.0
05/17	0	0.1	06/17	0	0.2	07/17	よ	0.1	08/17	よ	0.1	09/17	よ	0.0
05/18	0	0.1	06/18	0	0.0	07/18	り	0.1	08/18	り	0.0	09/18	り	0.1
05/19	0	0.2	06/19	0	0.0	07/19	飛	0.0	08/19	飛	0.0	09/19	飛	0.0
05/20	0	0.1	06/20	0	0.0	07/20	来	0.0	08/20	来	0.0	09/20	来	0.0
05/21	0	0.1	06/21	0	0.0	07/21	予	0.0	08/21	予	0.0	09/21	予	0.0
05/22	0	0.1	06/22	0	0.2	07/22	測	0.0	08/22	測	0.1	09/22	測	0.0
05/23	0	0.0	06/23	0	0.0	07/23	が	0.0	08/23	が	0.0	09/23	が	0.0
05/24	0	0.0	06/24	0	0.0	07/24	で	0.1	08/24	で	0.0	09/24	で	0.0
05/25	0	0.0	06/25	1	0.1	07/25	き	0.1	08/25	き	0.2	09/25	き	0.1
05/26	0	0.1	06/26		0.1	07/26	て	0.1	08/26	て	0.2	09/26	て	0.0
05/27	0	0.0	06/27		0.2	07/27	お	0.0	08/27	お	0.2	09/27	お	0.0
05/28	0	0.1	06/28		0.1	07/28	り	0.0	08/28	り	0.2	09/28	り	0.1
05/29	0	0.0	06/29		0.0	07/29	ま	0.0	08/29	ま	0.1	09/29	ま	0.0
05/30	0	0.0	06/30		0.1	07/30	せ	0.0	08/30	せ	0.1	09/30	せ	0.0
05/31	0	0.0				07/31	ん	0.0	08/31		0.0	合計	1	9.7

※本年度は6月26日以降JPP-NETのシステム障害によりデータなし。

(注1) 平年値は、平成24~令和3年までの過去10年間の平均値

(注2) 数値の説明：0…飛来無し日 1…飛来有り日

(注3) 飛来予測日は、JPP-NET（（一社）日本植物防疫協会）が提供する、『ウンカ飛来予測システム』の数値を使用

(注4) トビイロウンカ、セジロウンカ及びコブノメイガは、埼玉県内で越冬できず、中国大陸からジェット気流に乗って飛来する。

（一社）日本植物防疫協会では、大陸での害虫の飛び立ち日と気流の状況から、日本国内各地点への飛来予測日を算出する情報を提供している。予測飛来日回数が多いほど、害虫の多発が予想される。



トビイロウンカ成虫



セジロウンカ成虫



コブノメイガ成虫

(カ) スクミリンゴガイの被害状況調査(6～7月)

- 1 調査年月日:被害状況調査は、田植後1～2か月後に調査(6～7月頃に調査する)
- 2 調査場所:発生日点での拡大状況を水田及び用水路で実施する/各担当地域
- 3 調査項目等:次表のとおり(調査日、品種、生息域面積、被害面積率、被害面積、被害状況)
- 4 具体的な調査方法

生息域面積:生息域面積は水田や用排水路の貝や卵塊の目視
 被害面積率:欠株率1%以上のほ場割合
 卵塊数:用・排水路又は畦畔10m当たりの平均卵塊数
 被害状況:欠株の目視



調査年月日	主な調査地点	品種名	作型	移植時期	生息域面積 (ha)	被害面積率 (%)	被害面積 (ha)	卵塊数 (塊/10m)	被害状況 (被害田の欠株率)		備考	
									平均 (%)	最大 (%)		
令和4年	6月16日	加須市琴寄	コシヒカリ	早期	4月下旬	60	1	0.6	7.7	0	1	分けつ期以降に貝が侵入したため、無防除水田でもほぼ被害なし。
4年	6月16日	加須市外記新田	コシヒカリ	早期	4月下旬	13	1	0.1	5.4	0	1	分けつ期以降に貝が侵入したため、無防除水田でもほぼ被害なし。
4年	6月22日	幸手市千塚	コシヒカリ	早期	5月上旬	5	10	0.5	8.7	3	10	昨年最大卵塊数(62塊/10m)を計数した畦畔が、本年は24塊/10mと大幅に減少。
4年	6月29日	さいたま市西区宝来	不明	早植	5月上旬	9	1	0.1	5.3	0	1	昨年は道路、畦畔沿いで貝を人力採取・処分していたが、本年は水田にほとんど貝が見られず、処分の痕跡も非常に少ない。
4年	6月29日	さいたま市桜区	不明	早植～普通	5月中旬～6月中	10	15	1.6	5.4	3	10	移植期が5月中旬から6月中旬まで混在しており、移植が遅いほ場で欠株が目立つ。
4年	6月30日	富士見市南畑新田	不明	早植～普通	5月中旬～6月中	77	1	0.8	2.6	1	2	排水路に貝が生息しているが、水田には少なく、欠株等の被害も少ない。排水路等の貝や卵塊も昨年より減少。
4年	6月30日	さいたま市西区塚本町	不明	普通	6月上旬	22	1	0.2	10.0	1	2	排水路に貝が生息しているが、水田には少なく、欠株等の被害も少ない。排水路等の貝や卵塊は昨年より増加。
4年	7月21日	吉見町久保田新田	不明	普通	5月下旬	35	2	0.7	11.0	1	2	貝の多い水田は休耕のため、被害水田は昨年より少ない。一部に卵塊が多い排水路(最大31塊/10m)がある。
4年	7月14日	鴻巣市大芦	不明	普通	6月中旬	8	2	0.2	3.0	1	2	移植の遅い水田の一部で若干欠株が見られるが、被害水田は昨年より少ない。
4年	7月29日	熊谷市下奈良	不明	普通	6月下旬	39	5	2.0	24.9	2	8	欠株率8%程度の水田が30a程度まとまって存在するが、被害水田は昨年より減少。排水路の卵塊は昨年より増加。
4年	7月29日	熊谷市西城	不明	普通	6月下旬	23	30	6.8	215.5	5	50	昨年被害が多かったほ場は休耕だったが、隣接の無防除水田が壊滅的な被害となった。欠株率高いほ場では、パイプラインのマスに卵塊が500塊以上付着。
4年	7月29日	熊谷市善ヶ島	不明	普通	6月下旬	90	5	4.5	48.7	3	15	排水処理施設と生活排水路が水田に近接しており、通年で増殖している。
4年	7月29日	熊谷市八ツ口	不明	普通	6月下旬	73	5	3.7	36.2	2	8	善ヶ島の備前渠用水対岸。排水路の卵塊、被害水田とも昨年より減少しているが、最大卵塊数は124塊/10mと多い。
4年	8月2日	熊谷市弥藤吾	不明	普通	6月下旬	7	5	0.4	59.0	2	5	昨年から発生し始めたため、防除が浸透していない。
合計(面積)／平均(卵塊数)						473		22.1	31.7			
昨年(令和3年度)						444		45.1	22.7			

(キ) 水稻観察地点調査(6~9月)

a 20回振りすくい取り(頭)

			ヒメトビウンカ				セジロウンカ				ツマグロヨコバイ			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和4年	幼虫	0.0	8.1	152.4	62.5	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0	1.6	328.8	330.5
		成虫	7.5	27.3	68.1	27.0	0.0	0.3	1.6	0.0	8.2	17.1	120.0	87.0
	平年値	幼虫	3.7	6.5	57.4	101.0	0.0	0.0	0.4	1.0	0.1	1.9	128.6	310.0
		成虫	5.7	30.6	78.0	124.5	0.0	0.1	4.9	2.5	2.6	7.9	58.9	121.0
5/20以降の 移植ほ場	令和4年	幼虫	0.0	3.2	131.0	147.0	0.0	0.0	3.3	6.0	1.5	0.0	0.5	11.0
		成虫	0.0	30.2	147.2	99.3	0.0	0.4	3.8	5.8	0.0	0.0	0.3	8.3
	平年値	幼虫	0.1	4.5	140.2	179.6	0.0	0.0	6.6	11.9	0.0	0.2	5.5	31.5
		成虫	1.4	11.8	117.2	82.5	0.0	0.2	7.2	7.7	0.0	0.7	1.9	38.4

			斑点米カメムシ類 (アカヒゲホリミドリカメムシ)				斑点米カメムシ類 (クモヘリカメムシ)				斑点米カメムシ類 (その他)			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和4年	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	平年値	1.6	0.3	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.4	0.5	
5/20以降の 移植ほ場	令和4年	0.0	1.8	7.2	0.3	0.0	0.0	0.7	3.2	0.0	0.0	1.3	1.8	
	平年値	2.3	0.9	0.9	0.2	0.0	0.1	0.1	0.8	0.0	0.1	0.2	0.2	

			イネツトムシ				イネアオムシ			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和4年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
5/20以降の 移植ほ場	令和4年	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	

- ・空欄は移植直後及び収穫後等により調査不能のためデータ無し
- ・平年値：平成28~令和3年の6年間の平均値
- ・令和4年度調査地点

【5/20までの移植ほ場】

川越市小中居、川島町西谷、吉見町西吉見、熊谷市中曾根、春日部市樋籠、幸手市神扇、吉川市中井

【5/20以降の移植ほ場】

坂戸市横沼、毛呂山町箕和田、嵐山町廣野、本庄市児玉町吉田林、美里町関、加須市大越

b 病虫害発生調査結果

		葉いもち				穂いもち (%)				紋枯病			
		(発病度)				(被害粒率)				(発病度)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和4年	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.8	17.0
	平年値	0.0	1.0	1.0	2.8	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.5	3.6	20.7
5/20以降の 移植ほ場	令和4年	0.0	0.1	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	12.0
	平年値	0.0	0.4	3.4	3.2	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.6	2.1	13.2

		もみ枯細菌病 (%)				ごま葉枯病				ばか苗病 (%)			
		(発病粒率)				(発病度)				(発病株率)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和4年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和4年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

		縞葉枯病 (%)				心枯線虫病 (%)			
		(発病株率)				(発病株率)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和4年	0.0	0.3	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	2.4	6.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和4年	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.8	1.1	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0

		ニカメイガ (%)				イネツトムシ (個)				フタオビコヤガ* (頭)			
		(発病株率)				(苞数/25株あたり)				(虫数/1株あたり)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和4年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和4年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2

*別名：イネアオムシ

		コブノメイガ (%)				イネミズゾウムシ (頭)			
		(被害葉率)				(虫数/25株あたり)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和4年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和4年	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.3	1.9	0.2	0.0	0.0	0.0

- ・空欄は移植直後及び収穫後等により調査不能のためデータ無し
- ・平年値：平成28～令和3年の6年間の平均値
- ・発病度は「H28 発生予察事業の調査実施基準（農林水産省）」に基づき、算出した。

(ク) イネツトムシ発育予測 (7月)

(有効積算温度シミュレーション計算値：6月1日～)

a 7月4日現在の予測

表1 イネツトムシ第2世代の産卵最盛日～4齢終了までの予測

項目	令和4年予測	令和3年	平年	平年との差
産卵最盛日	7月18日	7月21日	7月21日	平年より3日早い
孵化最盛日	7月22日	7月25日	7月25日	平年より3日早い
3齢脱皮最盛日	7月31日	8月3日	8月3日	平年より3日早い
4齢脱皮最盛日	8月3日	8月6日	8月6日	平年より3日早い

注)：例年多発ほ場では予測値と一致し、少発生ほ場では発生時期が早い

算出方法：令和4年7月4日までの実測気象データ。その後は平年値を入力。

産卵最盛日は(6月1日～有効積算温度539日度の日)。孵化最盛日は(同594日度)

3齢脱皮最盛日は(同722日度)。4齢脱皮最盛日は(772日度) 発育零点は13.4℃。

b 実測気象データによる予測結果

表2 イネツトムシ第2世代の産卵最盛日～4齢終了までの予測結果

項目	令和4年予測	令和3年	平年	平年との差
産卵最盛日	7月18日	7月21日	7月21日	平年より3日早い
孵化最盛日	7月22日	7月25日	7月25日	平年より3日早い
3齢脱皮最盛日	7月30日	8月3日	8月3日	平年より4日早い
4齢脱皮最盛日	8月2日	8月6日	8月6日	平年より4日早い

* 薬剤防除を必要とする目安(孵化最盛日より4～7日の間に密度調査を行う)

孵化直後の幼虫が存在しない場合(既に2～3齢以上に成長)

0.3個体/株 [100株調査で30個体]: 発生数が確定したと推定。

孵化直後の幼虫が存在する場合(1～2齢が中心)

0.05個体/株 [100株調査で5個体]: 今後増加が懸念される。

注) 0.3個体/株の発生によって、5%以下の減収とみなされる。

参考：神奈川県以南、千葉県海岸線で越冬しているが、神奈川県のピークが5月下旬として、埼玉県への飛来は6/1としている。

(ケ) フタオビコヤガ(イネアオムシ)発育予測 (7月)

「有効積算温度シミュレーション計算値：フェロモン調査の越冬世代成虫の50%誘殺日(5月12日)の翌日から」

a 7月4日現在の予測

表1 フタオビコヤガの発育次世代予測

項目	令和4年予測	令和3年	平年	平年との差
基準日(越冬世代成虫50%誘殺数)	5月12日	5月18日	-	(基準日は平年値は無し)
第1世代成虫発蛾最盛日	6月17日	6月17日	6月19日	平年より2日早い
第2世代成虫発蛾最盛日	7月6日	7月13日	7月13日	平年より7日早い
第3世代成虫発蛾最盛日	7月27日	8月1日	8月3日	平年より7日早い

注)：発育零点は10.2℃

算出方法：令和4年7月4日までの気象データ。その後は平年値を入力。

第1世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度341日度の日)。

第2世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度682日度の日)。

第3世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度1023日度の日)。

b 実測気象データによる予測結果

表2 フタオビコヤガの発育次世代予測結果

項目	令和4年予測	令和3年	平年	平年との差
基準日(越冬世代成虫50%誘殺数)	5月12日	5月18日	-	(基準日は平年値は無し)
第1世代成虫発蛾最盛日	6月17日	6月17日	6月19日	平年より2日早い
第2世代成虫発蛾最盛日	7月6日	7月13日	7月13日	平年より7日早い
第3世代成虫発蛾最盛日	7月27日	8月1日	8月3日	平年より7日早い

注)：発育零点は10.2℃

* 薬剤防除を必要とする目安(最盛日の2～7日後)

(コ) いもち病発生状況調査結果 (7月)

- 1 調査時期：7月中旬（基準日7月15日）
- 2 調査場所：定点および常発地
- 3 調査項目等：表のとおり
- 4 調査方法：任意の100株について調査

【参考】 発病度について
 1～20：少発生、21～40：中発生
 41～70：多発生、71以上：甚発生



いもち病(葉いもち)
 左:慢性型病斑
 右:急性型病斑

調査年月日 (令和)	調査地点	定点又は 常発地別	品種名	移植期	草丈 (cm)	発病 株率 (%)	発病度	病斑の種類		発病 部位	備 考	
								慢性型	進行型			
4年	7月14日	鴻巣市関新田	過去発生地点	不明	5月下旬	73	0	0.0	—	—	—	
〃	7月14日	蓮田市駒崎	過去発生地点	不明	6月中旬	25.2	0	0.0	—	—	—	
〃	7月19日	川越市小中居	定点	コシヒカリ	5月中旬	90.6	0	0.0	—	—	—	
〃	7月19日	坂戸市横沼	定点	彩のかがやき	5月下旬	76.6	0	0.0	—	—	—	
〃	7月19日	毛呂山町箕和田	定点	コシヒカリ	5月下旬	82.9	1	0.3	1	0	葉	
〃	7月19日	嵐山町廣野	定点	彩のきずな	6月上旬	63	0	0.0	—	—	—	
〃	7月14日	川島町曲師	定点	コシヒカリ	5月下旬	84	2	0.5	0	2	葉	
〃	7月14日	吉見町西吉見	定点	コシヒカリ	5月下旬	82	0	0.0	—	—	—	
〃	7月12日	秩父市太田	常発地	キヌヒカリ	6月上旬	72	8	2.0	6	2	葉	畦畔のメヒシバ発病
〃	7月12日	秩父市小柱	常発地	キヌヒカリ	6月上旬	72	7	1.8	0	7	葉	
〃	7月12日	小鹿野町下小鹿野	常発地	不明	6月中旬	68	1	0.3	0	1	葉	
〃	7月12日	皆野町三沢	常発地	キヌヒカリ	6月上旬	74	100	50.0	0	100	葉	周辺圃場、周辺イネ科雑草にも多発
〃	7月14日	本庄市吉田林	定点	キヌヒカリ	6月中旬	31	0	0.0	—	—	—	
〃	7月19日	美里町関	定点	コシヒカリ	5月下旬	73	1	0.3	1	0	葉	
〃	7月13日	熊谷市中曾根	定点	コシヒカリ	5月上旬	87	0	0.0	—	—	—	
〃	7月14日	行田市前谷	旧定点	彩のかがやき	6月下旬	27	0	0.0	—	—	—	
〃	7月13日	加須市麦倉	定点	コシヒカリ	4月下旬	97	0	0.0	—	—	—	
〃	7月13日	加須市大越 1	定点	ほしじるし	6月中旬	46	0	0.0	—	—	—	
〃	7月13日	加須市大越 2	過去発生地点	不明	6月中旬	51	0	0.0	—	—	—	
〃	7月14日	春日部市樋籠	定点	コシヒカリ	5月上旬	93.8	0	0.0	—	—	—	
〃	7月14日	吉川市中井	定点	彩のきずな	5月中旬	67.4	0	0.0	—	—	—	
〃	7月14日	幸手市神扇	定点	コシヒカリ	5月中旬	88	1	0.3	1	0	葉	
調査地点数：22	発病地点数：8	発病地点率：36.4%			平均	5.5	2.5	1.1	14.0			

いもち病発生状況調査 過去の調査結果

調査年月日 (平成)	調査地点数	発病地点数	発病地点率 (%)	平均発病株 率 (%)	平均発病度	病斑の種類		備 考(注意報発表の有無など)
						慢性型	進行型	
24年	7月中下旬	28	6	21.4	0.5	6.0	0.0	
25年	7月中下旬	28	1	3.6	0.1	1.0	0.0	6月末の感染好適日は平年の2倍だったが、定点の調査結果を優先した。
26年	7月中下旬	32	4	12.5	1.3	0.6	0.7	6月1日～7月25日の感染好適日は平年の1.4倍。平坦地でも発生を確認した。
27年	7月中下旬	31	23	74.2	17.7	16.0	1.6	7月9日 注意報発表(葉いもち、穂いもち)
28年	7月中下旬	36	22	61.1	14.8	6.1	2.8	7月27日 注意報発表(葉いもち、穂いもち)
29年	7月中下旬	51	12	23.5	3.6	1.5	0.0	
30年	7月中下旬	22	5	22.7	22.7	1.0	0.0	
令和元年	7月中下旬	23	13	56.5	2.0	2.0	0.3	発生地点率は高かったが、発生程度や発生株率が低かったため、予察情報の発表はしなかった。
令和2年	7月中下旬	23	14	60.9	4.1	1.0	2.3	7月28日 注意報発表(葉いもち、穂いもち)
令和3年	7月中下旬	22	13	59.1	12.7	4.6	8.6	7月7日 注意報発表(葉いもち)
過去10年間平均	29.6	11.3	39.6	8.0	2.7	5.7	1.6	

(サ) 水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果(7月)



主な斑点米カメムシ類(表中出現順)

- 1 調査年月日:7月中旬頃を基準日として調査した。
- 2 調査場所:これまで実施してきた調査地点(畦畔・雑草地・土手等)/各担当地域。
- 3 調査項目等:斑点米カメムシ類の幼虫・成虫別に計数調査した。
次表のとおり。(調査地点、調査日、カメムシ類別、調査場所の状況(雑草の種類、草丈などの管理状況等について分かる範囲で記載する。))
- 4 具体的な調査方法:捕虫網による10往復・20回振り調査。

調査年月日	調査地点/種類	アカヒゲホソミドリカスミカメ		アサスジカスミカメ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ		トゲシラホシカメムシ		その他		合計 頭	参考 前年 (R3年)	備考 (雑草などの管理状況等)	
		幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫				
令和																			
4年	7月19日	川越小中居	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	6	畦畔
4年	7月19日	坂戸横沼	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	3	畦畔
4年	7月19日	毛呂山箕和田	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	5	4	畦畔
4年	7月19日	嵐山町杉山	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	畦畔
4年	7月14日	川島町曲師	0	5	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	8	15	畦畔、その他(マルシラホシカメムシ1)
4年	7月21日	吉見町久保田	1	13	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	18	6	畦畔、その他(ヒゲナガカメムシ1)
4年	7月14日	吉見町西吉見	10	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27	8	畦畔
4年	7月19日	本庄市吉田林	3	68	0	25	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	97	6	畦畔、メヒシバ(20cm)
4年	7月19日	美里町関1	1	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	3	畦畔、メヒシバ(20~25cm)主体
4年	7月19日	美里町関2	0	12	0	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	20	44	農道脇、メヒシバ(10cm)とクローバー主体
4年	7月13日	熊谷市中曾根	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	1	畦畔、その他(ブチヒゲカメムシ2)	
4年	7月14日	行田市前谷	26	44	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	74	8	畦畔、オヒシバ(60cm)
4年	7月13日	加須市妻倉	0	3	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	9	7	畦畔、メヒシバ(45cm)主体、イヌムギ、エノコログサ
4年	7月13日	加須市大越	2	31	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34	10	畦畔、オヒシバ(42cm)
4年	7月14日	幸手市神扇	43	4	25	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	75	—	農道脇水路法面、イタリアンライグラスとエノコログサ(60~70cm)主体
4年	7月14日	春日部市種籠	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	水路、ヨシ(約2m)主体
4年	7月14日	吉川市中井	6	20	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	7	畦畔、メヒシバ(20~30cm)主体
	合計	調査地点数:17	107	240	30	41	0	0	1	13	0	1	1	1	2	2	439	154	発生地点率 15/17地点 88.2%
	平均	1地点あたり頭数	6.3	14.1	1.8	2.4	0.0	0.0	0.1	0.8	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	25.8	9.1	

過去のデータ

調査年月日	調査地点/種類	アカヒゲホソミドリカスミカメ		アサスジカスミカメ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ		トゲシラホシカメムシ		その他		合計 頭	発生地 点率 %	備考 (調査地点のうち斑点米カメムシの発生地点数)	
		幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫				
24年	7月上中旬	21調査地点	120	179	25	147	0	2	2	13	0	0	0	1	0	0	489	95.2%	発生地点 20/21地点
		1地点あたり平均	5.7	8.5	1.2	7.0	0.0	0.1	0.1	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.3		多発が懸念されるため、基準日を0701に繰り上げた調査
25年	7月上中旬	20調査地点	310	507	38	238	0	0	2	43	1	1	0	0	0	8	1,148	95.0%	発生地点 19/20地点
		1地点あたり平均	15.5	25.4	1.9	11.9	0.0	0.0	0.1	2.2	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.4	57.4		平成25年7月19日に、平成25年度病害虫発生予察注意報第3号「イネの斑点米カメムシ類」を公表
26年	7月上中旬	18調査地点	304	343	107	37	0	0	2	13	1	2	0	1	1	9	820	94.4%	発生地点 17/18地点
		1地点あたり平均	16.9	19.1	5.9	2.1	0.0	0.0	0.1	0.7	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	0.5	45.6		平成26年6月30日に、平成26年度病害虫発生予察注意報第4号「斑点米カメムシ類」を公表
27年	7月上中旬	18調査地点	43	135	3	12	0	0	0	11	10	2	0	0	0	9	225	77.8%	発生地点 14/18地点
		1地点あたり平均	2.4	7.5	0.2	0.7	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.1	0.0	0.0	0.0	0.5	12.5		-
28年	7月上中旬	15調査地点	8	32	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	44	73.3%	発生地点 11/15地点
		1地点あたり平均	0.5	2.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9		-
29年	7月上中旬	22調査地点	17	64	0	0	0	0	2	6	0	0	0	1	9	1	100	77.2%	発生地点 17/22地点
		1地点あたり平均	0.8	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	4.5		平成29年7月3日に、平成29年度病害虫発生予察注意報第1号「斑点米カメムシ類(特に、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アサスジカスミカメ)」を公表
30年	7月上中旬	17調査地点	31	97	1	12	0	1	0	4	0	0	0	2	0	0	148	58.8%	発生地点 10/17地点
		1地点あたり平均	1.8	5.7	0.1	0.7	0.0	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	8.7		-
元年	7月上中旬 (令和)	17調査地点	200	210	0	1	1	1	0	19	10	1	3	0	0	0	445	82.4%	発生地点 14/17地点
		1地点あたり平均	11.8	12.4	0.0	0.1	0.1	0.0	1.1	0.6	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	26.2		-
2年	7月上中旬 (令和)	17調査地点	52	94	9	14	0	11	1	13	0	1	0	1	0	14	210	100.0%	発生地点 17/17地点
		1地点あたり平均	3.1	5.5	0.5	0.8	0.0	0.6	0.1	0.8	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.8	12.4		-
3年	7月上中旬 (令和)	17調査地点	21	87	0	12	0	2	3	27	0	1	0	1	0	0	154	100.0%	発生地点 17/17地点
		1地点あたり平均	1.2	5.1	0.0	0.7	0.0	0.1	0.2	1.6	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	9.1		-
平年		1地点あたり平均	6.0	9.4	1.0	2.4	0.0	0.1	0.2	0.8	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.2	20.2	85.4%	

(シ) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果 (2月)

病害虫調査データ

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果

令和5年2月3日
埼玉県病害虫防除所

病害虫防除所では、イネ縞葉枯病の発生量を予測するため、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査しています。

今年度の調査結果は、保毒虫率が過去10年で最も低くなっています。ただし、5月下旬以降の移植が主体の地域の保毒虫率は昨年よりやや高かったほか、コシヒカリ、キヌヒカリ等のイネ縞葉枯病感受性品種作付ほ場の周辺では保毒虫率が少し高い傾向が見られました。イネ縞葉枯病は移植後から幼穂形成期までに感染します。育苗箱施薬剤等を用いた感染前の早めの予防対策を実施してください。

1 調査方法

令和4年11月に、県内25か所の水田周辺でヒメトビウンカ幼虫(写真1)をサンプリング(100頭程度/1か所)し、ELISA法(図1)により保毒虫を判定し、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を算出した。



写真1 ヒメトビウンカ幼虫
(体長2mm)

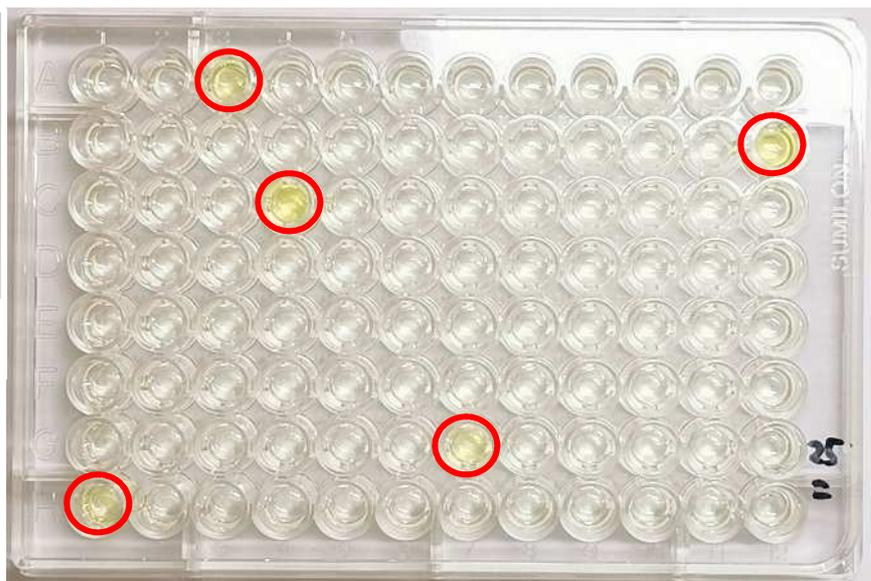


図1 ELISA法による保毒虫判定
ウイルス有り：黄色(○内)、ウイルス無し：無色

2 調査結果の概要

令和4年度のヒメトビウンカ幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、平均で2.7%と過去10年で最も低くなった(図2)。ただし、保毒虫率0.0%の調査地点は2か所と昨年(4か所)より減少しており、特に5月下旬以降の移植が主体の地域では全調査地点で保毒虫率が1.0%以上となった(表1)。

昨年は移植期による保毒虫率の差が見られたが、本年は5月中旬までの移植が主体の地域の平均保毒虫率が2.8%(昨年5.5%)、5月下旬以降の移植が主体の地域が2.6%(昨年1.8%)で有意差はなく(表1)、5月下旬以降の移植が主体の地域の平均保毒虫率は昨年よりやや高くなった。

さらに、「コシヒカリ」「キヌヒカリ」等のイネ縞葉枯病感受性品種では「彩のかがやき」「彩のきずな」等のイネ縞葉枯病抵抗性品種に比べ保毒虫率が若干高い傾向が見られ、平年値(5.8%)を超える調査地点が3か所存在した。

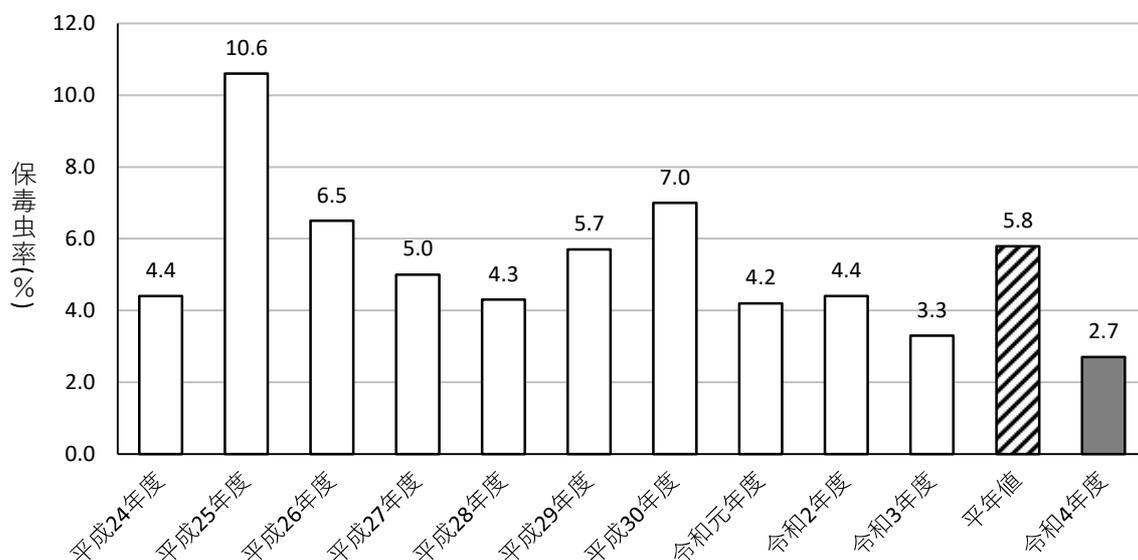


図2 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移

表1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率(令和4年度)

5月中旬までの移植地域		5月下旬以降の移植地域	
採集地点	保毒虫率(%)	採集地点	保毒虫率(%)
さいたま市桜区昭和	8.3	坂戸市紺屋	1.0
鴻巣市屈巢	1.0	小川町下横田	2.1
富士見市南畑	1.0	川島町平沼	4.2
川越市古谷本郷	4.2	吉見町久保田	4.2
熊谷市中曾根	6.3	滑川町山田	2.1
加須市大越	0.0	秩父市小柱	1.0
加須市柏戸	2.1	本庄市児玉町吉田林	4.2
春日部市樋籠	0.0	美里町関	1.0
幸手市平野	2.1	上里町長浜	3.1
白岡市野牛	3.1	熊谷市小泉	3.1
		熊谷市樋春	1.0
		行田市前谷	1.0
		行田市下池守	2.1
		加須市下谷	2.1
		久喜市菖蒲町台	6.3
地域平均(10地点)	2.8	地域平均(15地点)	2.6
採集地点数	25	平均保毒虫率(%)	2.7

(ス) 農業技術研究センター 県予察ほ場（玉井試験場）調査結果（6～9月）

a ほ場内見取り調査（%）

(a) 5月中旬移植「コシヒカリ」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2022年	2021年	平年	2022年	2021年	平年	2022年	2021年	平年	2022年	2021年	平年
葉いもち	発病株率%	0.0	0.3	0.0	1.0	2.0	3.6	0.7	0.0	0.1	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	6.3	1.9	14.4	40.0	-
紋枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.7	0.0	5.4	15.7	18.6	24.6
ばか苗病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	1.7	0.7	1.4	7.0	20.0	26.1	22.3	49.0	61.5	22.3	49.0	64.0
コマメチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネアオムシ	食害株率%	0.7	3.0	2.3	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-
イネヒメコバエ	食害株率%	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズウムシ	食害株率%	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネトヨムシ	食害株率%	0.0	0.0	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(b) 5月中旬移植「彩のかがやき」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2022年	2021年	平年	2022年	2021年	平年	2022年	2021年	平年	2022年	2021年	平年
葉いもち	発病株率%	0.7	0.0	0.0	1.3	1.0	1.0	0.3	0.0	0.3	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	18.8	53.3	11.6
紋枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	9.0	7.7	11.3	23.3	14.7	26.0	75.3	23.7	34.2
ばか苗病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.3	0.0	0.0	0.4
コマメチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネアオムシ	食害株率%	0.3	6.0	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	-	0.1	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
イネヒメコバエ	食害株率%	1.7	0.0	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズウムシ	食害株率%	0.0	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネトヨムシ	食害株率%	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサキリ類	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	-	0.0	0.0	0.0	0.1

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(c) 6月下旬移植「キヌヒカリ」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2022年	2021年	平年	2022年	2021年	平年	2022年	2021年	平年	2022年	2021年	平年
葉いもち	発病株率%	-	-	-	0.0	6.3	4.9	3.7	17.7	8.1	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	47.8	60.0	24.9
紋枯病	発病株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	1.9	34.7	10.7	31.1
ばか苗病	発病株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	-	-	-	2.3	0.3	1.7	7.3	3.0	23.6	20.3	13.0	28.3
コマメチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	0.3	0.7	0.4	29.3	5.0	5.2	0.0	0.0	0.1
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.2	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	1.6	0.0	0.0	2.0
イネヒメコバエ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズウムシ	食害株率%	-	-	-	0.0	0.0	5.4	-	-	-	-	-	-
イネトヨムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサキリ類	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	-	0.0	0.0	0.0	0.1

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

b すくい取り調査(20回振)でのウンカ・ヨコバイ類等の捕獲数

(a) 5月中旬移植「コンヒカリ」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	25.7	0.0	25.7	35.0	10.3	3.3	13.7	77.3	69.3	168.0	237.3	510.0	170.7	296.0	466.7	443.0
ツマグロヨコバイ	0.3	0.0	0.3	2.7	1.7	1.0	2.7	10.3	10.7	69.3	80.0	176.6	194.7	1,624.0	1,818.7	519.4
セジロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	0.0	5.6	0.0	0.0	0.0	11.8
トビロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
アカヒゲホソミドリカスミカメ			4.3	3.8			0.3	0.2			0.0	0.1			0.0	0.0

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(b) 5月中旬移植「彩のかがやき」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	43.0	0.0	43.0	44.7	13.7	11.0	24.7	77.7	38.3	23.0	61.3	513.9	133.3	200.0	333.3	480.7
ツマグロヨコバイ	0.7	0.0	0.7	1.4	1.0	1.0	2.0	2.8	9.0	11.0	71.3	12.7	64.0	877.3	941.3	192.0
セジロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	4.0	1.3	0.0	3.0	3.0	5.7	0.0	0.0	0.0	14.8
トビロウンカ			0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
アカヒゲホソミドリカスミカメ			5.3	3.9			0.0	0.2			0.0	0.5			0.0	0.2

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(c) 6月下旬移植「キヌヒカリ」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	-	-	-	-	10.0	5.0	14.7	23.5	36.3	16.7	53.0	364.9	306.7	664.0	970.7	583.7
ツマグロヨコバイ	-	-	-	-	1.7	1.0	2.7	4.3	11.3	8.0	19.3	81.0	157.3	3,053.3	3,210.7	2,541.0
セジロウンカ	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.5	3.3	4.3	7.7	21.3	2.7	8.0	10.7	85.2
トビロウンカ	-	-	-	-			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3
アカヒゲホソミドリカスミカメ	-	-	-	-			1.0	2.2			0.3	0.9			0.0	0.3

-は未調査

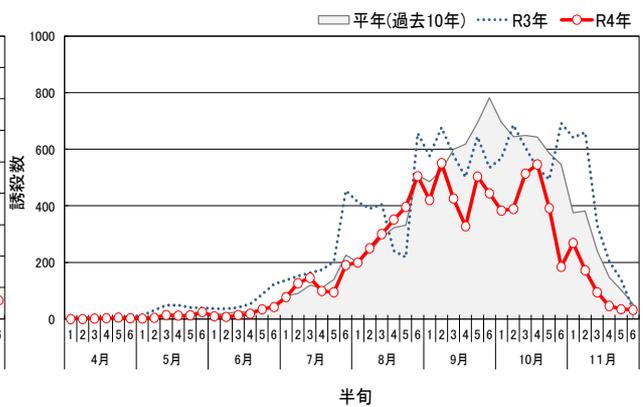
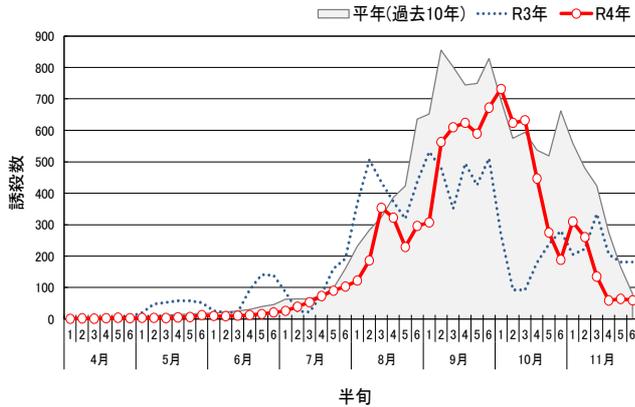
平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

イ 野菜等

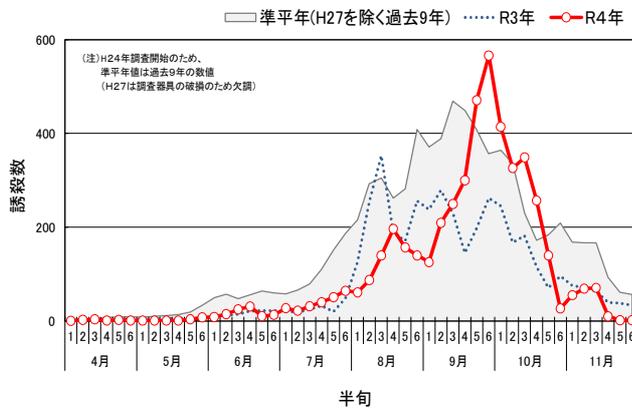
(ア) ハスモンヨトウのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物:大豆(7月以降) 調査地点:熊谷市榎春

対象作物:ブロッコリー 調査地点:深谷市山河



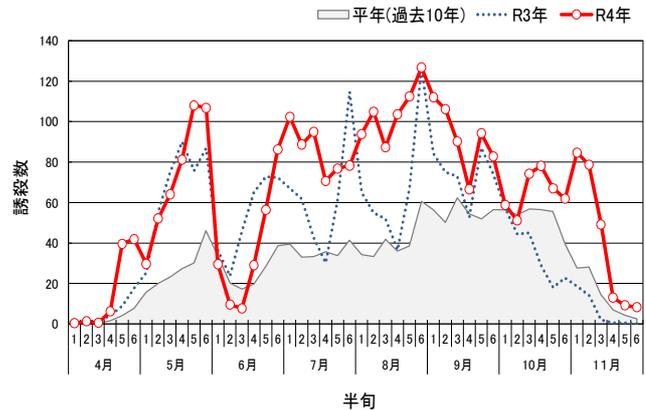
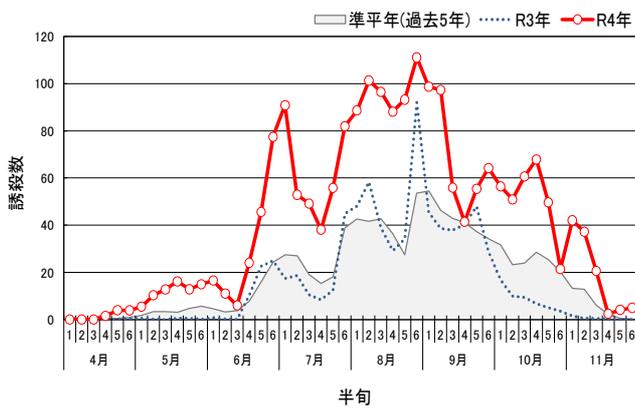
対象作物:いちご、ハウス花き 調査地点:久喜市菖蒲町小林



(イ) オオタバコガのフェロモントラップ調査 (4～11月)

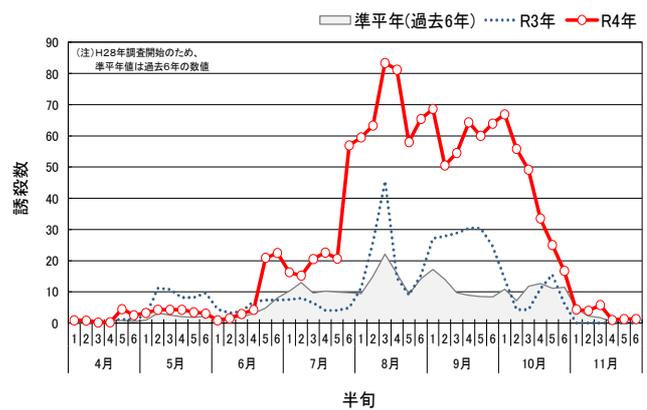
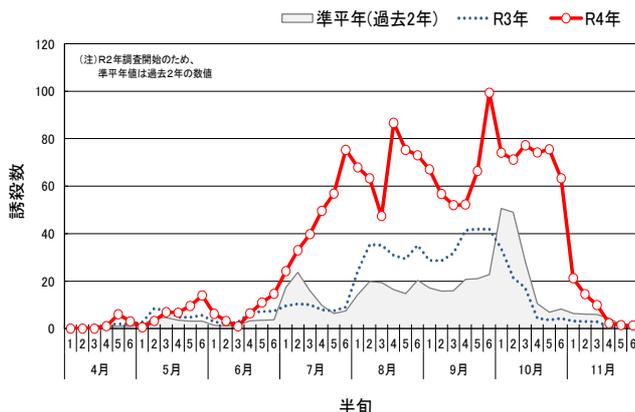
対象作物:露地なす 調査地点:本庄市小平

対象作物:露地野菜 調査地点:深谷市山河



対象作物:露地なす 調査地点:越谷市中島

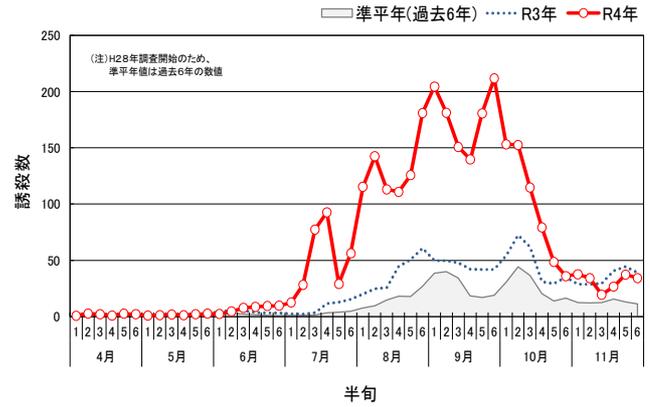
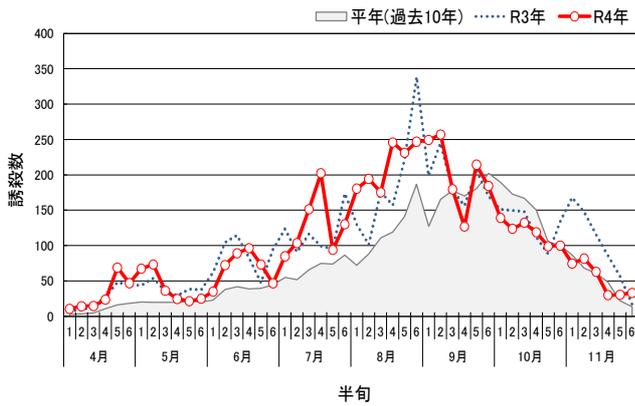
対象作物:露地なす 調査地点:杉戸町大塚



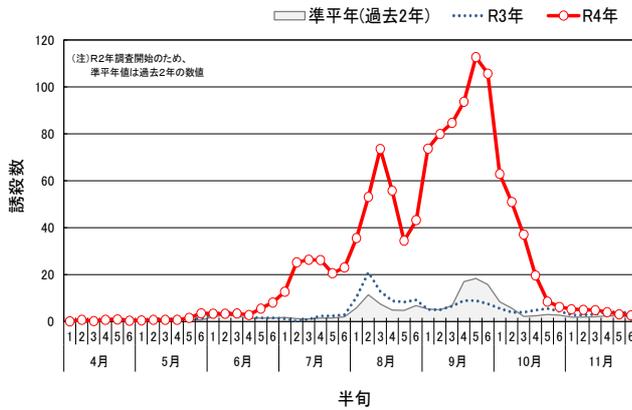
(ウ) シロイチモジヨトウのフェロモントラップ調査 (4~11月)

対象作物:ねぎ 調査地点:深谷市新戒

対象作物:ねぎ 調査地点:越谷市中島



対象作物:ねぎ 調査地点:杉戸町大塚

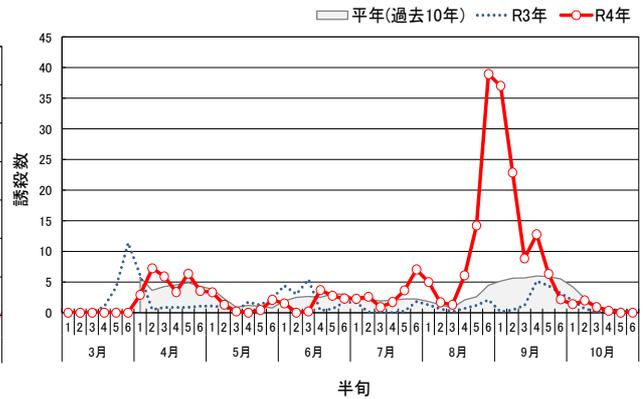
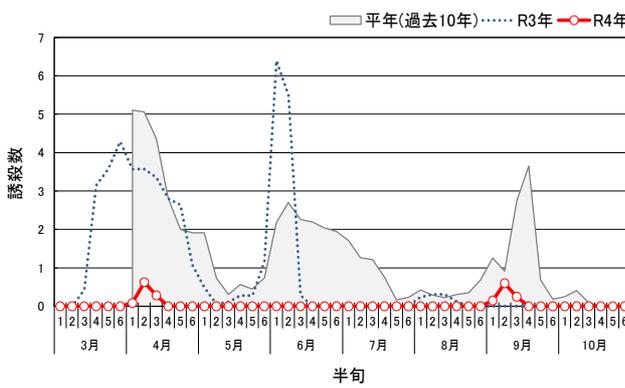


ウ 果樹

(ア) ナシヒメシンクイのフェロモントラップ調査 (3~10月)

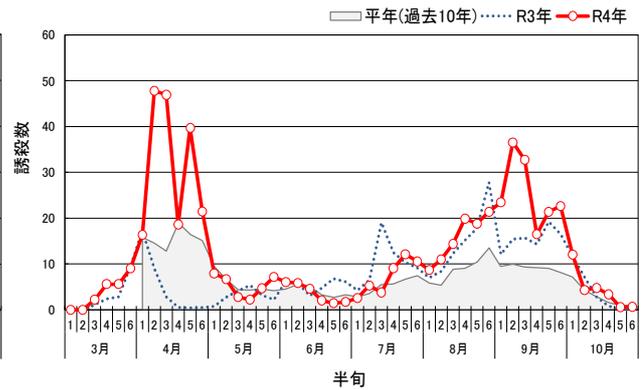
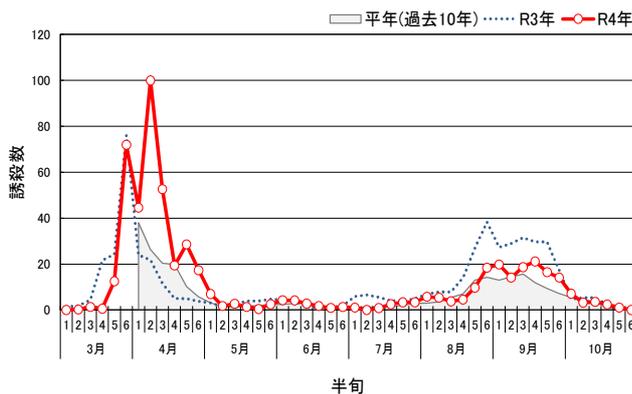
対象作物:なし 調査地点:鴻巣市常光

対象作物:なし 調査地点:上里町長浜

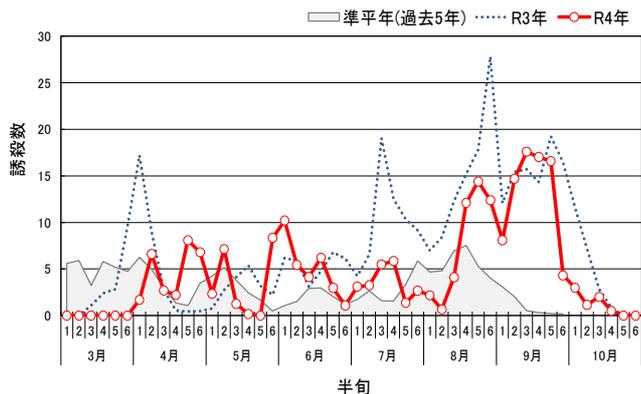


対象作物:なし 調査地点:加須市鴻基

対象作物:なし 調査地点:春日部市内牧



対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



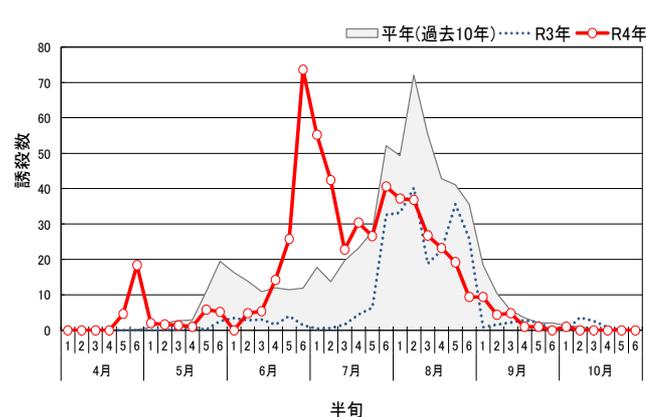
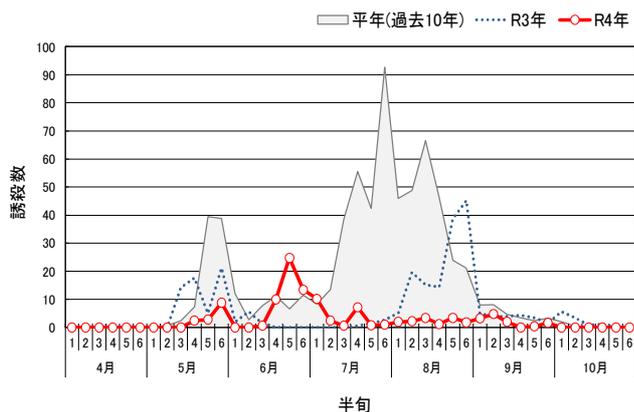
(イ) 果樹カメムシの予察灯調査 (4~10月)

a 主要な果樹カメムシ (4種*合計)

※チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ、アオクサカメムシ

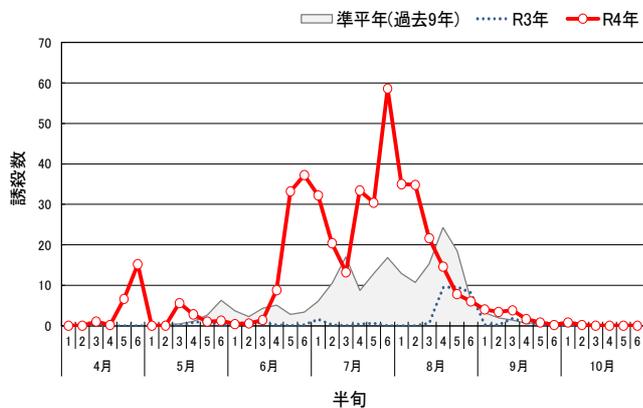
対象作物:なし 調査地点:上里町長浜

対象作物:なし 調査地点:春日部市内牧



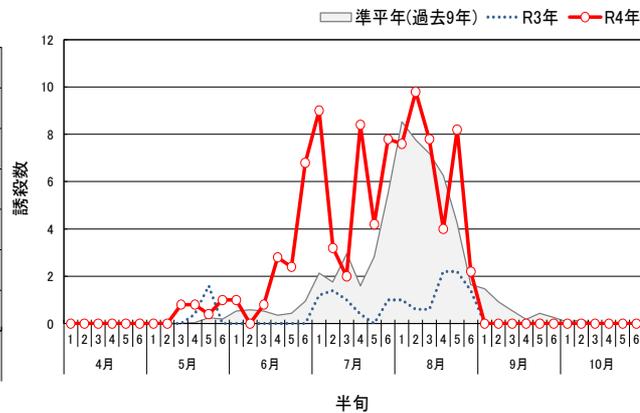
b チャバネアオカメムシ

対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



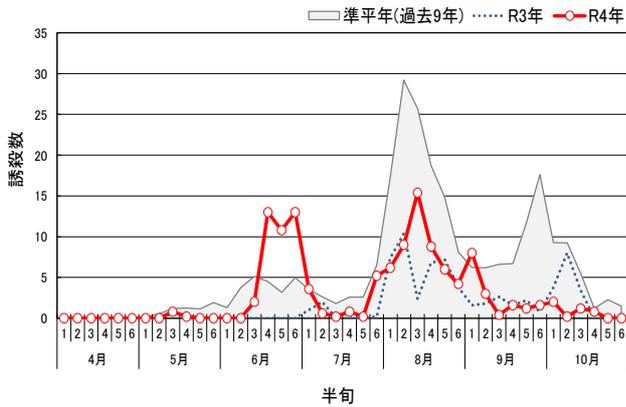
c クサギカメムシ

対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



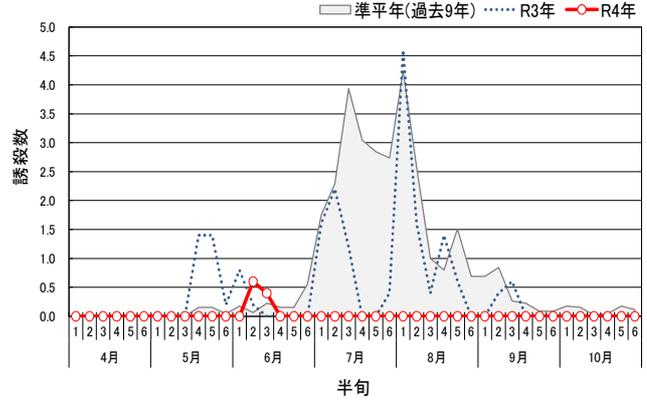
d ツヤアオカメムシ

対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



e アオクサカメムシ

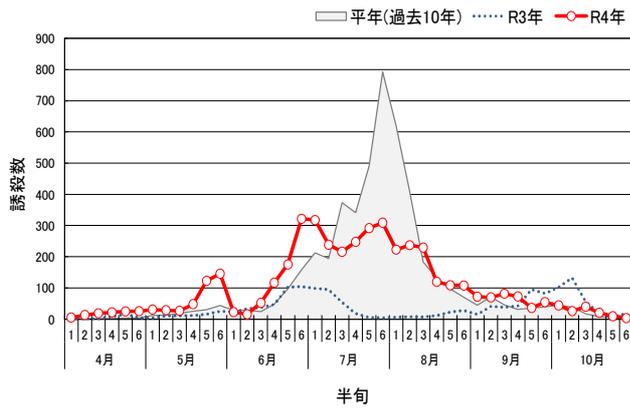
対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



(ウ) 果樹カメムシのフェロモントラップ調査 (4~10月)

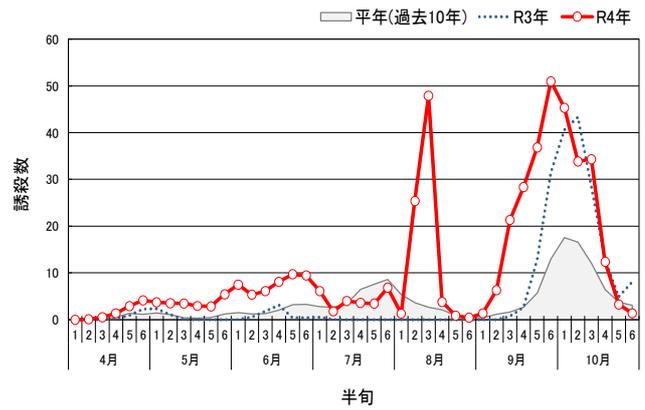
a チャバネアオカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



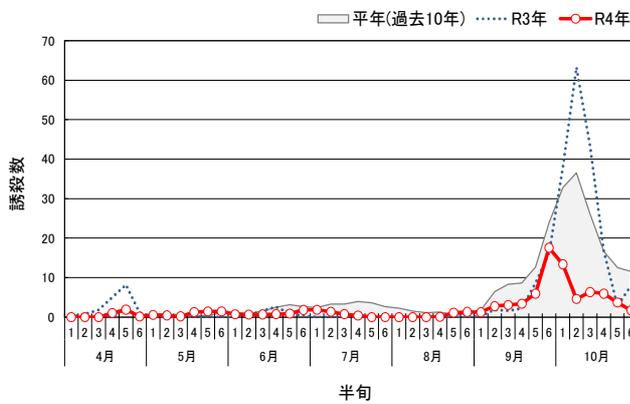
b クサギカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



c ツヤアオカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



(エ) 果樹カメムシ類の越冬密度調査結果 (3月)

果樹カメムシ類の越冬密度調査結果について

令和5年3月2日
埼玉県病害虫防除所

ナシ、モモ、カンキツなどの果樹を加害する果樹カメムシ類の防除の参考とするために、チャバネアオカメムシなどの越冬密度調査を行いました。

調査の結果、チャバネアオカメムシ（越冬成虫）の捕獲数は平年並でしたが、確認地点率は平年を上回りました。

果樹カメムシ類は、地域によって越冬密度が異なり、局所的に多く飛来することがあります。

また、気象条件によっては発生時期が早まることがあるため、今後防除所が発表する予察灯、フェロモントラップの誘殺数をよく確認し、初期飛来に注意して適切に防除してください。

1 調査時期

令和5年2月1日～2月22日

2 調査地点

8地点（表参照）

3 調査方法

- (1) 雑木林の南斜面から、1地点につき3か所（各1㎡）の落葉を採取。
- (2) 採取した落葉を温室内（25℃加温）に2週間以上静置し体色が緑化したチャバネアオカメムシ等の成虫数を調査。

4 結果

1地点あたりの平均成虫数は0.63頭で、過去10年で5番目に高い数値となり、確認地点率は38%で、過去10年で4番目に高い数値となった（下表、下図）。



チャバネアオカメムシの成虫
（体長10～12ミリメートル）

表 果樹カメムシ類の越冬成虫数

単位:頭		
採取地点	チャバネアオカメムシ	その他のカメムシ
東松山市松山	2	
北本市荒井	0	
寄居町鉢形	0	
神川町池田	0	
加須市種足	1	その他 5
蓮田市高虫	2	クモヘリカメムシ 1
春日部市内牧	0	クモヘリカメムシ 1、その他 11
久喜市清久	0	クモヘリカメムシ 1、イネカメムシ 1、その他 3
計	5	—
平均越冬虫数 (1地点あたり)	0.63	(過去10年の平均虫数 0.68)
確認地点率	38%	(過去10年の平均地点率 34%)

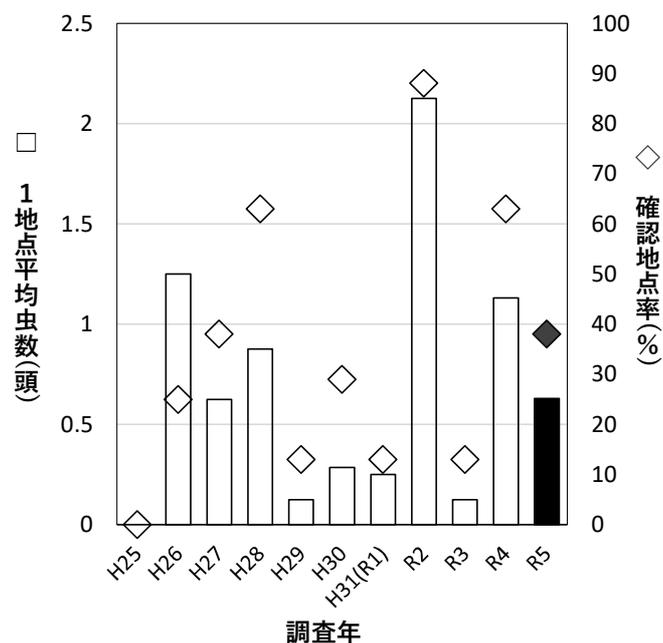
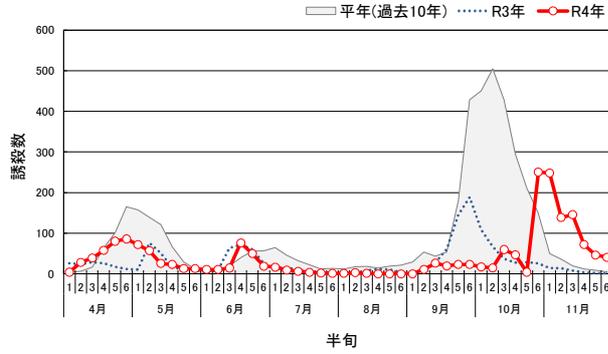


図 チャバネアオカメムシの越冬成虫調査結果

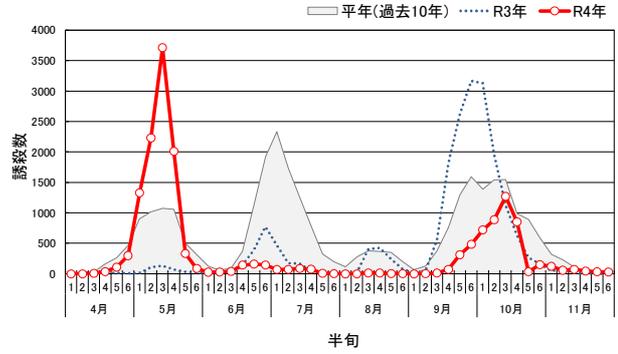
エ 茶

(ア) チャハマキのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物:茶 調査地点:所沢市下富

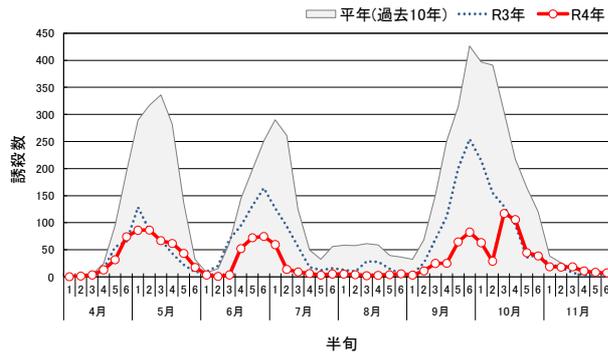


対象作物:茶 調査地点:入間市根岸

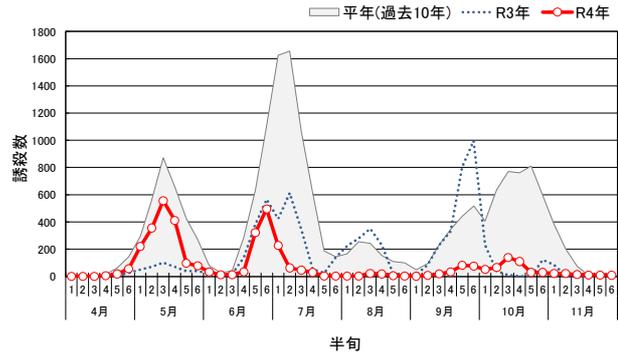


(イ) チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物:茶 調査地点:所沢市下富

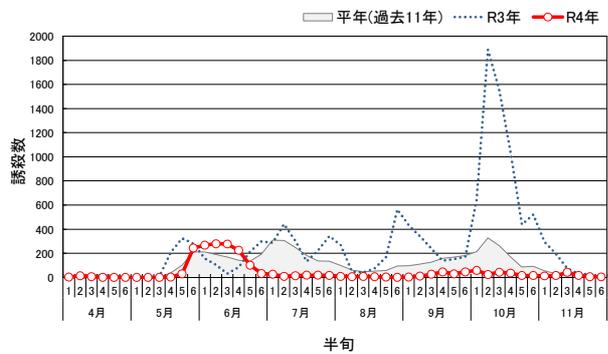


対象作物:茶 調査地点:入間市根岸

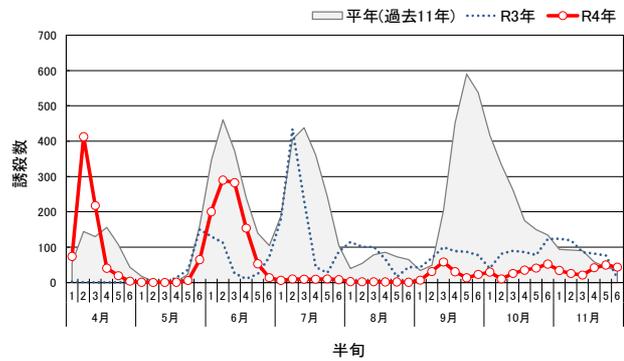


(ウ) チャノホソガのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物:茶 調査地点:所沢市下富

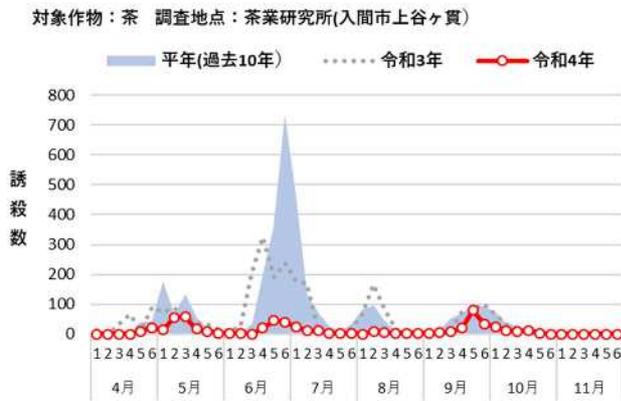


対象作物:茶 調査地点:入間市根岸

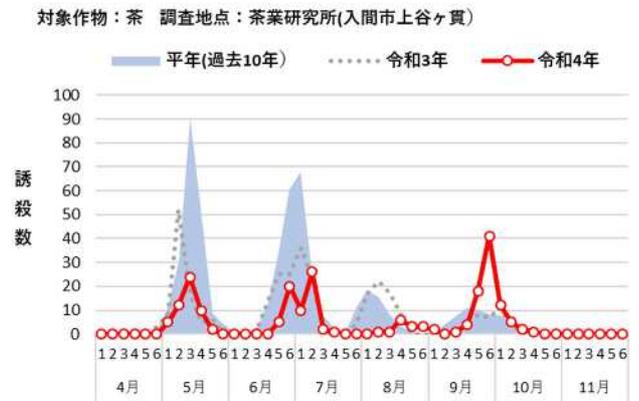


(エ) 茶業研究所 県予察ほ場調査結果 (4~3月)

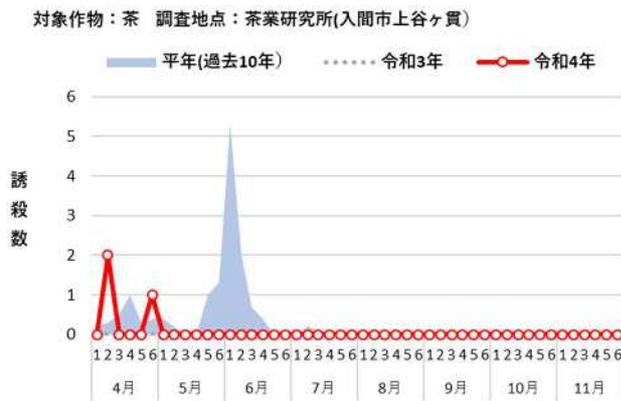
a 予察灯へのチャハマキの誘殺数



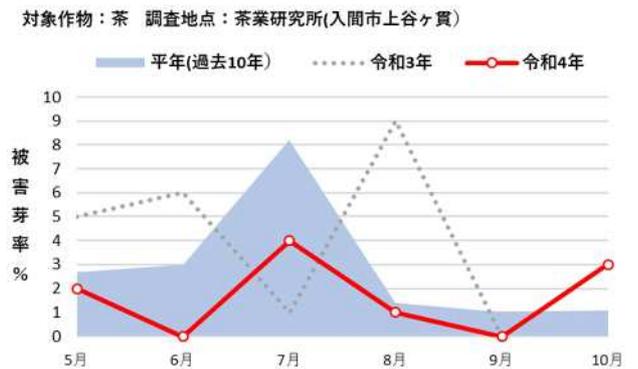
b 予察灯へのチャノコカクモンハマキの誘殺数



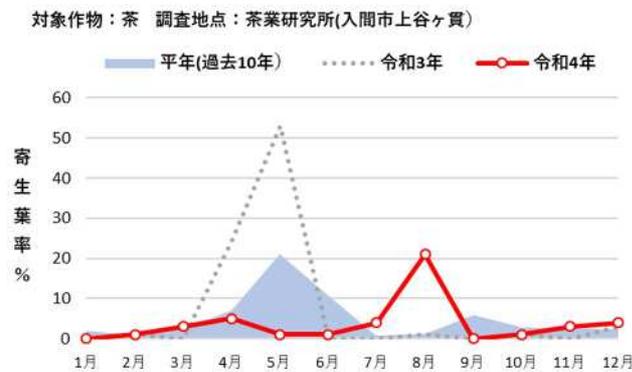
c 予察灯へのチャノホソガの誘殺数



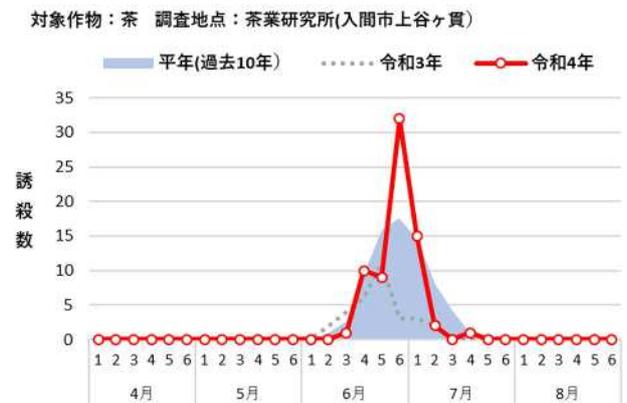
d ツマグロアオカスミカメ被害芽率



e カンザワハダニの発生推移



f 予察灯へのナガチャコガネ成虫の発生推移



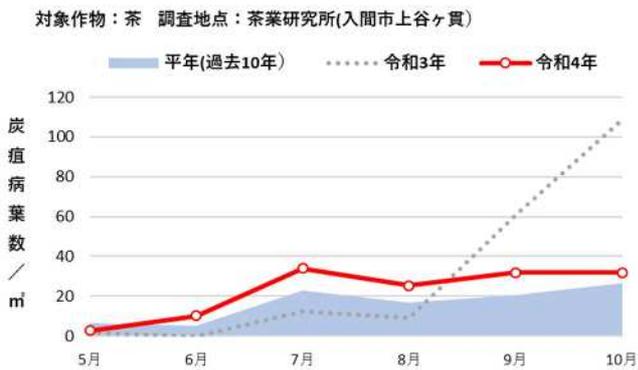
g チャノキイロアザミウマの発生推移



h チャノミドリヒメヨコバイの発生推移



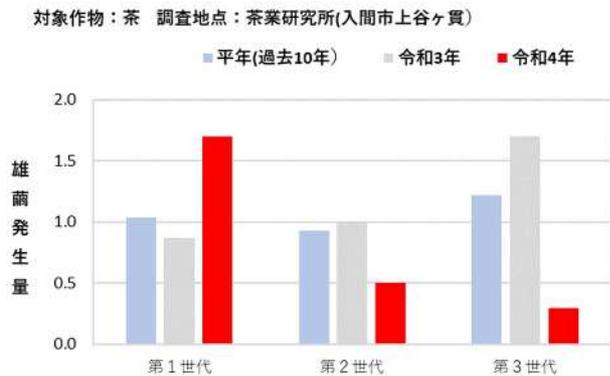
i 炭疽病の発生推移



j 輪斑病の発生推移



k クワシロカイガラムシの発生推移
(30株あたりの平均)



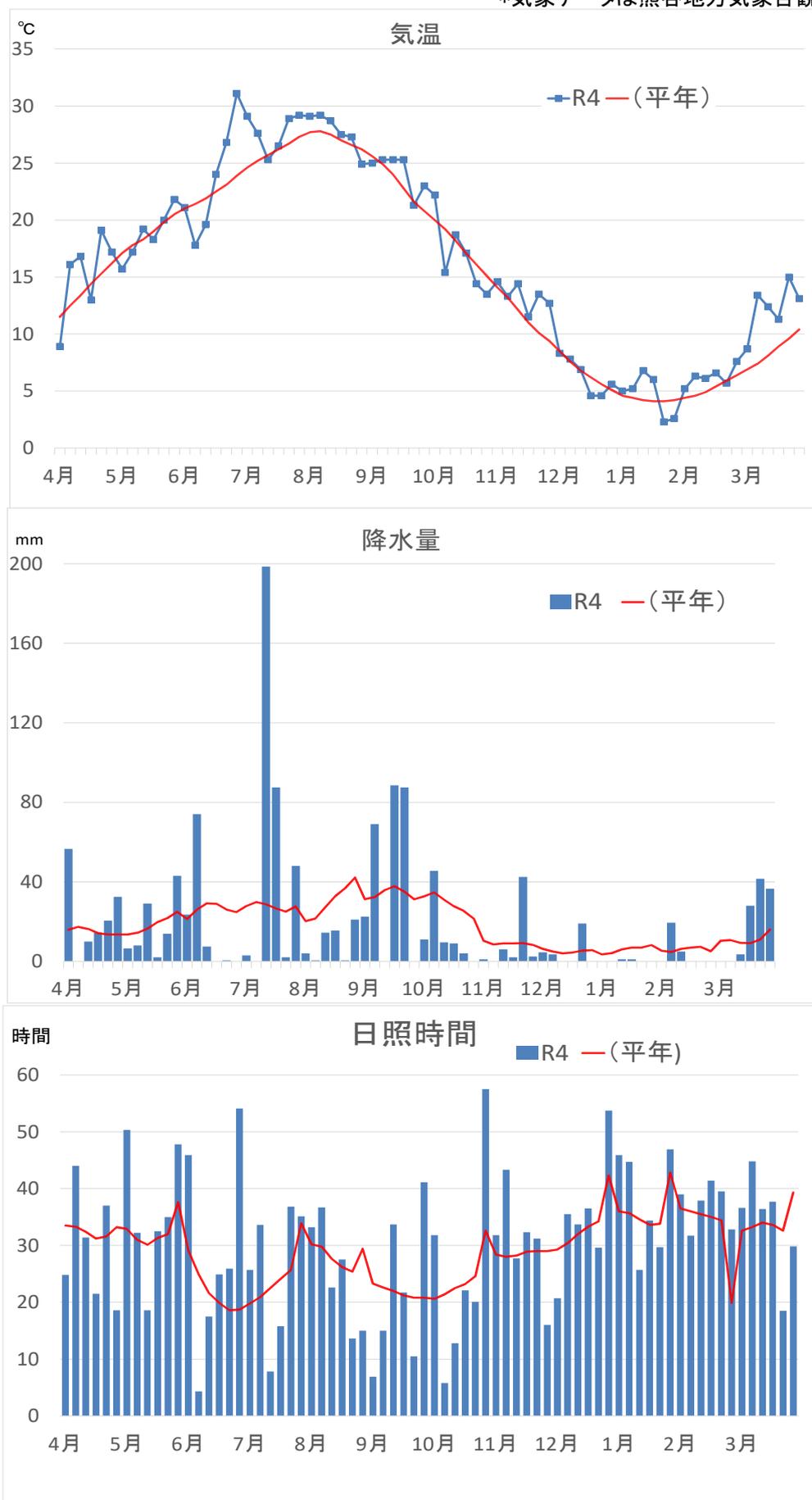
l チャトゲコナジラミの発生推移



(3) その他

ア 令和4年度熊谷の気象データ

*気象データは熊谷地方気象台観測値を使用



イ 無人ヘリコプターによる防除実績

年次別防除実績の推移（平成24年までは【その他：肥料、除草剤など】を除く）

（資料提供：一般社団法人埼玉県植物防疫協会）

（単位：ha）

	年度	平成 19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年
麦	市町村数	13	17	19	16	17	17	17	16
	実施面積	841.0	2064.5	2620.6	2574.1	2472.0	2511.1	2722.2	2825.5
水稲	市町村数	8	9	11	11	10	8	10	15
	実施面積	1405.6	1714.2	2133.9	2409.3	2372.1	2513.6	3317.0	3030.3
大豆	市町村数	10	14	13	10	7	5	6	3
	実施面積	272.4	407.0	395.0	304.9	272.9	250.0	251.5	201.5
その他	市町村数	—	—	—	—	—	—	3	8
	実施面積	—	—	—	—	—	—	20.6	163.1
計	市町村数	31	40	43	37	34	30	36	41
	実施面積	2519.0	4185.7	5149.5	5288.3	5117.0	5274.7	6311.3	6220.4

（単位：ha）

	年度	27年	28年	29年	30年	令和元年	2年	3年	4年
麦	市町村数	17	19	17	14	17	17	14	15
	実施面積	2821.0	3174.3	2977.8	3194.6	3057.8	3275.2	3062.8	2976.8
水稲	市町村数	13	14	13	16	20	13	17	15
	実施面積	3549.1	3541.4	3561.8	3913.5	3826.7	3958.8	3721.8	3588.2
大豆	市町村数	6	7	5	7	6	4	5	4
	実施面積	270.0	284.3	243.7	264.2	163.4	143.0	204.2	176.0
その他	市町村数	10	8	8	6	10	12	9	6
	実施面積	117.3	224.3	79.6	223.4	198.7	317.0	120.7	67.7
計	市町村数	46	48	43	43	26	23	25	23
	実施面積	6754.4	7224.3	6952.9	7595.7	7246.6	7694.0	7109.5	6808.7

*市町村数の計は平成19年～30年は「のべ市町村数」、令和元年以降は「実市町村数」とする。

ゴルフ場の害虫防除のための散布は、実施面積から除く。

平成22年実績として、甘藷1地区1.1haの実績がある。（別途）

「その他（ジャガイモ、肥料、除草剤、種子）」は、平成25年から記載。

ウ 過去の病害虫発生予察警報、注意報、特殊報発表状況

(ア) 警報

月 日	内 容
昭和 58 年 7 月 13 日	イネ縞葉枯病
昭和 59 年 6 月 22 日	イネ縞葉枯病
平成 5 年 8 月 20 日	イネいもち病 (穂いもち病)

(イ) 注意報及び特殊報

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
昭和 54	5. 29	イネ縞葉枯病、黒すじ萎縮病	7. 20	キュウリ黄化病、キクのサビダニ、 チューリップのサビダニ イチゴ炭そ病
	7. 10	ナシのハダニ類		
	8. 8	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ	9. 11	
55	4. 30	チャのサンカクハマキ		
	8. 1	イネいもち病 (穂いもち)		
	9. 9	キュウリ斑点細菌病、べと病、ナス 褐色腐敗病、トマト疫病、ニンジン 黒葉枯病、ネギ黒斑病、さび病、露 地野菜軟腐病		
57	8. 13	イネいもち病 (穂いもち)	3. 4	イチゴ疫病、クリのヨシノコブガ、 シクラメンホコリダニ イネミズゾウムシ コムギ条斑病
			5. 28	
			6. 1	
58	5. 23	イネミズゾウムシ		
	6. 3	イネ縞葉枯病		
59	2. 16	ムギダニ	7. 2	ニンジン斑点細菌病、タマネギ萎黄 病、クワイ茎腐病 シュンギクべと病 キュウリホモプシス根腐病
	4. 13	ムギアカタマバエ	10. 4	
	6. 14	イネ縞葉枯病	12. 21	
60	3. 19	キュウリ、ナス、トマト及びイチゴの 灰色かび病		
	4. 17	ムギアカタマバエ		
	5. 10	イネミズゾウムシ		
	8. 26	ダイコン及びハクサイウイルス病		
	8. 31	セジロウンカ		
61	4. 30	ムギアカタマバエ	1. 17	ニンジン菌核病、ダイコンバーティ シリウム黒点病 チャ輪斑病 ミナミキイロアザミウマ
	5. 12	イネミズゾウムシ	3. 28	
	7. 21	セジロウンカ	7. 9	
	8. 21	ニカメイチュウ第2世代幼虫		
62	5. 7	イネミズゾウムシ	3. 11	レタスビッグベイン病
	5. 11	野菜のアブラムシ類及びウイルス病		
	6. 17	イネ縞葉枯病		
	8. 11	セジロウンカ		
63	5. 10	イネミズゾウムシ		
	8. 19	イネいもち病 (穂いもち)		

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
平成 元	8. 25	イネ白葉枯病	8. 25	イネ白葉枯病
2	5. 8 8. 1	ナシ黒星病 セジロウンカ	5. 8 9. 5	タバココナジラミ ミカンキイロアザミウマ
3	7. 12 8. 7 8. 7	ナシのカメムシ類 ニカメイチュウ第2世代 セジロウンカ	6. 4	カキクダアザミウマ
4	6. 19	ナシ、カンキツ類のカメムシ類	7. 29 12. 8	ヨメナスジハモグリバエ カラッコエのさび病(仮称)
5	3. 9 8. 5	チャのカンザワハダニ イネいもち病(葉いもち、穂いもち)	3. 9	マメハモグリバエ
6	6. 17	イネいもち病(葉いもち)	10. 7	トマトサビダニ
7	7. 21	イネいもち病(葉いもち)		
8	8. 6	ナシのカメムシ類	8. 26 9. 19	シロイチモジヨトウ オオタバコガ
9	7. 7 8. 1	ネギ等のシロイチモジヨトウ ナス等のオオタバコガ	6. 23 8. 1	トマト黄化壊疽ウイルス(TSWV) カボチャ台キュウリ立枯病
10	5. 14 6. 11 9. 30	ナシの疫病、黒星病 ナシのカメムシ類 チャのウスミドリメクラガメ		
11	9. 28	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ		
12	9. 7	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ		
13	6. 11 8. 16	ナシのカメムシ類 イネの斑点米カメムシ類	2. 1	イチジク株枯病
14			1. 23 5. 13 9. 17	トマトハモグリバエ アルファルファタコゾウムシ ルイスハダニ
15	8. 13	イネいもち病(穂いもち)	2. 10	インパチェンスえそ斑紋ウイルス (INSV)
16			6. 10	IYSV(Iris yellow spot virus) によるトルコギキョウ及びユーチャ リスの病害
17	6. 9 8. 4	キュウリ黄化えそ病(MYSV) 水稻のフタオビコヤガ	2. 17 5. 19 9. 16	トマト黄化葉巻病(TYLCV) キュウリ黄化えそ病(MYSV) クワシロカイガラムシ
18	6. 2 6. 27 7. 24 8. 2 11. 2	ナシのカメムシ類 イネいもち病(葉いもち、穂いもち) イネいもち病(葉いもち、穂いもち) フタオビコヤガ(イネアオムシ) トマト黄化葉巻病(TYLCV)	4. 11 10. 10 11. 15 12. 5	タバココナジラミバイオタイプQ フタスジヒメハムシによるダイズ被 害 ユリのイチゴセンチュウ クリバネアザミウマ(ミョウガ)
19	3. 27 7. 26 8. 13 9. 20	チャのカンザワハダニ イネいもち病(葉いもち、穂いもち) フタオビコヤガ(イネアオムシ) ハスモンヨトウ	3. 9 7. 26 8. 30 10. 4 11. 5	クロスジコバネアブラムシ(ミョウ ガ) IYSV(Iris yellow spot virus)によ るネギの病害 カキノヒメヨコバイ(カキ) アワダチソウグンバイ(キク科) プラタナスグンバイ(プラタナス)

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
20	4. 7 5. 1 6. 4 10. 2	チャのカンザワハダニ ナシヒメシンクイ ナシ黒星病 チャハマキ	1. 16 3. 25 10. 30	ツマグロヒョウモン幼虫によるパンジー等の被害 クロトンアザミウマ (モントレイトスギ) キュウリ退緑黄化病 (CCYV:仮称)
21	5. 1 7. 29	ナシのナシヒメシンクイ イネいもち病(葉いもち、穂いもち)	11. 12	チャのミカントゲコナジラミ
22	6. 11 7. 8 8. 27	ナス、スイートコーンなどのオオタバコガ フタオビコヤガ (イネアオムシ) 野菜類、花き類及びダイズのハスモンヨトウ	2. 9 3. 31 7. 23 12. 21 12. 22	ハウレンソウのハコベハナバエ ブロッコリー菌核病 ウメ輪紋ウイルス (plum pox virus) トルコギキョウ葉巻病 トマトすすかび病
23	7. 20 8. 3	斑点米カメムシ類(アカヒゲホミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ホリハリカメムシ、クモハリカメムシ) フタオビコヤガ(イネアオムシ)	7. 26 10. 26 12. 19	クロメンガタスズメによるトマト・ナス等の被害 チャノキイロアザミウマによるナシへの寄生と被害 ムギ類黒節病
24	6. 5	ナシのカメムシ類 (チャバネカメムシ、クギカメムシ、ツヤアカメムシ)	12. 6 1. 30	ネギ葉枯病菌による黄色斑紋症状の発生について スモモ斑入果病について
25	5. 28 5. 31 7. 19 9. 2	チャノコカクモンハマキ ヒメトビウンカ (イネ縞葉枯病) 斑点米カメムシ類(アカヒゲホミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ホリハリカメムシ、クモハリカメムシ他) ヒメトビウンカ (イネ縞葉枯病、イネ黒すじ萎縮病) ツバキ、サザンカ、サカキのチャトゲコナジラミ		
26	4. 1 5. 23 6. 10 6. 30 3. 30	イネ縞葉枯病 (ヒメトビウンカ) イネ縞葉枯病 ナシのカメムシ類 (チャバネカメムシ他) 斑点米カメムシ類 イネ縞葉枯病		
27	7. 9 3. 28	イネいもち病 イネ縞葉枯病	10. 8	ヒサカキワタフキコナジラミによるチャへの被害について
28	7. 27	イネいもち病	6. 28	秋冬ネギ及び春ニンジンに発生したクロバネキノコバエ科の一種 (<i>Bradysia</i> sp.) について
29	7. 3	斑点米カメムシ類 (特に、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ)	7. 25 7. 31	ナス黒点根腐病の発生について クビアカツヤカミキリの発生について
30	8. 8 8. 8	野菜類、花き類のオオタバコガ ネギのシロイチモジヨトウ	5. 30 5. 30 6. 7	トビイロシワアリについて オリーブアナアキゾウムシについて トマト黄化病について

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
平成 31 令和 元	4. 23 5. 10 6. 3 7. 8	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ） 茶、チャハマキ ナシ、果樹カメムシ類 茶、チャハマキ	10. 15	ネギハモグリバエの別系統の発生について
2	7. 28 9. 11	イネいもち病（葉いもち、穂いもち） ネギのシロイチモジヨトウ	7. 27 8. 24 10. 13	ミナミアオカメムシの発生について ツマジロクサヨトウの発生について <i>Singapore shinshana</i> (Matsumura) (和名なし) (ヨコバイ科の一種) の発生について
3	7. 7 8. 31	イネいもち病（葉いもち） ネギ、シロイチモジヨトウ	8. 3 10. 29 10. 29	サツマイモ基腐病の発生について サクセスキクイムシの発生について ヨツモンカメノコハムシの発生について
4	7. 11 7. 27 7. 27 9. 8	ネギ、さび病 野菜類、花き類、オオタバコガ ネギ、シロイチモジヨトウ 野菜類、花き類、大豆 オオタバコガ	10. 21	タバコノミハムシの発生について

7 肥料検査の概要

(1) 検査

肥料の品質の確保等に関する法律に基づき、肥料の品質の保全及び公正な取引と安全な施用を確保し、農業生産力の維持・増進及び国民の健康の保護に寄与するため、生産業者及び販売業者の事業場等へ立入検査を行った。

普通肥料は、生産事業場 4 か所に立入り、知事登録肥料 5 銘柄を収去したところ、保証成分量及び有害成分量に問題はなかった。また 5 銘柄（50 点）について重量検査を実施したところ、重量不足等の問題はなく適正であった。

特殊肥料は、生産事業場 7 か所に立入り、品質表示義務のある銘柄を収去し、表示成分等の分析を行った。また生産事業所 1 か所（加須市）については、生産物がなかったため聞き取り調査のみを実施した。

ア 月別立入検査成績

令和 年.月	立 入 事 業 場 数	収 去 件 数				販 売 事 業 場	計	備 考 (立入事業場の所在地)
		生産事業場			計			
		知事 登録	指定 配合	特殊 肥料				
4. 5	2	1		1		2	久喜市、三芳町	
4. 6	1	1				1	神川町	
4. 7	2	1		1		2	*加須市、朝霞市	
4. 10	1			1		1	川越市	
4. 11	3			4		4	入間市、深谷市（2）	
4. 12	1	2				2	横瀬町	
計	10	5		7		12		

*加須市の生産事業所について聞き取り調査のみ実施。

イ 普通肥料の検査

(ア) 検査標品点数及び対象数量

	生産事業場		販売 事業場	備 考
	知事登録肥料	指定配合肥料		
検査標品点数	5	0	0	
不合格点数	0	0	0	
検査対象数量(t)	2	0	0	
保証票検査等に 係る違反点数	0	0	0	

(イ) 分析検査成績

a 種類別検査成績

肥料の種類	検査標品点数	不合格点数	不合格率(%)
混合有機質肥料	1	0	0
豆腐かす乾燥肥料	1	0	0
食品残さ加工肥料	1	0	0
消石灰	2	0	0
計	5	0	0

b 成分別検査成績

検査成分	検査標品点数	不合格点数	不合格率(%)
窒素全量	3	0	0
りん酸全量	1	0	0
加里全量	2	0	0
アルカリ分	2	0	0
カドミウム	1	0	0
ひ素	1	0	0
油分	1	0	0
計	11	0	0

(ウ) 重量検査

肥料の種類	検査点数(銘柄数)	不合格点数	不合格率(%)
消石灰	20(2)	0	0
混合有機質肥料	10(1)	0	0
豆腐かす乾燥肥料	10(1)	0	0
食品残さ加工肥料	10(1)	0	0
計	50(5)	0	0

ウ 特殊肥料の検査

(ア) 検査標品点数及び対象数量

	生産事業場	備考
検査標品点数	7	
不合格点数	0	
検査対象数量(t)	58	

(イ) 分析検査成績

a 種類別検査成績

指定名	検査標品点数	不合格点数
堆肥	7	0
計	7	0

b 成分分析調査成績

分析成分	分析成分点数	不合格点数
水分	7	0
窒素全量	7	0
りん酸全量	7	0
加里全量	7	0
石灰全量	7	0
亜鉛全量	0	0
銅全量	0	0
炭素窒素比	7	0
計	42	0

(ウ) 重量検査

肥料の種類	検査点数 (銘柄数)	不合格点数	不合格率 (%)
堆肥	0 (0)	0	0
計	0 (0)	0	0

エ 検査結果の公表 (県報登載状況)

公表年月日	検査点数 (銘柄数)			不合格点数			保証票 検査等 に係る 違反数
	普通 肥料	指定 配合	特殊 肥料	普通 肥料	指定 配合	特殊 肥料	
R4. 12 . 6	3	0	0	0	0	0	0
R5. 3 . 3	0	0	2	0	0	0	0
R5. 3 . 24	2	0	0	0	0	0	0
R5. 6 . 2	0	0	5	0	0	0	0
計	5	0	7	0	0	0	0

オ 肥料取締法違反の処分状況

(ア) 告発 該当なし

(イ) 注意等行政指導

- a 当センター検査に係るもの 該当なし
- b 他の検査機関から依頼されたもの 該当なし
- c 他の検査機関へ依頼したもの 該当なし

(2) 登録及び届出

今年度の知事登録普通肥料の申請及び届出件数は 46 件（前年度比+8）であった。新規登録件数は 2 件（前年度比±0）であり、肥料登録有効期間延長（更新）申請が 13 件（前年度比-14）であった。書替申請 4 件（前年度比+4）であり、再交付申請 0 件（前年度比±0）、変更等届出が 19 件（前年度比+13）、登録失効届出は 8 件（前年度比+5）であった。

指定混合肥料の各届出は 4 件（前年度比+4）であった。

特殊肥料関係の各届出は計 40 件（前年度比+4）であった。

肥料販売関係の届出は、208 件（新規 34・変更 143・廃止 28・その他 3）であった。

令和 5 年 3 月末現在、生産業者数は知事登録普通肥料 32 業者・指定混合肥料 11 業者・特殊肥料 368 業者であり、のべ合計 411 業者となっている。また、肥料の有効銘柄数は、知事登録普通肥料 74 銘柄・指定混合肥料 23 銘柄・特殊肥料 478 銘柄、合計 575 銘柄となっている。

ア 肥料の種類別新規登録件数

肥料の種類	件数
なたね油かす及びその粉末	1
乾燥菌体肥料	1
計	2

イ 肥料の種類別登録更新件数

肥料の種類	件数
消石灰	6
魚かす粉末	1
米ぬか油かす及びその粉末	1
乾燥菌体肥料	3
混合有機質肥料	1
炭酸カルシウム肥料	1
計	13

ウ 肥料の種類別失効件数

肥料の種類	件数
混合有機質肥料	2
副産動物質肥料	2
消石灰	2
生石灰	1
炭酸カルシウム肥料	1
計	8

エ 指定混合肥料の新規届出件数

肥料の種類	件数
土壌改良資材等入り指定混合肥料	1
計	1

オ 特殊肥料の種類別新規届出件数

肥料の種類	件数
堆肥	10
牛ふん	(4)
豚ふん	(1)
家きんふん	(2)
生ごみ	(1)
その他	(2)
混合特殊肥料	2
計	12

カ 知事登録普通肥料の種類別有効登録件数
(令和5年3月31日現在)

肥料の種類	有効登録数	備考	
		R3年度	R2年度
魚かす粉末	8	8	8
魚節煮かす	2	2	2
肉かす粉末	1	1	2
肉骨粉	0	0	1
蒸製骨粉	0	0	0
なたね油かす及びその粉末	3	2	2
ごま油かす及びその粉末	0	0	0
米ぬか油かす及びその粉末	3	3	3
ひまし油かす及びその粉末	1	1	1
豆腐かす乾燥肥料	1	1	0
加工家きんふん肥料	3	3	3
副産植物質肥料	2	2	2
乾燥菌体肥料	12	11	11
副産動物質肥料	3	5	5
混合有機質肥料	12	14	14
*食品残さ加工肥料	1	1	-
化成肥料	0	0	0
配合肥料	2	2	2
生石灰	3	4	4
消石灰	13	15	15
炭酸カルシウム肥料	3	4	4
副産石灰肥料	1	1	2
計	74	80	81

キ 特殊肥料の指定名別有効届出数
(令和5年3月31日現在)

指定名	届出数
米ぬか	5
くず大豆及びその粉末	1
草木灰	3
骨炭粉末	1
動物の排せつ物	15
牛ふん	(1)
豚ふん	(1)
家きんふん	(13)
動物の排せつ物の燃焼灰	3
家きんふん	(3)
堆肥	429
牛ふん	(123)
豚ふん	(49)
家きんふん	(46)
馬ふん	(5)
生ごみ	(47)
樹皮	(3)
草木質系(樹皮以外)	(70)
その他	(86)
発泡消火剤製造かす	3
貝殻肥料	5
貝化石粉末	1
カルシウム肥料	7
混合特殊肥料	5
計	478

*「食品残さ加工肥料」は令和2年12月1日に施行された告示（農水省告示第2126号）により新たに追加された肥料の種類であるため令和2年度は（-）表示とした。

ク 各種申請・届出の処理状況

申請・届出の種類	件数	備考
肥料登録申請	2	アのとおり
肥料登録有効期間更新申請	13	イのとおり
肥料登録事項変更届	19	代表者の変更
肥料登録証書替交付申請	4	会社名の変更
肥料登録証再交付申請	0	
肥料登録失効届	8	ウのとおり
指定混合肥料生産業者届	1	土壌改良資材等入り指定混合肥料
指定混合肥料生産業者届出事項変更届	3	代表者の変更
指定混合肥料生産事業廃止届	0	
特殊肥料生産業者届	12	オのとおり（法人 11、個人 1）
特殊肥料生産業者届出事項変更届	12	代表者 4、住所 1、原料 3、事業場 2、会社名 2
特殊肥料生産事業廃止届	16	堆肥（法人 5、個人 11）
肥料販売業務開始届	34	法人 26、個人 8
肥料販売業務開始届出事項変更届	143	事業所 113、代表者 20、その他 10
肥料販売業務廃止届	28	法人 13、個人 15
その他の届出	3	肥料販売届出受理の証明
計	298	

※件数は、申請書、届出書の件数

ケ 肥料生産業者及び販売業者数（令和 5 年 3 月 31 日現在）

区分	業者数	有効銘柄数等	
生産業者	普通肥料生産業者	32	74
	指定混合肥料生産業者	11	23
	特殊肥料生産業者	368	478
	計	411	575
販売業者	農協系	20	（うち生産を兼ねるもの 0）
	商系	1,242	（ ” 391）
	計	1,262	—

(3) 調査事業等

肥料行政の推進や肥料の安定供給に必要な肥料の生産・流通の現状を把握するため、肥料流通実態調査事業による肥料の生産量及び流通量の調査を行った。

ア 肥料生産量調査

(ア) 目的

埼玉県知事登録及び届出肥料の生産量の実態を把握する。

(イ) 調査方法

埼玉県知事登録のある普通肥料生産業者と埼玉県知事に届出をした指定配合肥料生産業者及び特殊肥料生産業者を対象として、令和4年1月から令和4年12月までの肥料生産量の調査を実施した。

対象とした肥料生産業者数及び肥料の銘柄数は以下のとおり。

業者の種類	業者数	対象となる肥料の銘柄数
知事登録普通肥料生産業者	34	83
知事届出指定配合肥料生産業者	10	19
特殊肥料生産業者	311	411

(ウ) 調査結果の概要

令和4年度の知事登録肥料および知事届出の指定混合肥料の生産量は、14,015トン（対前年比97%）で前年より僅かに減少した。乾燥菌体肥料の生産が減少した（同79%）ほか消石灰（同96%）、生石灰（同43%）が減少した。逆に、混合有機質肥料（同138%）、副産石灰肥料（同124%）の生産が増加した（表1）。

特殊肥料の生産量は84,394トン（同97%）で僅かに減少した。動物の排せつ物（家きんふん（同5%））が大きく減少した。生産量の多くを占める堆肥は83,296トン（同98%）と僅かな減少であったが、全体の生産量に影響した。堆肥の中では、牛ふん堆肥（同79%）の減少の影響が大きかった。（表2）

表1 埼玉県知事登録及び届出の普通肥料生産量

肥料の種類	生産量(トン)			令和4年払出量(トン)			調査対象登録 肥料銘柄数 [生産実績のあ ったもの]
	令和 4年 (トン)	令和 3年 (トン)	対前 年比 (%)	国内向 製品 (トン)	原料用 (トン)	その他 (トン)	
魚かす粉末	8	0	-	8	0	0	8[1]
魚節煮かす	58	44	132	54	4	0	2[2]
肉かす粉末	0	4	0	0	0	0	1[0]
食品残さ加工肥料	5	0	-	5	0	0	1[1]
豆腐かすの乾燥肥料	0	0	-	0	0	0	1[1]
なたね油かす及びその粉末	1,319	1,332	99	852	707	180	2[2]
米ぬか油かす及びその粉末	4,296	4,258	101	2,107	2,189	500	3[2]
ひまし油かす及びその粉末	22	64	34	40	0	0	1[1]
加工家きんふん肥料	0	0	-	0	0	0	3[0]
副産植物質肥料	0	0	-	0	0	0	2[0]
乾燥菌体肥料	1,838	2,316	79	114	1,724	0	11[5]
副産動物質肥料	0	0	-	0	0	0	3[0]
混合有機質肥料	604	436	138	229	335	55	13[7]
配合肥料	20	4	454	0	20	0	2[2]
生石灰	87	203	43	87	0	0	4[2]
消石灰	4,484	4,685	96	4,154	0	0	15[9]
炭酸カルシウム肥料	655	591	111	655	0	0	4[1]
副産石灰肥料	555	447	124	632	0	113	1[1]
指定混合肥料	64	52	123	64	0	0	18[4]
計	14,015	14,437	97	9,001	4,979	848	95[41]

注) 1 普通肥料の生産量には、飼料用・工業用等のその他の区分のものは含めていない。

2 生産量と払出量の差は在庫や昨年生産品の出荷である。

3 生産量・払出量は肥料の種類ごとに四捨五入しているので、種類ごとの総和が、計に合わないことがある。

表2 埼玉県知事届出の特殊肥料生産量

特殊肥料の種類	令和4年 (トン)	令和3年 (トン)	対前年比 (%)	調査対象 有効届出数 [生産実績あったもの]
米ぬか	937	540	173	5[3]
くず大豆及びその粉末	1	3	47	1[1]
草木灰	0	0	-	3[0]
骨炭粉末	0	0	-	1[0]
動物の排せつ物	86	1,865	5	15[4]
(牛ふん)	(2)	(2)	(100)	(1[1])
(鶏ふん)	(0)	(0)	(-)	(1[0])
(豚ふん)	(0)	(0)	(-)	(1[0])
(家きんふん)	(84)	(1,863)	(5)	(12[3])
動物の排せつ物の燃焼灰	17	7	243	3[2]
(家きんふん)	(17)	(7)	(243)	(3[2])
堆肥	83,296	84,867	98	435[184]
牛ふん堆肥	(24,828)	(31,316)	(79)	(130[60])
豚ふん堆肥	(9,070)	(10,542)	(86)	(47[19])
鶏ふん堆肥	(14,242)	(10,072)	(141)	(35[12])
家きんふん堆肥	(6,454)	(6,143)	(105)	(10[5])
馬ふん堆肥	(26)	(520)	(5)	(5[1])
食品残さ	(2,214)	(2,452)	(90)	(49[12])
草木質系	(20,016)	(16,888)	(119)	(71[30])
その他	(6,447)	(6,934)	(93)	(88[45])
発泡消火剤製造かす	0	0	-	3[0]
貝殻肥料	0	0	-	5[0]
貝化石粉末	0	0	-	1[0]
カルシウム肥料	3	2.4	114	7[3]
混合特殊肥料	53	-	-	4[4]
計	84,394	87,285	97	484[201]

- 注) 1 特殊肥料の生産量には、飼料用・工業用等のその他の区分のものは含めていない。
2 特殊肥料の堆肥の中の区分は、それぞれ全体の50%を占める原料により便宜的に区分けした。
3 生産量は特殊肥料の種類ごとに四捨五入しているため、種類ごとの総和が、計に合わないことがある。

イ 肥料流通量調査

(ア) 目的

埼玉県内における化学肥料、有機質肥料等の流通量を把握し、効率的な立入検査の実施や、需要に応じた肥料の生産指導等に活用する。また、農家への肥料の安定供給や農業関係機関への資料としても利用する。

(イ) 調査方法

埼玉県知事に届出のある肥料販売業者のうち、全肥商連・埼玉県部会の会員（卸売業者）から 26 件、県内の肥料メーカーから 12 件、J A全農さいたま、ホームセンター等（量販店）、ネット販売業者から 48 件を選定し、令和 3 肥料年度（令和 3 年 7 月～令和 4 年 6 月）における肥料販売量について調査を実施した。

このうち 58 件の業者から回答を得た（回答率 67.4%）。

(ウ) 調査結果の概要

令和 3 肥料年度の肥料流通量は 65,887 トンで、前年度比 71.5.%と減少した（表 4）。

令和 2 肥料年度と比較し、成分量では窒素肥料（前年度比 104%）、りん酸肥料（同 100%）、加里肥料（同 98%）はいずれも大きな違いは無かった（表 3）。

複合肥料、石灰質肥料も販売量はほぼ前年並みであり、有機質肥料は前年度比 141%と大きく増加したが、特殊肥料は前年度比 41.6%と大きく減少し、流通量全体の減少に大きく影響した（表 4）。

肥料流通量のシェアを全肥商連、全農、肥料メーカー、量販店等に分類したところ、全肥商連 5.9%、全農 46.7%、肥料メーカー 2.4%、量販店等 45.0%となった。さらに量販店等を細分化したところ、ホームセンター 40.1%、ドラッグストア 1.1%、その他 3.8%となり、本県の肥料流通は全農とホームセンターが中心であった（図 3）。

表3 令和3肥料年度 肥料販売量

(取り扱い実数、単位：トン)

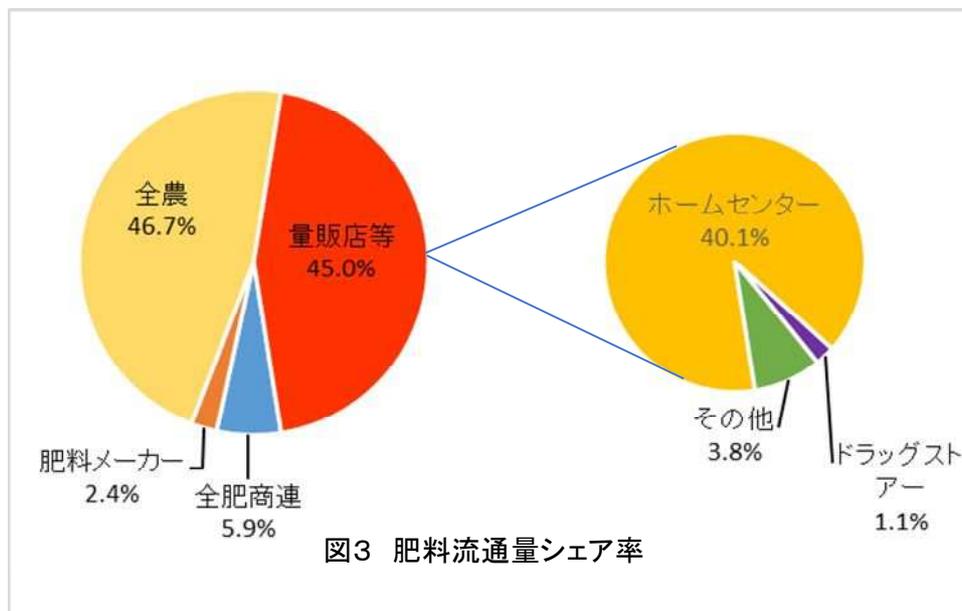
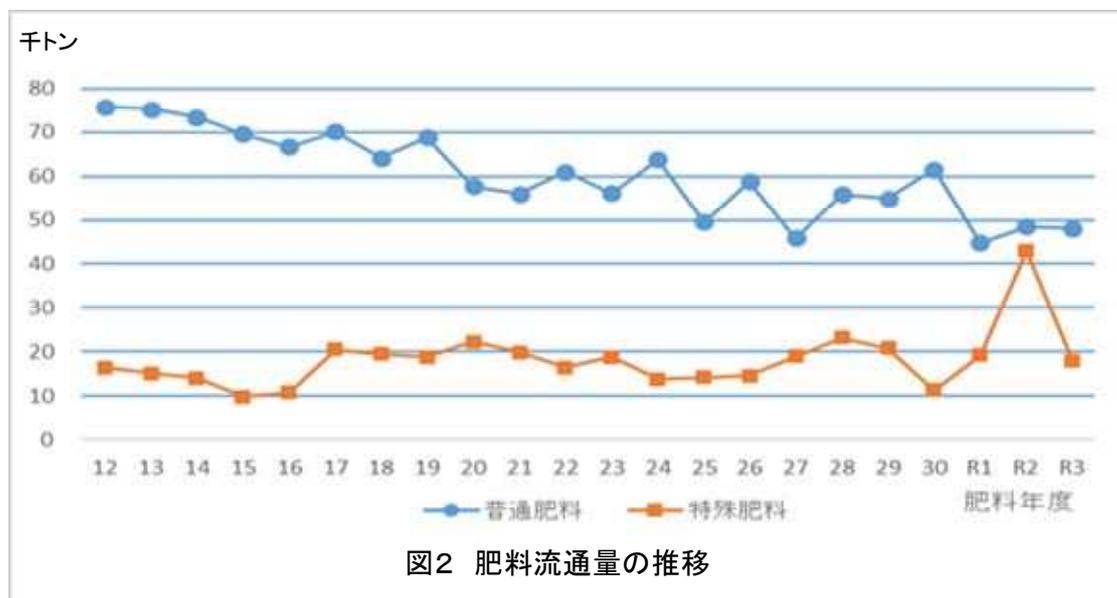
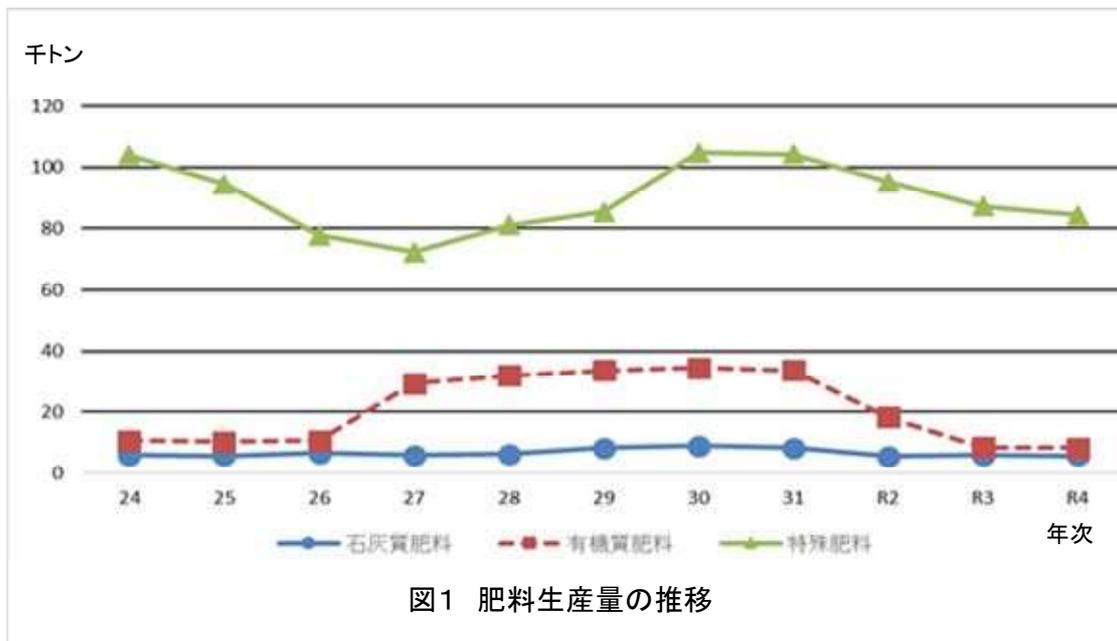
肥料の種類			販売実数(トン)	販売成分量(トン)			R3肥料年度 平均保証成分(%)		
				R3肥料年度	R2肥料年度 A	R2肥料年度 B	前年比 A/B%	窒素	りん酸
窒 素 肥 料	単 肥	硫酸アンモニア	283	59	49	120	20.9		
		塩化アンモニア	50	12	13	95	25.0		
		硝酸アンモニア	0	0	1	0	0.0		
		尿素	239	110	80	137	46.0		
		石灰窒素	1089	218	181	121	20.0		
		その他	101	32	23	137	31.8		
		小計	1,761	431	347	124			
	複 合	高度化成肥料		2,366	2,257	105	12.9		
		普通化成肥料		465	488	95	8.5		
		NK化成肥料		113	99	114	16.8		
		配合肥料 (うち粒状配合)		881	868	102	13.1		
		その他		56	67	85	12.1		
		その他		84	102	82	9.6		
		小計		3,909	3,815	102			
	合計		4,340	4,162	104				
り ん 酸 肥 料	単 肥	過りん酸石灰	115	20	20	99		17.5	
		重過りん酸石灰	23	9	8	112		37.3	
		熔成りん肥	412	81	95	86		19.6	
		加工りん酸肥料	12	2	0	621		18.0	
		その他	26	24	21	116		16.1	
		小計	588	136	144	95			
	複 合	高度化成肥料		2,172	2,129	102		12.2	
		普通化成肥料		409	424	96		7.4	
		NK化成肥料		2	2	125		0.3	
		配合肥料 (うち粒状配合)		663	665	100		8.6	
		その他		34	43	79		8.9	
		その他		76	91	83		8.1	
		小計		3,322	3,311	100			
		合計		3,458	3,455	100			
加 里 肥 料	単 肥	硫酸加里	10	5	21	24			50.3
		塩化加里	19	11	11	104			59.9
		その他	357	72	76	94			20.1
		小計	386	88	107	82			
	複 合	高度化成肥料		2,136	2,096	102			11.9
		普通化成肥料		419	434	97			7.6
		NK化成肥料		112	98	114			16.7
		配合肥料 (うち粒状配合)		635	647	98			8.8
		その他		29	37	77			10.2
		その他		79	144	55			8.3
		小計		3,381	3,419	99			
		合計		3,469	3,527	98			
	複 合 肥 料	高度化成肥料	16,252						
		普通化成肥料	5,487						
NK化成肥料		671							
配合肥料 (うち粒状配合)		7,342							
その他		277							
その他		854							
	合計	30,606							
石 灰 ・ け い 酸 肥 料	生石灰	964							
	消石灰	1,721							
	炭酸カルシウム	5,697							
	副産石灰肥料	808							
	混合石灰肥料	71							
	貝化石肥料	383							
	鋳さい珪酸質肥料	1,398							
	その他	295							
	合計	11,337							
有 機 質 肥 料	植物油かす類	752							
	魚粉類	38							
	骨粉類	70							
	その他	2,085							
	合計	2,945							
そ の 他 普 通 肥 料	苦土・マンガン質	248							
	その他肥料	43							
	合計	291							
特 殊 肥 料		17,973							
肥 料 合 計		65,887							

販売実数、販売成分量は、肥料の種類の内訳ごとに四捨五入しているため、内訳の計が合計に合わない部分がある。

表4 埼玉県内の肥料販売量の推移

(取り扱い実数、単位：トン)

年 度 肥料の種類等	25肥年	26肥年	27肥年	28肥年	29肥年	30肥年	R元肥年	R2肥年	R3肥年	R3/元比 %
硫 安	425	392	379	391	372	249	194	236	283	119.6
尿 素	248	187	225	237	50	151	148	175	239	136.7
塩 安	42	47	46	49	1	43	37	52	50	95.3
硝 安	4	3	1	2	162	2	1	2	0	0.0
石灰窒素	1,073	857	948	1,354	832	980	630	894	1,089	121.7
その他窒素肥料	94	103	160	90	76	37	76	67	101	150.5
窒素肥料合計	1,887	1,590	1,759	2,123	1,493	1,462	1,086	1,426	1,761	123.5
過りん酸石灰	300	242	215	185	136	138	116	115	115	99.6
重過りん酸石灰	70	40	36	30	25	18	19	21	23	108.0
熔成りん肥	13	21	22	550	484	375	402	480	412	85.8
加工りん酸肥料	37	38	28	10	1	1	1	1	12	1,276.6
その他りん酸肥料	127	137	128	176	43	142	134	91	26	28.5
りん酸肥料合計	1,149	973	940	951	689	674	672	709	588	82.9
塩化加里	30	28	28	28	29	22	12	18	10	56.6
硫酸加里	47	44	31	36	25	25	27	41	19	46.3
その他加里肥料	288	221	258	255	285	333	323	382	357	93.6
加里肥料合計	365	294	317	319	339	380	362	440	386	87.7
高度化成肥料 (内 有機入り)	16,657 (862)	17,316 (901)	15,815 (1,016)	19,103 (1,625)	16,101 (1,309)	15,496 (984)	15,766 (1,083)	15,810 (1,408)	16,252 (979)	102.8 69.5
普通化成肥料 (内 有機入り)	6,089 (2,133)	6,039 (2,462)	5,715 (2,093)	6,670 (2,719)	5,650 (2,401)	5,437 (2,083)	5,214 (2,222)	5,925 (991)	5,487 (3,463)	92.6 349.4
NK化成肥料	859	827	699	1,141	414	1,171	874	587	671	114.3
配合肥料 (内 有機入り)	6,379 (4,741)	6,236 (4,757)	6,013 (4,768)	7,287 (5,473)	6,672 (4,911)	6,790 (4,744)	7,103 (4,828)	7,386 (4,950)	7,342 (4,920)	99.4 99.4
(内 粒状配合肥料)	(138)	(85)	(35)	(111)	(106)	(298)	(425)	(346)	(277)	80.0
その他複合肥料 (緩効性肥料)	1,187 (5,426)	1,243 (5,930)	894 (5,840)	1,176 (5,948)	1,303 (6,131)	842 (6,594)	764 (6,691)	1,141 (6,960)	854 (8,420)	74.8 121.0
複合肥料合計	31,172	31,661	29,136	35,377	30,140	29,736	29,721	30,849	30,606	99.2
生石灰	1,228	1,022	1,052	1,092	1,042	1,018	1,007	945	964	102.0
消石灰	2,103	1,946	2,044	2,501	2,072	1,826	1,816	1,574	1,721	109.3
炭酸カルシウム	4,942	5,543	5,621	7,476	6,149	5,856	5,584	5,843	5,697	97.5
副産石灰肥料	399	380	398	391	138	134	162	488	808	165.6
混合石灰肥料	346	290	273	257	242	181	191	181	71	39.0
貝化石肥料	679	447	566	797	766	8,205	667	587	383	65.2
けい酸質肥料	1,357	1,369	1,303	1,653	1,502	1,605	1,637	1,869	1,398	74.8
その他石灰質肥料	1,239	933	930	301	220	75	297	244	295	120.9
石灰質肥料合計	12,434	11,931	12,187	14,468	12,131	18,900	11,361	11,731	11,337	96.6
植物油かす (内 なたね油かす)	716 (688)	870 (849)	835 (818)	908 (812)	876 (629)	696 (686)	773 (569)	1,634 (925)	752 (741)	46.0 80.1
魚粉類	42	46	51	50	41	35	39	37	38	103.2
骨粉類	9	23	23	132	135	76	79	76	70	91.8
その他有機質肥料	203	334	269	67	96	413	391	340	2,085	613.7
有機質肥料合計	976	1,277	1,178	1,157	1,148	1,220	1,282	2,087	2,945	141.1
苦土肥料	755	180	298	200	308	296	245	185	247	133.3
マンガン肥料	0	0	0	3	1	2	1	1	1	101.7
おでい肥料	602	61	51	8,837	8,860	8,874	94	1,695	43	2.5
たい肥	11,590	14,117	15,882	18,163	18,806	9,923	17,020	42,842	17,813	41.6
動物の排せつ物	33	232	67	1,628	308	25	274	18	22	125.3
その他特殊肥料	2,578	2,310	2,473	3,389	2,323	1,397	2,032	162	137	84.5
特殊肥料合計	14,269	16,884	18,910	23,180	21,437	11,345	19,326	43,023	17,973	41.8
肥料実数総計	63,766	64,853	64,778	86,615	76,546	72,889	64,150	92,146	65,887	71.5



(4) 畜政推進事業

畜産安全課の依頼により、特殊肥料の生産届出を促進する目的で、各家畜保健衛生所より推薦された農家の堆肥成分を分析し、結果を報告した。令和4年度は10件の分析を行った。

表5 令和4年度堆肥分析結果

農家	畜種等	分析項目	窒素全量	リン酸全量	加里全量	銅全量	亜鉛全量	石灰全量	炭素窒素比	電気伝導度 (dS/m)	水分含有量 (%)
		区分	(%)	(%)	(%)	(mg/kg)	(mg/kg)	(%)			
A	採卵鶏	現物当たり	2.8	3.8	2.6	31.2	299.3	15.6	8	6.1	12.5
		乾物当たり	3.2	4.3	2.9	35.7	342.2	17.8		—	—
B	乳牛	現物当たり	1.4	1.2	3.9	27.6	139.7	2.2	15	10.9	39.1
		乾物当たり	2.3	1.9	6.3	45.3	229.4	3.7		—	—
C	乳牛	現物当たり	2.2	2.1	4.3	38.8	279.9	3.9	14	8.7	21.1
		乾物当たり	2.8	2.6	5.5	49.3	354.9	4.9		—	—
D	乳牛	現物当たり	1.6	0.7	1.8	32.9	127.0	2.0	13	3.6	34.7
		乾物当たり	2.5	1.1	2.8	50.4	194.6	3.0		—	—
E	乳牛	現物当たり	0.7	0.7	0.9	12.8	93.0	1.3	13	5.5	74.2
		乾物当たり	2.8	2.7	3.6	49.4	359.7	4.9		—	—
F	乳牛	現物当たり	1.5	0.9	4.4	27.7	175.4	2.0	15	14.1	39.5
		乾物当たり	2.5	1.5	7.2	45.8	289.7	3.2		—	—
G	乳牛	現物当たり	1.0	0.7	0.8	10.4	98.8	1.2	11	6.3	72.0
		乾物当たり	3.7	2.6	2.9	37.2	353.0	4.3		—	—
H	乳牛	現物当たり	2.0	1.4	2.6	36.6	200.4	2.3	13	7.8	28.5
		乾物当たり	2.8	2.0	3.7	51.2	280.1	3.2		—	—
I	肉牛	現物当たり	1.1	1.3	3.0	15.1	118.4	1.5	18	10.1	47.5
		乾物当たり	2.0	2.4	5.7	28.7	225.4	2.8		—	—
J	肉牛	現物当たり	1.3	1.6	2.1	12.6	100.2	0.8	16	9.2	46.3
		乾物当たり	2.4	3.0	3.9	23.4	186.7	1.5		—	—

8 飼料検査の概要

(1) 検査

「飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律」に基づき、飼料の安全性の確保及び品質の保全と公正な飼料の取引の確保を図り、公共の安全確保と畜産物生産の安定に資するため、飼料の製造・販売事業場等に立入り、検査指導を行った。立入検査は延べ3回、収去飼料点数は5点であった。収去した飼料は栄養成分及び安全性等の分析検査を行った。

その結果、栄養成分検査及び安全性検査いずれも正常であった。

ア 月別飼料検査状況総括表

項目 年月	収去飼料件数							
	規格適合飼料		小計	非規格適合飼料			小計	合計
	配・混 合飼料	動物性 蛋白質 飼料		配・混 合飼料	動物性 蛋白質 飼料	単 体 飼 料		
R4.6						1		
R4.12						4		
合計						5	5	5

イ 立入検査状況

立入検査場所	検査対象 箇所数	立入検査 箇所数	収去 件数	収去件数の内訳		
				配混合飼料	単体飼料	牧草類
承認配合飼料工場	0					
その他の配混合飼料工場	39	1	0			
単体飼料工場	83	1	1		1	
飼料添加物工場	11					
飼料中継保管施設	—					
飼料輸入業者	12					
飼料添加物輸入業者	8					
飼料販売業者	167	1	4			4
飼料添加物販売業者	27					
運送業者	—					
その他の場所	—					
計	347	3	5		1	4

注) 1 承認配合飼料工場は、関税定率法第13条第1項に基づいて税関長の承認を受けた配合飼料工場（混合飼料のみを製造する工場を除く）とする。

2 立入検査箇所数は、延べ（立入回数）とする。

ウ 立入検査成績

区分	立入検査箇所数 a	指摘事項		指摘事項内容										現地指導一箇所当たり c/b				
		箇所数 b	割合 b/a	法第2章関係							規格適合飼料	法第32条表示	製造業者届		その他	計 c		
				成分規格	製造の基準	保存の基準	使用の基準	表示の基準	特定飼料等	製造管理者								
承認配合飼料工場																		
その他の配混合飼料工場	1	0	0														0	0
単体飼料工場	1	0	0														0	0
飼料添加物工場																		
飼料中継保管施設																		
飼料輸入業者																		
飼料添加物輸入業者																		
飼料販売事業場	1	0	0														0	0
飼料添加物販売事業場																		
運送業者																		
その他の場所																		
計	3	0	0														0	0

- 注) 1 承認配合飼料工場は、関税定率法第13条第1項に基づいて税関長の承認を受けた配合飼料工場(混合飼料のみを製造する工場を除く)とする。
 2 一般表示事項欄には、飼料等の名称、種類、製造年月、製造業者の氏名又は名称及び住所、製造事業場の名称及び所在地について指導した件数を記載する。
 3 製造管理者の届出事項に関する指導件数は、製造管理者欄に記載する。
 4 立入検査箇所数は、延べ(立入回数)とする。

エ 収去飼料の試験成績

区分	収去件数	正常なもの		正常でないもの		法第23条関係		法第32条関係				正常でないものの処置(件数)						
		件数	割合 %	件数	割合 %	試験件数	正常でないもの		試験件数	正常でないもの			行政指導	指示	行政処分	告発	備考	
							件数	割合 %		成分量件数	原材料件数	計						割合 %
配混合飼料	0																	
単体飼料	1	1	100	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0					
牧草類	4	4	100	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0					
計	5	5	100	0	0	4	0	0	1	0	0	0	0					

- 注) 正常でないものの処置は、現地指導で終了したものは除く。また、当該都道府県が行ったもの(他から依頼されたものを含む)を記載し、他都道府県へ処置を依頼したものは含まない

オ 重量検査実施状況

製造業種別区分	検査 (A)			重量不足 (B)						(B) / (A) × 100			
	工場数	銘柄数	個数	工場数	配・混合飼料		動物性蛋白質飼料		単体飼料		工場数 %	銘柄数 %	個数 %
					銘柄数	個数	銘柄数	個数	銘柄数	個数			
配混合飼料工場	0	0	0										
動物性蛋白質飼料工場	0	0	0										
単体飼料工場	0	0	0										
計	0	0	0										

カ 現地指導及び行政指導内容

(ア) 当所で検査、指導したもの	該当なし
(イ) 他所等の依頼で指導したもの	該当なし
(ウ) 他所等へ指導を依頼したもの	該当なし

キ 栄養成分に関する公表

公表年月日	規格適合飼料			非規格適合飼料			合計		
	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数
R5.3.24	0	0	0	1	1	0	1	1	0
計	0	0	0	1	1	0	1	1	0

ク 安全性に関する公表

公表年月日	規格適合飼料			非規格適合飼料			合計		
	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数
R5.3.24	0	0	0	4	4	0	4	4	0
計	0	0	0	4	4	0	4	4	0

(2) 調査事業

飼料安全性確保強化対策事業の一環として、自家配合飼料を製造している農家を対象に製品及び原料の品質調査及び安全性検査を行った。

自家配合飼料利用農家は、標準飼料成分表に基づいた推定値で配合を行うことが多い。また、標準飼料成分表に記載されていないような地域資源の利用を図っている農家もある。

そこで、栄養成分量の偏り等を防止し、適正な飼料給与を指導する資料とするため、表1の農家を対象に自家配合飼料及び飼料原料9点の分析調査を実施した。

また、安全性検査としてカドミウム、鉛、及びひ素の分析を行ったところ、重金属はすべての供試品において適正範囲内であった。

表1 令和4年度自家配合飼料品質調査 調査対象農家の概要

農家	畜種	経営形態	飼養規模
A	乳牛	酪農経営	策乳牛 35 頭
B	養鶏	養鶏	採卵鶏 100 羽
C	乳牛	酪農経営	搾乳牛 100 頭

表2 飼料安全性確保強化対策事業 飼料の分析結果（現物値）

調査農家	飼料の名称	粗蛋白	粗脂肪	カルシウム	りん	粗繊維	粗灰分	水分	カドミウム	鉛	ひ素	亜鉛	銅	鉄	マンガン
		%	%	%	%	%	%	%	(mg/kg)						
A	自家配合飼料	4.5	1.7	0.4	0.1	5.3	2.9	66.1	0.02	0.13	0.06	10	3	211	11
B	飼料米	6.7	2.0	0.1	0.3	4.2	2.8	15.5	0.07	0.00	0.06	16	1	87	39
	豆腐粉+油揚げ	27.9	18.2	0.3	1.3	3.0	6.2	11.1	0.07	0.00	0.15	56	3	198	95
	自家配合飼料	9.5	4.9	3.1	0.5	4.1	17.7	13.8	0.06	0.53	0.41	42	4	284	105
C	小豆かす	2.5	0.1	0.1	0.1	11.6	0.5	74.9	0.00	0.00	検出せず	6	4	32	5
	豆腐かす	6.4	3.2	0.1	0.1	3.3	1.2	72.5	0.01	検出せず	検出せず	5	2	21	5
	ビールかす	6.2	2.4	0.1	0.2	3.8	1.8	70.5	0.01	0.07	0.03	34	1	219	23
	ごぼうかす	2.5	0.3	0.2	0.1	4.2	1.9	76.8	0.07	0.09	0.02	15	2	113	10
	自家配合飼料	6.9	2.2	0.3	0.2	7.6	3.2	54.6	0.03	0.06	0.05	29	5	251	21



埼玉県のマスコット

コバトン